

御陣九州地理八道彦山權現誓助劍

作者

梅野下風
近松保藏

○第一

留侯楚を夷子胥が尸^{しよ}又撻^{かばね}しも讐^{わちうち}を報^{むけひ}し烈孝^{れつから}又美^びを媿^{あらべ}たる女主國真柴^{ちよわらこま}大樹^{だいじゆ}の代^よを御^{きよ}する霸者^{はしや}の民^{たみ}こそ、暉^{かうく}たれ比^ひ天正半^{なかつ}大明四百餘州^{よしき}を奪^{すり}畧^{とど}手^て初^{はじ}三^{さん}韓^{かん}八道^{はぢ}を攻^{せむ}べしとて古昔^{いにしへ}神功^{じんこう}皇宮^{こうぐう}の遐^をく祥^{めでた}蹕^{あらわ}を追^{おひ}勝利^{しやうり}の祈^{いのり}かけまくも住吉四社^{すみよし}又奉幣^{ほうひ}有^{あれ}ば、禱^{ねぎ}宜^{あらへ}が鼓^{つづみ}や神樂歌^{かぐらうた}、乙女^{おとめ}が袖^{そで}又すすしむる神慮^{しんりょ}も、さぞとえられける、幾世^{いくよ}經^へぬらん松原^{まつばら}の宮^{みや}の方よりのつしのし、歩^{ある}み着^き飾^{かざ}る上下^{じやくじやく}も折目^{せきめ}高なる國侍^{くにし}濱邊^{はまべ}來^る一群^{わかれ}も同じ家中^{いぢゆ}とおぼしきがそれと見るより松^{まつ}が根^ね又かい蹲踞^{くつば}てひかゆれば、コレ^く春風氏^{かぜうじ}辻^{つじ}新右衛門^{しんうゑもん}門脇儀平^{かわきぎへい}三輩^{さんばい}連^{つづ}みて参詣^{さんよ}しな、誠^{まこと}又當社^{とうしゃ}の和歌^{わかな}神海^{かい}路^ろ安全^{あんぜん}の守護^{しゆご}又限^{かぎ}らす我^{わが}荒魂^{あらたま}の王師^{おうし}を守^{まも}らんとの詫^{たが}宣^{せん}まさ^ま又弓矢^{ゆうじ}の守護^{しゆご}神^{じん}歩^{あゆみ}を運^はふ心底^{しんてい}が直^{すく}又武藝^{ぶげい}の勵^{めい}といふ物^{もの}、イヤハヤ^{しゃしよ}殊勝^{しゆしよう}又存^{する}す。

斯いふ京極内匠音成公も召し出され新参あがら五百石、各方の師範たるも他家も勝れし微塵流武術も秀し徳也と、上見ぬ驚の高慢自慢俱も身を吹春風藤藏、ヤモ先生の詞へ實も金玉夫も引かへ一味齋元が秀ぬ八重垣流年ハ老たり教方の其懶惰さ、剩此頃ハ藥湯どやら何とやらで豊前へ立越、本國も居らぬとの噂近々異國へ軍の供屬も勵を加ふる稽古ぶら付てい居られぬ折からこちから隙やつて、先生の弟子も成たも殿の武用を大事とするから、ナント忠臣でござらふがの、成程此新右衛門も其元も勸られ、先生へ弟子入仕てからめつきりと稽古が上の我ながら鞠れて居ますとふからふ弟子も成ていたりや、一味齋をも今頃ハ弟子も致して居ませう物、此上ながら幾重よりもヤ此義平めも先生様のお世話より、韓へ参らば適れな手柄がいたして見たふござる、ヤモ成るともいま日本若手の強者加藤が家來も木村又藏、福島も桂市兵衛並も

万圓右衛門等、何程力自慢でも劍術未熟、手柄ハンドルの得せまい、内匠が教ゆる
術を以て異國の敵よ當るならば、樊噲張飛が向ふ共双諸葛孔明が固る
陣でも、破は長者ちやうしゃの枝より易し、そこが所謂微塵流ミヅル、ナ勵まつしやれ。
と、優美ゆうび又見する鼻高はなたか、聲鬧こゑいをがしく馳來る巫かみ、只今中國殿ごくわんぢやん、廉中れんちゆう、海邊眺望
此所をお通りなさる商人あきうどの荷にを片よせ、往來ゆきへ下おり居ませいと、いふ
もいきせきかけ通る面倒めんどうなみ臺だいのと通駕つうか、逢もむづかし堺さかいへはづし、信
なけれど神社佛閣じんじやぶつく閣、一見して立歸らん、逗留たまうら中の大坂屋鋪おほさかや、歸宅後緩りと
此意を得ん、さらばさよならと引別れ北と南へ歩み行程じゆうあく先駆せんぐの歩侍歩玄げん
と玄げんと二行よ並松原、從者じぢやうの胴勢美とも勢みを盡つくし、只繪ただゑのとく三つ星さん、一品の
字じを金紋かなじゆの、乗物木影のりもの、立ければ後乘あとのりの武士衣川彌三郎きぬがわ やす、美男びなんの聞きへ高
般立綠榮ひらだりょくじやうよき松影まつ、床几直せ、かねてより、戀こいする中も吉岡よしおかが娘むすめお菊
が艶あざどりト、此座そのざを設けて待かくれば、戸を開かせて、真弓まゆみの方ほう嬢媚せんめいと

してうづ高きは目よ、沙路を眺め繪ひ住吉の岸の向ひの淡路嶋、哀れと
 だよとつけたる島山へあれじやのふ、は代治りて太平の、空よ狼烟の
 雲もなく地よ矢叫の音をなみ、磯よ群てふ海士の子が何憂事のありて
 やい、忘れ貝取忘ほらしと、なしめならざるは機嫌よ、衣川も岸よつし立、
 姥衆あれ見給へ、あの高根こそ武庫の嶺馬手の丹波路弓手の摩耶敏
 馬芦屋の灘つゝき、名所古跡ひ、多けれど、わきて名高き鷦鷯越、源氏平家の
 軍仕た所、あれと指させべ、姥共が延上りどれく、何所が一の谷、敦盛
 樣を討留た古戰場かと眺めても、目路の遠さよそことしも譯が知ぬと
 なまめからし、浪間よふつと目の付ふ菊やく、は臺様はらうじませ堺の
 沖の方よりもこなたへさして漕寄る船造といひ帆のかけ様、かいつた
 船じやござりませぬか、げよも夫よと眞弓の方、俱よ怪しむ彌三郎も、瞬
 千里波濤を凌ぐ異國の大船足早く、程なく磯よ寄折から、祝部山上倫大

夫白馬を引せ出来り、今日殿下久吉公當社明神へ寄附の此馬頻いはよ々嘶しきて止時なし不審の餘り小製の神輿を鞍の上ま御し鎮め祭れど彌増み嘶く駒の吉凶知さうけで籠中の目通ハ憚り有所なれど、異國退治の大統戎、曾成公の代參と候へば此由ア上まため、則馬も引せたりと謹で訴ふれべ、主従共々顔見合せ俱よ、鞠あきるし神慮の不思議ふしき其駒の嘶く吉凶判斷なさんと船中ふなよ聲高く、らつぱちやるあら路樂の響き、一釣屢ひよ々霜を佩玉音清く邊りを拂ひ、歩み出たる異國の姿、我わの三韓とくねぎの城主車騎將軍木曾官傳もくそくわんへ聞日本神國として神ひの非禮ひきの祭まつりを請うけず、近比久吉といふ英雄世ゆきより出天あまが下さを治おさむといへ共禮樂政刑神明の心こころよ叶かなへず、怒いぶかる神の威德いとくえ撻うちれ扱あつこそ此馬嘶しき止ますと忌憚いふばよらす述のべたるもつての外ほか聞きへたり、眞弓まゆの方打笑たわ給たまひ、そも保元ほうげんの亂より又百餘年の此年月大方あらぬ四海の騷さわぎ切鎮きりめたる眞柴家の武威ぶいをさみするそもじの

詞自ひ呑込みと、胸の一物見透す利發彌三郎つゝと出ア開へた彼カオバン睨唐
の白樂天日本の智惠を計らんと渡つて來たる人眞似して、久吉公の軍
立軍慮の底を搜りよ來たよな、眞柴の神兵程なく押寄手並アシハシ汝が國で
見せん、早本國又立歸り首又名残を惜んで置アシハシ小がしこもアたり
日本ハ僅小國の小島又蔓る眞柴が智惠立、唐高麗を攻アサムとハ蚯蚓が天
上望む不覺及ペぬ事と嘲笑へ、彌三郎ぐつとせき上ア毛唐人の癖と
して腕なしの口がしこく、上をさみする慮外の一言、其脇アシハシ切て切さげん
と柄ハシ又手をかけ詰寄ペ御臺御聲かけ給ひ、アレ待彌三郎土地の廣さをく
らべては、四百餘州と六十餘州、對やうせざる小國あれど、日本は神の開
きし御國、神力加へる軍配又、唐天竺又蝦夷玄らぬ蠻戎が加勢あす迎
も叶ぬ事く、神の擁護の眞柴勢、勝か勝ぬか目の前又勝負を爰又試
ん、コレ此馬の右左付たる双の染手綱西の異國東は日本天照す太神も女
によ

躰なれバ真弓が代り、妙ふ菊手綱を取て引く程あらバ神慮^{しんりよ}又任す即座^{じそ}
占引^{ひきかう}。勝方ぞ勝軍^サ、引給へ木曾官^{いそふる}、いそふれお菊と奥方の差圖^{さしおず}にすぐよ
軍配智畧^{ちりやく}のつ引ならぬ木曾官ふせうド^{ビキ}又立寄^いべ、おもはゆあがら主^{まは}
命^{めい}又是^ぜ非^ひなく菊が取手綱^{うしろ}後^{うしろ}又扣^{ひき}へる彌三郎^{ミツラ}、^{コト}か菊大事の場所必負^{まは}
て貰^{もら}ふまい負^{まつ}しも惚^{ほれ}て居る、男のかけ聲千人力、其外家中の面々が
こなたよ力め^め磯^{いそ}よハ下官^{しやくかん}互^{たが}よ臂^{ひぢ}を張^{ぱり}かけし、唐と日本の勝負附賣^{しやうぶづけ}
も見たき心地^{こころぢ}なり、^{サア}女、唐人様引しやんせ^{サア}と木曾官手綱を腕^{うで}よ身
を入れて、引^ひといつかな動^{うご}かぬ^い不思議^{ふしきぎ}と五^ご躰^{たい}の力を入^{いれ}、引^ひぞ志^しやくれど
四足^{よの}をかため、地^はよ生^う抜^{ぬき}しごとく也、お菊^{おぎ}の吹出^{ふきだし}し^{コト}家^{いえ}や羊^{ひつじ}の肉食^{にくじき}に、
穢^{けい}れた腕^{うで}で神の馬、引勝ふとはあらぬ事、馬は斯^かこそ引ものよど、志つか
と取りし轡^{くわ}づら引^ひベ正直^{すなお}又引^ひれ寄^{まよ}波^{なみ}の、鼓^{つづみ}の神樂^{かぐら}、こしよ響^{ひび}きてとふと
みの武威^{むい}を守りの神德^{かみぢく}奇瑞^{さい}空恐ろしく^{たれぞ}雪^{ゆき}けれ、したりしと付^くが、

どよみを作る勝鬨かち、木曾官顔色せき立ヤアとこへ神徳、女によれる髪筋
 よハ大象ぞうも繫つるがるためし、よし／＼それも無益むえきの争あらそひ、イテ夷國ゲンの幻術奇
 特目サク、物見せんと手を挿さわき、口よ唱とひる秘密ひみつの呪文じゆもん、驗もんじるは目前白波の漲みる
 る海上三反計、潮干潟しおひがたと土砂捲どしゃまき、上平地とこそは成なみけり、下官共聲揃そろへ、
 打笑たわふ、真弓まゆみの方ちつ共動おどせず、南無や住吉大明神、沙滿干さまひるの力を加くわへ日
 本ほんの銳氣あざきを添給そなへへと、一心こらす再拜祈念さいぱいきねん、空よハそれと白鷺しらさぎの梢こを離
 れ羽叩はねし海よ向むかつて飛とと見みへしが、替かりし水尾みずおハ忽たちまちよもとの深海ふかみと返
 る波音なみごゑと漲みさきれり、ハッと思おもひず木曾官恐れおのゝき頭かしらを下おろ、期間あ
 らんとい知しつれ共とも術じゆを頼たのみ、慮外りよがいの段々恐おそろし／＼御蔽ごひ免めん有あて此以
 來、永々ながなが長門ながの臣下しもべとならば、轍わだちの魚うおの勺水しゃくすい、命みことを延のる身の大慶おほき偏へん々へんへん簾れん
 中なかのお執成おぢゆう宜よりしく頼たのみ奉まつるとほつきと折おりし我慢がまんの矢先、奥方御機嫌おくがたごきわんう

るハしく懲悔^{開きなげ}又憚劫^{わくごく}の罪も亡^{はな}ぶ、今も異國の邪術をやめ、神國不思議の威^いみなびかべ、いかでかいなみ給ふべき、けふの様子を我夫へナ上るも歸國^{かきに}の上、重^{かさね}て逢ん韓國人、さらばと直^す引弓の、眞弓の方^{かみがま}の神垣^{かへりもうち}、賽^{さい}の供^{ども}壱^だへ神馬^めの跡^{あと}、山上^{さんじょう}が手綱取^く木曾官^は馬鳴^{めい}も儕^{おの}が來たる神の徵^{しゆ}と白波^{しらなみ}や、磯打寄^{いそうちよる}も、豊^{ゆたか}みて戸ざし^{とざし}ぬ御代^{ごしろ}の盡^{しあ}き

○第貳

豊前^{ぜん}の國彦山とナリ、其麓^{よもと}後筑前^{ちくぜん}の三國^{みくに}より、九州無双^{よしむうしょう}の高山^{たかやま}みて、峯^{みね}又上古^{じやうこ}の神在^{まし}、筑紫彦山權現^{ちくしづかん}と山を^{まつ}名^な呼^{よぶ}千鳥^{せんじや}、立木^{たてぎ}も古^いて岩^{いわ}曠^{こう}たる十の谷五十の窟^{くつ}、第一窟^{くつ}を^ほ本社^{ほんしゃ}と仰^{あお}ぎ尊^{たん}む、神德^{しんとく}の靈驗^{れいがん}四方^{よんぱ}よいち玄^{くら}るき、さまよつけたや此枯柴^{かれしば}と、やせてこがるし思ひの數^{かず}を、諷^{うなが}ひつれたる柴効^{しばこう}が、聲^{こゑ}ひしあき山戻^{もど}り、鳥居^{とりい}の前^{まへ}息杖^{いきぢょう}立^{たて}、ナシト皆^{みな}ハ^どふ思^{おも}やる、此様^{よう}又汗水^{あせみづ}たらし年^{とし}が年中^{ねんじゆ}山^{さん}勤^{はたら}き、身^みを碎^{くだ}いても儲^{もろ}からぬ此末^{すゑ}

のどふ成ぞい、そふ案じた物玄やあい、今の殿下久吉様へ、元が奴の二
 合半、それがあの様又立身して六十餘州を取れたりや誰出世玄よまひ
 ともいはれぬぞや、それく待ペ甘露の日の本ハ取たれど又三韓を
 攻取てし、能有者ハ大名からほしかるげな、物を取ぬ者といふか、大飯喰
 とか尋て來たら館突すまい物でもあい、夫又付て思ひ出した、こちの村
 の六助、兵法がよいげなの、其上又力が強ひ、柴といやこちらが五六荷を
 一荷又東ね長濱迄日又五六度其癖形又似ぬ孝行もの方よりから抱ふと
 いへえやつても、母親の傍離れるがいやじやてし行ぬどりきつい鹿相
 の、此様な働きさせうより百貫ましの侍商賣、おいらなら行ふみな、たん
 と休んだツアいのと打連坂を下り行、古木回岩雲又聳羊の脇の坂道も平
 地と歩む六助が、柴荷をふろす鳥居前、木の葉つまんで乾鹽宮居遙又禮
 拝し、岩頭又腰打かけ、一ふく致さふと燧かちく吸いかける煙草の

けふり風よ消空よぢられぬ鳥一羽ばたりと落る膝の前怪と見れバ諸
翼を矢よ縋れたる山鳩也、ア玄たり、獵夫のねらいそれ、翅計をとぢける
よあ、六助が目よかしりしハ運助、いまだ盡ざる此鳥放してやらんと矢
を拔ベ、さも嬉しげよ羽叩し雲井遙よ飛去たり、ア悦んで飛ハく、我等
の宿よ歸らふと荷を擔んとする折から、半弓携へ畠影より、二人の武士
がうろく眼六助を見て互よ目配せ、中よ取込キ下郎め、うぬじやな奴
じやな、殿のお鷹の餌よ射た小鳥、何で矢を拔放して遣た、返答有バ、ぬか
そふと切及廻せば手を摺もみ、どなた様か存せね、どに狩の鳥と存じた
ら、ナ何しよか様な不調法、只獵人の射損じと何心なく右の仕合せ、下主
の智惠ちゑの跡でのお詫真平は免下されど、詫ぶる弱みよ猶付込、アならぬ
成ぬ、厥の公用をかしした儕、館へ引立糺明すると、左右一度よ引立る、
人が手先を乞つかと留調イキモ幾度もお詫云々了簡下されよと放す手より

も引ばづみ、儕が力で尻餅突せきよ赤面鎧打たしき。諸侍を投たゞ
よ、手向ひをひろいだな下主と似合ぬ生兵法、ぶち放さんと拔打の刃
先をひらりと又腕首取れて骨も碎くる計。くくぬこりやどふ仕かる。
何と仕かる、何共致さぬお詫言聞分もなく刃物ざんまい。あなた方より
怪我がなふても、私が身より事有てハ宿より居ます獨の母路頭より忽飢渴
の難跡の歎を惟察下され、只幾重よもに堪忍といひつゝと一握り、
手先しびれて取落す、白刃と五肺山路と、どつさり二人が打返され、ほふ
ほふ起てアタカとしかみ頬、く重ねぐ。投たぞよ、弓矢八幡聞ないと云
たけれど、鳥から起つた意趣だから放生會だと思ひ助てくれる、以來我
毛殿、お互よに苦勞と負ても、遠侍の行儀崩さぬ兩人は、弓矢拾ふて立歸
る、六助の跡打眺め、扱もくこまつた衆連、ア無得心な心もなく、人の

國を奪取合戦も玄られまい。此身又怪我けがも恙いがあふ。いぬるも彦山權現の
神の力と伏拜ふがいみ、母者人おやしんじんが嘸さそ待まつかね。歸かへらふと着物の塵ちり打拂うつぶふ後の方、
ヤレ暫くと聲かけて威有て猛き武士一人、傍近く威儀を正し、某たゞハ當國の
隸臣名なまハ蘿は傳つた五右衛門、イセキ苦しみないお手上られよ六助殿、武術力量
兼備かねそづへ九州無双むそうの譽ほめれ高く、主人立花修理太夫召抱めしへんと頻りの懇望こんぼう
去はなよつて先刻毛谷村け立越、貴殿の宿所すくしょと至りし所、此山中さんちゆうと承り、
參りかゝつて今の様子、恐れ入たる貴殿の舉動、誠や千鈞の弩いじゆハ鼷鼠ねずみの
爲ためニ其機きをはなたず、相手ならざる相人あいじんと構かまへず、詞ひを卑下ひげして無事を
計はかる心の度量たぐりよう適つくく、今より我わと伴ともつて主人が館たてへ入來いりらる下され、弓矢
を補佐ほさしたまわらば大悦だいえつならんと大身だいしん、大身だけよ身をふかぬ、胸の
器量きりょうぞ奥床おくとこし、六助ろくすけの氣の毒顏どくぎやう、これは又きついおなぶりなされ様、獨ひとりの
母おやさへ養やひ兼漸かねん小柴こしばの荷にひ賣うり未熟みじゅくな藝うがほ目め又留るり、面目次第めぐれも

ざりませぬ、中より一つも武家方の役立べき者あらず、此義に達てば
 用捨と媚諂ひぬ魂を見込程猶かうばしく、開徳を包む賢者のなれば
 い、ほ尤との存すれ共、夜光の玉やくわの卞和が極め、貴殿の才器さいきへ見抜た某ごとう
 更近さうぢか異國攻軍用士卒ししろう事かしぬど、只乏とほしきは軍師の器量、拙者しやくしゃが詞しき
 承引有何卒しゆく入來下さらば、虎とら翼つばさを添たる幸、いかなる異國の大軍も
 敗るよかたき事有まじ、ほ用意とせき立て、六助ろくすけのむつと顔あほ、置しや
 ませいの、あたしつこい何の扱置其合戰そのかうせんが不得心、手一合でも主取す
 りや、叶わぬ場所の命がけ死しんでの親を歎かず不孝ふこう祿ろくも知行ちぎょうも國郡こほも親み
 見替る寶たからへござらぬ、奉公する氣きの露あしとけんもほろしと取合すあつ
 すりや何とやてもや、ハテ是非ぜいもなし、其孝心こゑんをもつて君よ忠義ちゆうぎをなし
 ならば、玉燭季札ぎさつが節烈せつれつ、おどらく劣ひどぬ國の寶、あたら文武ぶの弓ゆ取を
 摺すりき得ざるも主人おとねが不運ふんりょ、強いんていひんも孝心こゑんを妨ぐる不遠慮ふんりょ、もしも者

毎百年の壽命を持身を終られても有あらば、其時他家の君よまみへす、必とも拙者よたより主人がもとへ召入來下され、轟がけふの貴殿へ頬み、無下よ仕給ふ事なけれど云捨手束弓取の心ハ諸葛孔明を草廬よ訪し玄徳よ劣らぬ才智大國の幅を見せたる家老職山下をさして歩み行跡を眺め横手を打、よき侍も有物かなと感じ入日の照かへす森の影より、六助くと呼聲よ迄り見廻し、おれを呼へ何所からと見やる茅原かき分て誰と白髮の翁の姿頭よ鳥帽子身よ白張杖よすがりて顯ぬれ出、さもやひとなきほ聲よて、いかよ六助万石の祿を辭して一人の母を養ふ、孝心といひ義心といひ、慈悲正直を元とせる神の冥感淺らす、我ハ高良の神の使此一卷ハ汝が好る劔術奥義を記せし秘卷只今授與ふる間家よ歸つて開き見よ、四海を撫る劔の威徳皆其中よ有べしと差出し給へば押戴き悦ぶ隙よ神隠れ翁の見へす成給ふ、六助感涙肝よ玄み、

有がたしく、日頃望みし此一巻神より授け給へるといふ添なしと押戴き、心も空も飛鳥と俱も我家も馳歸る跡へ以前の二人の侍、先生の何所もおひす先生くと呼聲よかしこの方より件の翁、歩み出たる目前、兩手をつかへ謹で存念首尾能達し、才力奇絶の六助よ印可を傳授相濟で恐悦至極といふ聲押へシ音高し人や間、望足ねる此上の急いで國も歸らんと、烏帽子かなぐり身も纏ふ白衣を脱ば神人と見へし姿の一味齋杖突音も囁しく、今一聲の郭公待ねどくれし山路を本國さして歸りける。

○第三

周も服せぬ頑民も殷も忠の至れるをや長門の大守郡音成、真柴も弓取も時代も靡く武威強く殊更今度三韓を攻伐君が名代家の眉目と一家中賜る酒の杯盤も狼藉も迄賑へへりけふ一日い下くみは

庭拜見赦さるゝ白洲みどやく立ち留り、皆の衆、何所を見ても結構な事ぢやないか、お泉水の石一つでも大まいの小判道具と沙汰開て、おらの魂消果たひよ、お目出たなりやこそんな所、長生すれば徳得まするよ。ナ、ソ、此お目出たの根を問べ、元が奴の久吉様打てハ勝攻てハ取、亂を鎮め太平えさつぢやつたハきつい其身の大功ぢや、テシヨあなたを大功様といふ、ミ其大功様が唐を取てシヨ軍の名代此殿様がさつぢやります、重い役目を請取ぢやつたも運のふ強い故でシヨそれでけふのふ目出た様ぢや、廣い日本が取足いで唐迄も取ふとは、武士の腹といふ物ハ分な物じやないかいの、拵あなたよ限らず侍といふ物ハよき敵と見やりあの首取たいよい國と見りやあの國取たい常住丁とこちとらが、女見た様な氣持ぢやと仇口とス奥庭へ一群よこそ歩み行跡へ白洲へつゝかつか秋も桜木の房州と二字をゑるせし三度笠立はだかづ

て見廻し、とんだく普請何所もかしこも金物と縮すくめ、何の事
 ねいに門徒宗の佛檀を見る様だ、大名よや何が成、金のなる木も有かい
 と、羨しげと立折から、一間洩来る笛鼓亂舞の調音も高し、聞へた、けふ
 の家中の無禮講、此別館で藝盡しが有と聞たが、それだく、漸此比治
 るともふ早亂を忘れたほたへ、それも何の構ぬ事、是から奥のお庭
 廻り、拜見すべいと遣水の岸を傳ひ、歩み行、奥座敷よりおふ勢がいや
 いやどつと譽る聲、鷹の間の穎明、出るお菊が舞の袖、汗拭ふやらあふぐ
 やら、必共が寄たかり、千草面白い事、やなかつたか、慶子の所作も及
 ぶまい、イヤもふく及ばぬ段か器量なら舞ふりなら、天津乙女の舞の袖
 天人よ見せて、拘りがさして見たい、臺様よも殊あり、臺美、衣裝直す
 わ我らが役、そもそもそこで緩りつと汗入る間の咄し伽情郎様を今
 爰へおこすもわ我ら仲間から、そもそもへ花の縫小袖手と持て入しけ

る、夫としも犯せる事へなけれ共、戀みへ人目忍び足、一間を出る彌三郎。
見る乍こなたへ飛立ばかり逢たかつたと寄添バコレ又邊りの人目忍ぶ
戀路を見付られどふ云譯をする氣じやと呵られて涙ぐみ。其逢見る
も常三へ堅い屋形の打解とけて、逢夜まれ成七夕の織女様も此様このよ思ひこ
がれてござるか志らぬ、ふたりが中の彌三松を生落したも四年前、姉様
のお世話おせわなり、古ふ勤る友平が里さと預けて育つれど、それから後の奥
様の傍離そばはなれぬ奥勤おきん、嚙可愛あひらしふ成て居よふ尋ねて居よふ志とふて
居よ、顔が見たやの思ひ子も、思ふ夫も他人向我夫よ共我子共いられぬ
様なあぢきない縁が世界よ又有ふか、人目忍ぶの戀草こいぐさも、日影ひかげも枯かれる身
ならずば、假令虎臥とらすやす野邊なりと、親子三人居て見たい、思案してたべ彌三
郎様わしや手枕たまくらの現うつよも、忘るゝ隙ひまない亥いやくり譯わけも涙なみだよかきくど
くさそふ思おもやるも無理ならぬど、儘まへあらぬが浮世のならひ縁と月日

へこゆるぎの急がべ廻れ其内うちも仕様しじやうもやうも有あざいのと云つしじつ
と引寄ひきよて雪の手先ててみみし、妹背いもせわりなき折たわこそ有あ、花はなと嵐らんの足音あしゆゑとん
とん、驚おどろくこなたこなたへさあらぬ脉は、仲間なかま一人ひとり白洲しらすみみ踞くひ、猿さるの眞似まねする小童こわらわ
を連たる下郎げらう、今日の遊あその折たわから何卒なんぞ悴くわいが舞まいの一手上ひとじょう様さまの上覽じょうらん
人度望ひとどむかみ、門門へ參さんり相願あいがたひひがいかゞ計そなへらひひやさんさんと、伺まつへペ彌三郎みさんろう、
幸奥こうおく様さまも入いせらるらるれペ一入いつじゅのの慰なぐさ、早く通とおせの下知げちを受うけ下部げぶへへ門門
へ走はり行は斯かと披露ひろうえ付つくく、が數多あまた傳かしまき眞弓まゆみの方ほう、座すえ着給きよへペ舞童まいわらべやが
てて前まへ立た出だる、五つ計けいのうなひ子こが、髪かみも二葉ふたはの抓鬚つまみゆき、抓つまからくらげの愛あい
しく、猿さるの面おもてを氣きさんじじ、白洲しらすみみこそそへ走はり込こ、跡あと付添つき添男おとこが高聲こゑ、
何なにば疊敷たたみた様ようなお庭にわでも、そない走はつて蹠つまいたら、手てよや膝ひざほん摺すりむき
ましよ、ハイハイ、前まへ玄くつや、居ゐしからしやれべと手てを下さ踞くふ顔がほ、一目見ひとめ見る
よりお菊おぎが恂ゆきりヤ友平ともひらか預まけたる子こへそれか共とも夕ゆふ顔がほの、立た寄よんよも海うみ

前の手前差扣れど大方へ、上よも玄ろし召るらん、下よひ男が杖玄やみ
構へ、廻らぬ舌で一寸ナ上ます、此猿めい生れ落るから、爺てつじはも母はははも
ア、親猿のない正眞の木から落た孤猿みやしどざるでござりますが、此小猿よみたつ
た獨ひとりの伯母おばがござりますが、此伯母猿モウくそれへ、並大躰まことの世
話はながやござりませぬ、それでも親子の縁ゆゑとや物もの、厚い物ものでござりまし
て、どうし様ようが見たい、かかし様ようが見たいと、常住親じじうじんを玄あらわします其そのいとしは、
今日よの無禮むれい講かう、多くの人の入込いりこもし其中うちよ、能似のぞた人もござりましよ
かとそれ故ゆゑく連つづて參さんりました、只今舞まいせまするも、たつた三日さんじつの稽古けいこ
でござりますれば、不調法ちやうぽうがちでござりますれど、首尾能しゆびのぶ舞まいふせまし
てござりませうなら、外ほかよ何なんよも望のぞみまする義ぎへござりませぬが、ほ褒ほほ
美うつくみ此猿このさるめを抱いだておやりなされて下さりませ、ナ猿殿さるどの、ヨリ去はなりと
くきよろく玄あらわた太夫たうふで、有あいの、ガ又また見たがるも無理むりじやあい、親

ほの傍よ有ながらゞゞ、母ほよふ似た伯母様が有りてし、子供と云物
 の扱ハセもくく、扱も目出たの秋津洲や、こがね升スルみて米はかる「米は
 かるひんだの踊ハツの面白やく、べいよかゝ様やとゝ様よ似た伯父様や
 伯母様ハセどれじや、無理云まいぞ舞て仕廻たら跡でべいがいふて
 聞す、舞たりく、よさの泊ハシメり何所が泊りじや、おらが内ハシメて袖枕ハラタカく
 乳房ハラタカふくめる親もなく、子ハチも泣、おらも泣、なげぞ志たへど名のられぬ名
 のられぬ、ひんだの踊りの面白や、舞ふさむれば、眞弓の方ハシメ機嫌能ハシメ年
 はも行ぬ稚子ハサキ子ハサキ教ハサウエへも教ハサウエへ舞も舞たり、付し男が言の葉ハサウエ、かく並ハラタカんだ
 る其中ハシメ、母ハサウエよふ似た伯母の有ハサウエ、志たふ子ハサウエよりも志たるゝ親の
 心ハシメの懸ハサウエや懸ハサウエ、お菊彌三郎、そち達ハサウエふたりも今の間ハサウエ、似合の縁の妻夫設ハサウエ
 るやしの抱ハサウエあらひ、抱ハサウエて見るのもよからうと情の底意奥深く、入せ給へ
 ペ姫共ハサウエ、これからがこちの世玄や、其子爰ハサウエへと様の上、抱上させて取廻

し、色もくつきり、手や足の尋常さ、年といいくつ、とは程と右の手の指ひろ
ぐれば五つかく、そしておかし様へどふ仕やつたぞ。わしやかし様
もどう様もない、よふ似た伯母様や、伯父様を見せるてし、べいが爰へ連
て來た、可愛そふみ孤か、こんな子産だ母様なら嚙器量よしと思へる
る能似たと有からひ、わしで有がの、そんならわしが、そんならやつ
ぱりわしで有、おれがべしと、伯母様のべしと、一つ玄やみよつて、外
の伯母様へ、いや玄やア伯母様み抱れたいと、いふも天然親子の縁傍み
かけ寄抱付、彌三郎も聲うるみ、利口な小猿め、抱てやれよと奥様も、お
赦しの上誰咎ふ、親とまがへてしたふ其猿、心ゆるしとつくりと、抱て
やられよお菊殿といふは抱たき百倍の思ひも一つ兩の手よ、菊が引寄
引しめて、わがみの様なよい子を、孤となし置露のたまよ逢見る顔だ
よも、親共子共、名のられぬ邊りの人目、横障の雲の隔てしさづらさ餘

所ところよりかこつぞいぢらしさ、様の下げよりは友平が浮む涙をすりこす。親の子を思程、子は親を思はぬ物とい。此子から見ひとや諺の間違ひどなたもお聞なされて下さりませ、子細有て其お子は人目を包む預り物、親にはがないといふ玄やなし、逢せたふても見せたふても、儘ならぬ浮世のならひ、隠し育る高屋葺場せまい住家の背戸門を、よその子供が母親や、爺親よ手を引れたり、抱れて通とおいやけなりがり、べいよ、おりやとと様やかと様さまになせあい、とと様さまよ逢せかとと様へ連つづて行ゆ行くされとたとける子を漸だんだんすかして寐ねさせられ、現心うつ心よお袋と思ひ違ちがへ、べいめが乳の山椒粒抓さんじょくんで見ては目を覺さなし、かとと様さまく、と泣なしやる時のいちらしさ。イヤイヤ是を愚ぐへペ親子の絆程、せつない哀れな、いちらしい物はござりませぬ、是を思へペ釋迦如來様が浮世うきよをいとひ捨るよは、女房持などおつしやつたとは、身よしみドと尊そんい教きょうへ、親達の心の内うちも、推量すいりよう仕つかております。

い／＼＼＼けふは殿様のお目出たで、無禮講の御遊も有、お庭拜見も免
の疇、承つた嬉しさも、打通りで、お庭計、どふぞ爺様や母様よ似た、お二
方のお顔をよつしりと、見せたいて、いの思ひ付か、枕を割た猿の舞、其覺
へのよさしした事が、たつた三日で、お聞なさいたつた三日、モ僅な日數
で覺へざるやつたも、器用でも利發でもなく、おとゞ様やかも様よ、がや
ない似たお人よ、逢たいと思ふあの子の一念、眞實の子の様よ思ふて抱
てやつて下さりませ、コレほん、日頃夜も晝もこがれさしやつた程、とつ
くはと抱て貰ひつしやれと、いふも眞身の友平が、せつあき咄し傍よ聞
め共も諸共も思ひやつたる貰ひ泣涙もろきは女かや、「一間の内より彌
三左衛門、奥方の賜手よ捧しづゝと歩み出、彌三郎、殿よ召るし用ぞ
あらん、行くお菊殿もいづれも奥へと、嚴しき父の一言よ底氣味悪く
彌三郎、其場を立べ一同よ皆打連て入よける、彌三左衛門持出し、臺の物

様様よ取置おき、緋縮ひしゆく、緬めん五卷金子の包稚おひなき者へ下さるゝ、有がたふ頂戴てうだいせよ。レ
 小兒爰あそへと膝近ひざく、そちが名ない何なにと云い、彌三松ミツマツ、ナニ彌三松ミツマツとなト、顔見せ
 いラン額ひたのかしり、目の張はりは爺じい、親めおやぢみ生寫いきらうし、瓜實うりじゆ顔がほの母め、其儘チセ能似のぞた
 ああと、サ我の祖父ちじが傍そばに居ゐべ、喰斯くそいふで有ふ物もの、殿とのお影かげで祖父祖母ちぢ
 も親おやぢも出だるゝ供そむ、それ又引ひかへみすぼらぼらしい、まめな愛顏あいがほ見うたり
 や嬉うれしふて恨うらめしかろ、寡うだでは果はたさぬ駄おがれや娘むすめ思おもひ初はじたら初はじた時どき、親おやぢへ打
 明あきら云いおつたら表向おもてむきから三さん九く度ど、可愛かわいひ孫まごを世間暗よれ抱いだて眺みめて樂たのしむ
 はい、我子わがこか孫まごでも有様よ、そな男おとこ、秋あき音おとこする萩はぎの葉はも、おののが身みか
 らの音おとこねど、風かぜがわやくわやくで、わやくいわやくいふと見たかろと、逢まつ見みさせ
 つする程よそ、餘人よその目めもよく見みゆる、さすれば孫まごが不便ふべんでも、云いまげ
 られぬ、お家の撻大事たきての大事こと、掛かけて連つれ歸かへれ身みも歸かへらふと弓取ゆき、迷まよふの血脉けいみゃく、稚わらわ
 子こを連つて二人ふたりの打うち志し、俱とも「我家わたくしの歸かへりけり、お菊きくの恩愛おんあい稚わらわ子こを、今いま一

目見たき間の戸を明て立出る後も伺ひ居りし京極内匠、ヨリお菊殿出来ますのゝ、内匠様何ぞややら出来ますといへ何がいな、ヨリ又きついお隠し、こつそりと子迄設け、イヤモ舅殿の粹さ當世、花も耻らふあでやかさ、引手數多の元より推察、カ戀ひ心の外よ、何ぼ男が有と儘よ、日外ふつと見初てから思ひよ瘦た此京極叶へてほしいと抱付手先漸み拂ひ退、めつそふな事計、ざれよ事かき役柄の重き身乍ら不義徒事顯へるれば身の上よ、成の合點惚かしつたら金輪際くどいてぐくどき抜、扶持も知行も塵芥、ふふとさへいや連立て爰をほい都へなりと東へなりと立退思案内匠が心底何と憎ふい有まいがと立寄折から一味齋、そぶりへ見れどさあらぬ体、娘、そちや何用では是よ居る、年わかき女の端近、惡名請るもとひとゑらぬか行くと追やつて、調テ京極氏貴殿と我の殿の御師はん國よ二人の釣術と人よ知れし身の放埒、人なき折を

幸と御異見を止り召れ、リヤ老人の深切至極添い、か聞氣ござらぬ、いやでござる。そふお手前が知上のもん隠さぬく、貰ひたい、イヤサ息女お菊を我妻より請たい吉岡殿、アだまり召れ、定を乱して色も溺れ、法も背し、今の一言、上意も達せば明日も知ず、腹切は邊も連添す。娘の吉岡持合さぬ、リヤ承引のどふ有てもや、ハテ忘れた事を、麒麟の子を鼠が念がけ、妻も仕たがる望事叶へぬ限りと苦笑ひ襖引立入ければ、承引せねばうぬが首娘も添て請取とかけ行京極かけ出る東藏、ミ、お待なされ先生様子の小影で承ひつたは立腹の尤なれど、今先生が手を出されて、懇の意趣討人聞悪し恨を晴す趣方の、ミカクスと耳も口も實尤きやつとは前の試合を望ぶちすへた上でつへい押、手も入る菊の前奥様一家となれべ恨めさらり、こつか斯して行ぬ時の仕様もやうも又様よ、せく所でござらぬと、武士の道より内心の邪智も勝れた兩人、黙頭伴ひ入跡へ

又是老て釻鑠たる授化の夷人木曾官何か白木の箱物を手々携へて入
來れば、アリヤ唐人が來たげなと追々出て來る、妙共物見高いの常なれや、木
曾官立向ひ、いゝきいちんたんやあこらはんいつゑつしてさいたくと
うらいゑいゑいくとこそいひいるし、妙共の顔見合せ、ガ、久しい物
玄やがアリヤ何といふ經玄やいのふ、あれこそほんのちんぶんかん、譯ハ
知ねど推量が器量のよい同士此様も並んで居るを唐土のおだて文句
で有まいかニヤくもしもあれが物ナといふ案内詞の唐様なら聞流して
ハ越度の基マクは前へ此通りと案内よ連て一間八月の真弓のよほや
かヌ立出給ふに姿見るも、バツと低頭平身恐れ入て躊躇べ、奥方斜ヌ見や
り賜ひ、過し頃長居の浦邊みて初て目見へし三韓人、サメやかな躰悅
べしと仰の下ヌ額をもたげ、誠ヌ其節願ひしどく異國攻伐の統戎た
る、晋成公の武徳を玄たひ歸降を望、木曾官、一度拜見し機縁をペ捨られ

す宜しく後披露下されば、味方々先驅異國の案内適三韓八道を後手み
 入ん瞬く内、則是こそ彼國の山河を縮め畫し地理の圖、拜謁の印として
 は覽よ備へ奉ると件の箱物恭々敷廣様よ差置べ、夫こそ我夫兼て、
 望み給ひし韓の繪圖、それく此由ゆせよとの給ふ聲の内よりも、聞た
 聞たと太守音成ゆふくと裾よ座し誠や蕭何相府よ地理の圖をとら
 ずんば、子房賢といへ共計畧ならじ、いしくも手よ入此一巻、逆もの望本
 曾官、猶もくにしく物語聞してんやと有ければ、ハッと領掌庭上よ目よ見
 るとく述よける、先日本ハ五畿七道、我三韓ハ八道よて、全羅慶尙京畿道
 是ハ日本の五畿内よて、帝の在す都也、其外うるさんとくねぎ城船のか
 かりハ釜山海、味方の船を爰々とレメ手いたく攻入程ならば、久しく治
 まる世よ馴て、戰ひ不得手の三韓勢立足もなくちりトよ逃るを射留
 捕首の代りよ切耳を、後大將へ後土產よ上る勝鬨勝軍只手の内よひ

と、乍上れべ音成夫婦實いさましき物語、奇成畫工の手際やと、目枯もやらず見る折から、かたへよ忍ぶ以前の道者、玄げみを這出地理の圖を、乙へごひそつと差視き、我を忘れて高笑ひ、ヤレくおかしや此繪はまつかいな嘘八百、此様な物を以て來て抱へられふとい、ミ、太い仕事と嘲笑ふ木曾官大きよ怒り、ヤア大切の圖をさみする曲者、うぬい何やつ何國の匹夫、ヤモ何所の者迎身へ玄れた關東者、先年堺の小西へ行て誠の韓の地理の圖見た、コレ繪圖山を川難所を平地とまつかいさま不審の晴ぬ捧げ物、皆様油斷遊ばすなど、云も切せず木曾官、せき立、佩劍拔手も見せず、只まつ二つと切付る白刃を杖みて丁と請留、其手玄やちつと行ないと刎れば付入二人が争ひ、近習が聲く、殿さまのふ目通り玄づまれよと制され共、聞ずひるまゝ戦ふ有様音成怒つて、ヤア誰か有我見る前其憚らず兵刃を振不敵の兩人、搦捕て引すへよと、下知よかけ来る吉岡京極、上

意ありと大音、肝取ひじく武の威光夷は内匠が手ひ搦道者へついよ
 一味齋くし上たる其折から久吉公の成と白洲入來る窟竟の武
 士手ひ捧げたる太刀一腰恭くしく座み通り某義は久吉の郎等櫻井新
 吾此太刀先君春永在世の時片時離さず帶せられし蛙丸と名付し尤物、
 君を弑せし明智が叛逆本能寺の大變聞へしは此地より軍をいどむ陣中、
 當家の大軍虚み乗て後を討べ山崎の一戦かたかるべきより安より明智を
 討し事偏み和睦を承引有し音成公の情よりれり高義を謝する此一品、
 けふのふ成の土産として進上との事也と使者云捨座を下る音成
 謹で太刀押戴き有がたきに賜家の面目此上やひはんシテ大將は
 真柴大領久吉それへ行て對面せんと思ひがけなき件の道者繩引はど
 き笠かなぐり忽替る貴人の勿躰衣服改め寛然と設けの席み座し給ひ、
 誠や久吉愛智郡の土民より産れ、日本を平呑し武將と成迄其間草履取

より押上り柴田が肩の按摩取、賤が手業の種々様とせざる辛苦もなかりしかど、繩かゝつて見しは初めて、運盡擒と成族、嘸口惜く思ふらん、去よても一味齋我を捕て高手小手くし上んと思ひの外、繩を纏し計みて、小手をゆるせし所存を聞ん、恐れ入たる君の詫意貴き事天子よつゝき富四海をたらたせ給ふ君との存じよらぬ共胸よ徹する貴人の相形繩とる腕も玄びるし計、それ故小手をゆるせしとな面白し、京極内匠とやら、そやつ異國の紛れ者尋問べき子細有共、中々一應再應での白狀すまじき頬魂、刃物を奪ひ桎梏を嚴敷し、獄屋又繫ぎ置べしと。上意又猶豫繩付を引立へ入みける太守重ねて威儀を正し數あらぬ愚臣が茅亭、傍を入られ下さる事大悦此上やいへん、鹿末ながら奥殿みて一献すしめ奉らん、渡はあ玄下し置かるべしと上れべに大將、淺からぬ深切辭する無禮、然らば其意又任せんと仰嬉しく奥方も

は案内とて諸共又座を立給ふ其所へ、衣川彌三郎あひたゞしく罷出、三
韓の木曾官獄屋^{ごくや}又繁^{ます}ぎこれ有所^いか成術^{じゆつ}をかなしたりけん縲縕^{るいづ}の繩
目を脱^{ぬけ}、真弓の方の守り刀奪取て行方知れず、ヤ譯の爲切腹^{せちふ}は赦免^{じやめん}下さ
るべしと願ヘバ音成顔色^{がんしょく}變じ、は大將のは氣色^{はきせき}を計兼^{はかりかね}たる色ろ目を察
し、衣川とやら、小氣成若者、曲者一人逃^{にが}せしとて腹切んとハ犬死^{いぬ}く、侏
離鳥語^{ちやうしき}の夷貌^{ゑみよう}のわざくれ、遁れ去とて何事をかなし得ん聊心^{りょうしん}を勞すと
たらず、今死する身を生きながらへ三韓^{さみ}攻の軍中^{ぐんちゆう}又明兵數百の首切か
け、異國^{いこく}又揚^{あが}る譽^{ほまれ}をもつて、けふの過償^{あきまちづき}んとは思はずやと人を殺さぬ寛
仁^{じん}大度胸^{ひだい}江河^{こうか}のはかりなくとうくととしている弓の矢^や又似ずゆが
む心より、心苦しき京極内匠^{きょうごくないしやう}、白紙^{しらはな}又包む願ひ書^{ねがひじよ}を椽^{くわい}又差置^{ひせよせ}平伏^{ひよせ}バ、音成
手^て又取逐^{うちひけん}一披見^ひし^{ナニ}内匠此願ひ書^{ねがひじよ}一味齋^{いまい}と試合^{しあい}の勝負^{しゆふ}が望みとあ、
善^よらぬ願ひ、一方勝^{かつ}ば一方^{うがた}負たる耻辱^{ぢよ}音成^{おとこな}が領地^{りょうち}又足^{あし}の留難^{りゅうなん}からん、

三韓征伐近き又有バ、武士一人も惜き時節、これを計つて此願ひへ取上
ぬ差扣へよ、ハシ意を返すハ恐れながら勝負ハ時の運又寄手強き相人
を乞望むも、藝道の勵み第一ハ、頗て異國の戰場又敵を引請かけ懼ます。
腕だめ志共存すれば、何卒ハ免下さるべしと、猶押返す下心邪智とい玄
れどさあらぬ音成^{アシ}一理有ナ條、然ラバ一味齋を是へよベ、ハシ近習が
主命又座を立て行程もなく、鋤ハ一人又敵する極意、胸又甘なふ一味齋
玄づく^{アシ}前又伺公する^{ホチ}早速の入來大義召寄せし事別義又非ナ、則
夫成京極内匠、其方と試合を望み、差とむれ共是非との願ひ、老體といひ
苦勞成べきが、いなまナ汝立合んや、ヨハ有がたき慈愛の御詞、老さらばん
てハ候ヘ共、打物取てハ百萬の強敵も、秋野又すだく虫共存せず、ハ上意
でござらふなら、ペ^{アシ}辭退せず立合んとな、然ラバ兩人試合を許す、殊
ニ殿^{アシ}下^{アシ}の間近しよく致せよ、ハシ猶豫も我慢の内匠肩衣剝かけ^{アシ}

一味齋は免の出た試合の勝負、急ぎ支度を致され、やく鋤法の油断を敵とする試合を常常試合の場とするが、八重垣流の心の取方、立合といふなり、とくしき支度立、不意々敵のなきものかゝ、と早勝色を顯へせし木太刀を菊が持出て、直すも父の利運をば、弓矢神への祈禱其外茶の間仲居まで傍々居流れ勝負を、皆吉岡の親父様、勝てもらをも道からの實な氣はひを請て居る、負連中とえられけり、參らふと兩人の作法の式禮太刀の傍寄より早く立別れ、ヤクと互のかけ聲、内匠いからし、付入付込上段下段、時移る迄打合しが、何とか仕けん一味齋太刀筋弱つてたぢく、勝負の見へた一味齋、適見事と音成の賞美の詞よ一味齋、ハと其儘平伏す、傍々内匠が不興顔、いぶかしき殿の上意、眼前見へたる試合の勝負、拙者が負と、其意得ずと、いふをいへせす、ヤク

京極今之試合を勝と思ふか、其身又纏ふ衣服を見よ、二太刀め又左の
紋、四太刀め又右の紋、一味齋が打たる笄眼又當らひ簪とならん咽を
打れば即座の最期死骸と成ても戦ふかと、理非明白の判断又ぐつ共す
つ共京極が拳を握り、無念の思ひ、音成重ねて、惜むべし一味齋、今少し
年若くべ、三韓攻又一方の大將共なさんず器量、エ殘念く、當座の褒美
一千石、汝又與へ遺へす所、相違なき條譽をば子ゝ孫ゝ傳ふべし、内
匠今之恥辱又音成が勝負をどめし所存の底意、一ゝ思ひ當りつらん
過て改る又憚らず、以來晝夜又勵を加へ軍馬の前の忠節こそ此上なが
ら肝要と優美の詞諸共又下る御簾は一面の青雲とこそ、隔てけり、跡見
送て一味齋忘れがたきひ主君の重恩、又忝しひ三拜し、イヤナニ京極殿、只今
ハ不調法ヤモ闇の筒先まぐれ當り、必心又さへられな、後刻意をば榮花
の花藝又唉せて立歸る、跡又無念と京極が、胸ハむろやく志や眉又皺奥

おさし足藤藏が傍そば又立寄よせ先生今更何の思案顔重おも憎にくき一味齋さい六ち
 放はなして遺恨いこんを晴はらすが一番近道上分別ひだり、シ音高たかし壁かべ耳みみ、きやつも討うたし
 ふ菊きくもほしほし、斯されつと巧とがむ心の奥おくの間あいだは、又も遊ゆの亂舞らんぶの響ひびき庭にわ
 二人ふたりがしめし合あつ、武士士官の性根じごんも乱拍子打連奥おくへ入相いりあいを、遠山寺の鐘かねの音
 も花はなよ心こころを奥おくに殿どの木きの梢こずえよ風断かざて草くさもゆるがぬ、廣様ひろよう先まへ、小山こさんのごと
 き磐石いわよて造立つくりたる手水鉢てづけはちゆるぐと見みへしが引ひかつぎ、顯あらはれ出だる木曾きそ
 官くわん、おどろの白髮しらかみ三千丈さんぢやう鬚ひげばうくと眼まなこの光ひかり、星ほしと輝かがやく其有様あらは奥おくを目
 がけて歩あるみ行ゆく、上段じょうだんの間あいだ銀燭臺ぎんしょだい燈立たつたる中央ちゅうおうよ飾かざり置おきしは紛まぎひなき、
 小田おだの重寶蛙丸ようぼうかわまる、玄あらてやつたりと立寄よせて、拔ぬけば新刀あらわの次刀つぎのとう、飾かざり置おき玄あらは謀ねら
 計ねらもや、あらふと儘まことによ、細瑾ほそきんよ構くぬ不敵投ふでいとうはふり、今度いまだへゆるす久吉音
 成せい、不日ふじよ來くわつて頭かぶを取とん待まて、おらふも獨言ひとりごとのつかくと行先ゆき、道みちを
 遮さへる茅つばの穗いそ先まへ、シシこ志こころやくよも巧とがみしと、見み還もどる跡あとも館たて襖よ取卷とりまき、兵ひ嘲あざ笑わら

ひ、ま、玄やらくさき蚊蜻蛉めら亭がらみひとしきへろく鎗我鉄身
よ立べきかと手を拱て幻術の秘文唱ふる聲と突かへる、鎗へ一度よ折
飛だり驚きながら屈せぬめんく、組でとらんと柄を投捨かしるを捨
首腕引ぬき、一度よかしれば人砾擲んで庭の立石よ打付られてひとつ
やく、群る蜘蛛と碎け死、さしもの多勢溜り得ず。さつと一度よ引退く、
追ぬ敵よ逃るく、隙入やと、夕闇よ人なき野邊を行如く、歩むこなた
の一間も、曲者待と高んらか、胸よぎつくりこたへしが、打捨猶も出行を、
イニヤサさんかん
三韓の降將木曾官とい偽り、先年小田の天下を掠め、山崎よ亡し明智
が賊黨四方田但馬の守とされやつと肝先よ鳴雷と答ゆる大音、さし
もの強勢百鍊の鎮み足を繫ぐがごとく覺へず玄らずたぢくはせ戻
つて檻外よぐつと詰かけ、異國よ生立つ木曾官、明智が殘黨あんどく
奇怪至極といひせも立すいふな但馬酒を盃む者の色よ顯れ香を盃

む者ハ香々顯わる山崎合戦の大崩^{おと}岸田が一矢射削^{いのう}たる矢疵^{やきず}の跡ハ
 左の高顯^は四方田と呼かけしを我名^ミ有で見返るべしや、討死せしと披^ひ
 露^{あらわ}させ、其身ハ異國^よ年積^{としふみ}り不日^{ふじつ}三韓征伐^{さんかんせいば}と聞とひとしく此地^{このち}渡^と
 海^{かい}し、山を川嶮岨^{けんそ}を平地^{へいち}と欺^{あざむ}く地理の圖、日本の大軍^{こぐん}悉^{ごと}く異國の難所^{なほ}
 おびき入^{みいり}、麿^{みのざら}とせん計策^{てね}と見拔^{すく}た推量^{すいりょう}違^{たが}ふまじ、子房^{しゆう}諸葛^{しょく}ハ欺^{あざむ}くとも、
 此久吉^{はが}謀^{ほら}ん事、及^べぬ巧^{たの}大^{だい}やうなり、ホチ^{さす}流石^がの久吉^{あつね}遁眼力^{とんげんりょく}、^カ明智天下^{めいじや}
 を掠^{かすめ}しと我を唱^とて賊徒^{ぞくと}となす、汝^汝が身の上玄^{じょうげん}るや猿冠者^{さるかんしゃ}春永^{かはる}甲州^{こうしゅう}退治^{たいぢ}
 の折^{くわんばん}から快川國師^{くわいせんこくし}を焼殺^{やきさら}し、種々^{しゅうじゅ}の惡政^{あくせい}見る^み忍びず、主人^{主人}光秀^{みつひで}數度^{すうど}
 諫言^{くわんげん}用ひぬのみか鐵骨^{てつこつ}の扇^{おうぎ}と額^{ひだり}をぶたれし恨み、本能寺^{もとと}にて亡^なせしり、
 武^{たけ}又^{また}逞^{たけ}しき弓矢^{ゆうじ}の本懷^{ほんくわい}汝却^{かへつ}て春永^{かはる}の大恩^{おん}を蒙^{かぶ}れ共^{おなむ}其主の子を幕下^{まくげ}
 屬^{くわ}け、小田の天下^{てらの}を横取^{よこし}する、國賊^{こくぜき}と^いて讐^{おのれ}が事^{こと}、其下^げ又^{また}働く大名めら、手下^{しも}
 とやいひん同類^{どうるい}とやいふべき、僭^とか分^わふ應^{おう}じ國郡^{こくき}の分取^わ盜^{ぬす}人原^{ひとはら}の大

將久吉人を稱て賊となし、盜賊の成敗せば、うぬが首から先刎よ。へへ、偃鼠能水飲共満腹止る。小さき眼よはこそ思へん。先君不慮の落命より時日を移さず仇を討、民を安んじ主位を守護す。春雄春信其徳なれば、是非なく國家を治る久吉汝ごときが知事ならず。多言なり久吉謀れ汝々負る共異國と得たる我帶劍切味見せんと飛かしるを、はつたどみらむ大將の天性に目と重の瞳子、尖き武威よ蹴ふされて五體すくぱり無念の歯がみ、大將面色あをらせ給ひ。但馬嚴顔蜀よ降つて英雄の名を失はず、心を改め從へ。命を助召遣へん。サ仕んや四方田と仰の左右よ取巻勇兵、猶豫せば火蓋を切ん、何とくと詰かくる。さしもの但馬悪びれず、諸肌くつろげ物をもいはず、腹へぐつと突立れ。首を搔んと立寄兵士車輪とよらむ怒りの大音、ア玄たばたと騒がしい日本無双の四方田、うぬらよ取る。首の持ぬと罵る強勢優美の大將、ゆうくと階。

下より立疵口とつゝと見事なり四方田とやし感賞のほ詞、音成一間
 を立てて先刻もかしこよ有て様子具さよ承へる、本能寺の大變より紛
 失したる蛙丸君が賢慮を廻らされ賤を誠と四方田、おびき寄たる其甲
 豔なく彼も所持せぬ此上へ、イニヤ異國へ志らず日本へ此久吉か下知の下、
 深山幽谷み藏すとも手よ入ん事案の内、氣遣ひせられそ、郡氏只々おし
 きへ四方田、あたら勇士と仁惠の一言五臘、よこたへけん、チニ、添き情の一
 言、最早此世を辭する某、先刻内匠がかけたる繩目、脱出しひ、搦人の失な
 りと、嘸心外よ存すべし我、皺首の介錯を、彼よほ下知下さらば、末期の志
 願此上なしと餘義なく見ゆればほ大將、心有願ひ聞届た、ナヨ内匠へな
 きかゝと奥をかけ出る京極遙、こなたよ手をつけば、イニヤ京極別義でない
 汝が介錯望む但馬、聞得て遣す仕てどらせひ、事足ぬれば歸らんと、ほ一
 言も嚴々たる、智仁勇備の名將よ、隨ふ郡音成も、ほ見送りの威儀清く、本

障として歸らるゝ跡み手負い傍りを見廻し、ナニ京極殿、今ハの際の某が
一言いひ度子細有、近々と聲をひそめ。誠や徃事渺茫たる、明智よ數
多仕ふる中、わきて股肱と頼れし、此四方田但馬守、年老たれ共百万の敵
ハ蠅共思へぬ共運をはかつて今日只今覺悟の自害も時刻を延し、頼み
置たき子細といつぱ、先尋ん貴殿稚き時の名ハ秀丸といひござりし
や、ヤといつ血迷ひしな、我出生ハ備前の小島、父ハ京極新左衛門、ヤノ左
みて有まじ兩目ハ岩下の電よりひとしく額より一つの喜怒骨ハ光秀公の
忘れ筐親子とて能似られしモ健氣よりも生立れしな、其骨柄よて仇をね
らひしやハか仕損じ有べからず、種々の戯言叶ハぬ謀叛我よ譲り、逆
徒明智か類葉挾と筋なき汚名を蒙らせ我三族を絶す所存か、義よ當つ
て三族を絶すも天よ叶ふ孝行能開給へ一昔、春永亡し其時の天か下し
る惟任將軍いたしや光秀公、山崎の一戦大崩れと成しが、憂近江路み。

落下り再び義兵の旗上よりけふの恥辱をはらさんと心いやたけの數つ
 たひ闇のあやなき小栗栖村物の具剝んと士民めらひつそぎ竹鎗猪突
 鎮運の突出す鎗先よ弓手の脇腹すつべと突れさしも強氣の明智殿龜
 所の疵の目もくらみ深田よがへど遠近の土よ武名を埋まれし無念
 修羅の妄執を晴す所存のござらぬかと謀叛の血筋を譲繼す謀も耳よ
 空吹風返答あきの承引へござらぬの是非もなし承引あしとて此儘
 置ふか一念忠義よ凝たる魂魄こなたの皮肉よ分入て旗上させで置べ
 きや南無や幻法守護神帝但馬か五脉を此まよ神よさしへるちかひ
 の牲日本六十六か國再び明智の有となさん我忠誠を感應有玄鑑あや
 まつ事なけれせんするやせんたまるばらいそく細言吐すとく
 たべれどあやり情も白髪首只一討又刎てけりサアこれからからがらが身の
 片付試合よまんまと負たれべ此地よ足の留られぬお菊を連て欠落の

工面いわんへ兼かねて胸むなみ但馬たのが持もしに臺だいの刀と、後日のちの用もち立たながら死骸しがいを蹴けり出行ゆき先道せんじようを遮さり彌三郎やまさんろう、何所なにへ京極きょうごくに臺所だいしょの守まつり刀と奪うばひ立た退しりぞ不敵ふてき者ものこつちへ渡わたせと詰寄さへたりまことに小僧こぞうめがびく亥いやくと主ぬしよ隙ひらきやり出だて行内匠ぎょうないし逢あたふ思おもた戀こゝろの仇かたよふも先陣さきぢんひろいだい、一味いつめい齋めさいめもぶち殺ころし。お菊おぎくを女房めいぼうえ持もこんたんたん先さき儕ともから片かた付つけん覺悟かくごひろげどつとつ立たたりまことに重じゅうよよつよつくき人ひと非人ひじん者もの共來ききれと彌三郎やまさんろうが下しも知しよ群ぐんる數多あまたの家來いえらい届とどせぬ内匠うちばが手てだれの刃は先さき右うへささへ弓手ゆげよ當あり打うど拂ほへど叶はりこそ、危あふきうしろよ冥めいよと顯あれ出でる但馬たのが姿あは猶あはも闇浮あんぷの幻げんの術家じゆか來くわは夢ゆめか現あらのうごとく打付うちふ投付とうふなやませなませしして手て鞠まりを突つみとならず死靈れいの助すけみ京極きょうごくが虎口とらぐちを遁のれ門もんの外ほか出でる我身わがみも我ながら怪あしと見返みかる塙はなわの上うすつつくと立たたる但馬たのが婆おば早立去はやさきと幽魂ゆうこんの指さす方ほうへ廣小路ひろこうじ冥火めいびよ照てらす道筋みちをいづく共なく成なりけり

○第四

元是大内義隆が國衙も今へ中國の手又屬したる周防の國、今度太守の祈願迎新又建る石清水正八幡の宮殿も日退て成就すめる代よ、いとゞ神威や増ぬらん、煙草の休み大工共一つ所へ寄集り此度のお宮普請本社から拜殿神樂堂繪馬堂迄が恰好よふ出來たではないか、他國へしらず此國又こんなお宮以外又や有まい。藤七喜助がいふ通り、こちどらが手の離るゝも大方翌の日一ぱい、遅宮も近い内其時は瞼脈はしかろふのふ、そこひぬからぬ此文藏思ひ付た趣向が有。ア一番真赤な猩々絆の穢其次又揃への挑燈、名いか揃への浴衣で揃への人夫を持つゑいか、喜助の足が長短ぢやどよつて、引物又よるといふ題で三味せん方、ゑいか藤七の鼻がゑらいよつて、馬又よるといふ題で太鼓の役、音頭は今度大坂から下つて居やる醫者殿又習ふた通り、おれ

が跡からやつて行玄や、待ちや／＼文藏其上方から下つて居る醫者殿
どのの醫者殿玄や、ソレイハイ眉毛ハ黒毛ハ刷毛見る様で、目ハぐるドーとし
つかい達摩、成程／＼ア 柴左仙が事か、シレ其人ヌ習ふた音頭の
妙音、ちつと計聞したけれど、又意地惡の春風殿モ追付來る時分、見付ら
れたら目を貰ふ一働きして跡の事、ザア こい／＼と打連て普請場さして
行所へ、ひよこ／＼來たる在所醫者、顔見合せて、左仙様けふハ何所へ
ござましたヤ何所へ迎おれが事、宮寺の連歌俳偕繪馬もほつとり見あ
いて仕廻、つくねんとして居た所へ、此お宮の普請奉行一味齋様から呼
よ来て、將碁の相手ヌ今迄成て居た。そしてア音頭ハとつくりかたまつ
たかの、ア大方ヌ覺ました。爰仕廻ふたら夕ざりヌ、又稽古ヌ參りましたよ。
後ヌ／＼と双方がすれ違ひサヌ當りしが、何とかしけん、柴左仙、うんと
計ヌ倒れ伏、恵り動點三人が、ヤアヨヤ目がまふたかと。うろたへ眼、池水両手

よそゝぎかけ、^{ヨレ}医者殿いのふ。左仙殿いのふ、左仙殿不動様じやない
 お醫者様いのふと、呼聲耳^{コホミ}通じけん、軒端を傳ふよがよの、糸より細
 き、聲音^{コハナ}みて、扱はかなき世の中や、昨日迄もけふ迄も醫者よ藥師^{ヨウセイ}と敬
 れ、餘所の病^{ヤモリ}と詠めしがけふ。我身^{ガタ}も迫り来て、犬猫の子か何ぞの様^{ヨメ}
 小屋の軒端^{のきば}と倒る^{たお}し共、誰^{アホ}が哀れと見給ふらん。去^{アラシ}とはく氣の弱いめ
 つたよ死んでよい物かいのふ。めつたよこなたに死^{マハ}みやさんせんく
 左様くと抱しむれ^{だき}ば、^{ヨウカ}旁^{カタド}おどやどふしても叶ふまいく、^ド又な
 せよ、^ド一通り聞てたべ、蜜柑の皮の色つくと數醫の顔の青くなる^ハ一
 時^ト、誰^{アホ}が玄^{スル}せて冬枯^{ウツガタ}の療治^リ隙^{ヒキ}なり金^{ヒカリ}なし、内證^{シテ}逆も曾我殿の、五
 両十兩の煙草^{たばこ}さへ錢^{ヒカリ}も盡^{ハシマ}たるつがすがち、おのづと悪い顏色^{カニ}を、吉岡殿
 の下部^{シタ}が見て、氣色^{カニ}が悪^{アホ}か是^{ハシマ}なりと、たべよとくれた竹の皮^{カバ}中^ノよ^ハ黒い
 一かたまり、扱^{ハシマ}きやつめ^ハ耆婆^{ギボ}扁鵲^{ヘンジヤク}、おれが常から持料^{ヨウリョウ}の甘^シい物^{モノ}好^{ハシマ}癢^{ハシマ}

の虫能ぐちも知たり醫者いしゃまさり。是が黒砂糖くろさとうあんめりと何の差別しやべつもめつた
喰く呑の込んだれべ、悲かなや黒砂糖くろさとうではあふて、コレ泥川なづかわの惰羅介だらかで有たひいの。
コレ山上參りの土產みやげとする惰羅介だらかで有たひいの、それが毒どくではなけれ共
瘦馬ひそまあらぬ瘦體ひそだい苦過がさきたのが此身の害がい、アイヤあ、いたやのふ、苦がやのふ、コレ此
腹の痛いたさではどふで命がつゝくまい、八万地獄はちまんぢごくへ落る共日頃近ちかしう仕
たそなた、後から死んでござるのが、五年十年ふくよやう共國ともくに死出の
山、地獄じごくの釜かまの釜端かまはたで、待て居てやるぞいのと、聲こゑも哀あはれなきやくり泣なぐき、
コレ去迫いざなりくく、爰あで死しをやるとの、マ掛り合はりあ成なといひ、第一地獄
の釜端かまはたで、待て貰もらふがおりや術じゆつない、ミ氣きから先へ死しさすと、分別ぶべつが有聞
玄あんやれや、こなた平生へいせい踊好おどりよき、常つねよおれが習ならふて置おきた、音頭おんをやつて見る程
よ、柏子ひやくしよかよつて歩行あるりたら、ミあるけそふな物もの玄あんやどやうシコヤこり理屈りくく、石
積のづだ地車じしゃも木やりの聲こゑで行道理こうどうりテちよつと一口試こころみ、サ合点あいてんと破扇腰ふりわん

から出してふりかざし。阿波の海賊彼十郎兵衛が、ソレサア、ヤアくていつれ
 猛らしいわい／＼、チ、俄々志よぎ／＼氣が成た猶も大工殿頼みでござる。
 ち哀れ成か。此醫者殿へ、イサ砂糖代り。又情羅介のまれ、あせりもがい
 てはらいたゞしや、ヨウイノアリヤリヤコリヤリア、ヨイサ砂糖代り。又情羅介のまれ、あせりもがい
 も同道て立出る。普請奉行の役柄も格も吉岡一味齋、名耳やさしき春風
 が供え、かしこみ立歸り。誠よ此度の、臣宮普請相役とや。名計、皆其元様
 のお助け故、ケ様な大役首尾能相勤めし。いか計か。大慶至極。ヨレハ又痛み
 入たゞ挨拶、イヤく神以て。恩よ着ます。夫々付先生へいつぞ。お詫す。よ
 よと存じたよ願ふてもなき幸、定めて拙者を人畜の様よ思し召でござ
 らふと存じ廻せば、面白ない。人非人の京極め、あゝいふ族と露志らず、
 只の招みよつて思す入門致し。今での後悔。若輩者の跡先よ心も付す
 被門致せし其段へ幾重よりも。了簡此上へぶつて成共腹をいて、以前の

通りお弟子と成て下さらば、此上の悦びなし、コレ、先生偏ひ奉ると
詞も油乗て見る艶とい知ど一味齋イヤモ誤つて改るゝ憚りなし元高弟の
其元なれべ、末々の門人へ稽古の席の差配り此方ともお頼みや、ソリヤお聞
届下されうか、ハ、ナレ添カタチケルや嬉ハレしやと悦び勇折こそ有、吉岡が仲間斯カと見る
よりかつ踞フひ、お國元老ヒメノシヨウ息女ヒメコお園様ソノマダラお見廻として只今旅宿へお着な
されましてござります、ナニ娘が見廻ミツキ來たとか、ナシ淑女の身でいらぬ
事を、シテ道中怪我ガタもなかりしか、ヤモ隨分ほ機嫌能キハシナ、満足スル、然らば歸り
ていひふよは、弱き身ヒトコトよハ餘程ヨハヨモの里數マツキかしいたく草臥シタヨレつらん身ヒトコトも慕モロ
方ハタよは歸るで有ふ、休足クモリして待ていよと言ひ聞せよ、早くハヤシムナニくと
奴ハタの旅宿リョクサクへ立歸る、跡見送つて一味齋賢き心の闇アグツ又闇アグツあらぬ、闇アグツ又迷ひ
し親心ハタ孝心ハタよしてくれんハよけれ共結句コウククハそれで苦をやむと、こぼす
涙ハタを春風ハタ懸ハサフて背ける顔の艶薄ハヤシキき親子の契ハタりとい後ハタ思ひ亥ハタられ

けり、藤藏とうざうの見て見ぬふり、は息女のおひめのお出でと有あば、是おち直ただよし宿所しゆじょへ、いざは同道致どうぢしませう。手前まへはまだ私用わたくしよもござれば、そこもとは先まへお先まへへ、ア然らべ供致ごうぢさうと、互たが々目禮めらい一味齋飯家いつざいはんかの内うちへ入いみける、跡あと又春風はるかぜ獨笑ひとりわらひ兼かねての方便てだても手てごへき親仁おやじにんめ、中なかすめでで行ゆまいと、思おもひの外工合わいこうあのよさ斯かうしてかららかららの手段じゆだんも仕安つかなし、ア斯かつ斯かして、こうくこうくと響ひびく野寺のでらの鐘かねの音おとも入いり相近あひあかき磯傳いそづたひしづく歩あるむ向むかふより、浪人なつうじん者ものとおぼしきが、古大小こがの柄糸いりも、ほつれ乱まげれし彼かれも袖そですれ違ちがひさま振返ぶりかへり、暫まことにく、それがざるは郡こほりの家中春風氏はるかぜうじはあらずやと、聲こゑかけられて立歸たきり、身みが名なを知したるは浪人なつうじん、何人成なまぞといふかる色目いろめ、名乘なまよも今更面おもて々せ密ひそか密願ひそかひがんひの筋すじござれど、他聞たぶんを憚のりやかぬる何卒暫まことにしは左右うしゆを、アいかよも承うけ知しと、家來いえらい又向むかひ、身みは是まへ用事ようじ有あべ、益ます内うち一人跡あと又残のこり、我達われたつの先まへへ歸かれ早くはやくと追立おとだてやり、近寄ちかづて聲こゑをひそめ、音聲おとこゑよても覺おぼ有あり、貴殿あなたは

京極内匠殿いかゞも左様と笠脱捨某國を去て、一先上方へと心させ
しが、心残りは一味齋恨みを一太刀むくいんと、思ふ折しも此防州普請
奉行又來りしと、聞とひどしく、シヤ届竟の時節かなと、取物も取あへず下
りしが、いよ／＼それ又違はずやと、問々藤藏邊り又氣を付、此度の宮普
請も残らずきやつが差圖次第、何が諸家中の請ひよし知行は増、威勢は
日々又門弟はふゑる。其むやくしさ、頬憎さ折を見合せ一討と、心はせ
けど我々しき、中々手立やつでなし、思ひず貴殿又逢たも幸、何卒きや
つを欺し討よ、シイ聲が高い諸事は内匠が胸又有、抑一味齋め又意趣とい
ふいあながち劍術一通りの筋でなし、娘ふ菊を妻みせんといへば酢の
粉のと承引せず、剩へ人前みて頬耻かゝされ、此風體思へべく口惜ふ
て胸板を立割苦しさ、切さいなんでも腹いぬと、拳しを握る無念の歯が
み、同氣相寄春風が邊見廻し先生何も氣遣ふ事はござらぬ、仕様の斯

と耳みよ口く、すりや此所こしょよ一味齋いまいざい、うましとかけ出す其屹相きえきあい、どつこいやらじとととむるを放はせ放はさぬ血氣けつきと強氣きょうき、振飛ふんひされても我武者わぶしゃもの、我身みを玄くろつと引ひすへて、氣きが違ちがふたか京極殿きょうごくでん、一味齋いまいざいを切氣きりきでも、傍そばよりやつが夥多あまたの家來いぢめ寡くびの衆しゆう、敵てきせずとい、常つねよ貴殿きだんもいふた玄くろやあいか、多勢たぜいの仲なかへ切入きりこて目めぎす老おぼれ一人ひとりを切き得とてかしる、命みことがないぞや。チ、命みことへとくろ捨すてている、やくそれそれの口くちがちいさい、敵てき一人ひとりよ百年ひゃくねんの、命みことをはたすはたすハ不覺ふくわく、マ氣きを玄くろづめてとつくりと、身みがいふ事を聞きつ玄くろやれ、ヨ一昧齋いまいざいが歸かるののいいつも此道此所このみちこのしょ浦うらの氣色けしきを、樂たのしみみて駕籠かやこみ乗のねば同勢どうせいなく、供ともの仲間只ただ一人ひとりそこを鏡かがひ討うながならべ、本望遂もとむすびるよ手間てま隙ひま入はす、討うながす最上飛道具さいじょうひのぐう、其品爰いわよと益内ますうちか、かたげ持もたる狹箱はさまばこ中なかを出だす種たねが島腕しまうでよ手練じゅれんの内匠殿うちしょうでん、百發ほっぺつ百中ひぢゅう疑ひひあし、されど磯邊いそべの人目ひとめ有あ、其松影まつひから歸かるを待まつたら中なかを合點あてかと渡わたせペ取とて玄くろたりく、微すこ

塵流義の奥義をふるひ、暗夜の鳥もたんた一討、氣遣ひ無用と立上れば、悦ぶ藤藏抜討みあへなや益内眞二ッ密事を人よ洩さぬ神文まづ此通りの手柄を、いふよや及ぶと松陰へ忍び行足春風の血力鞘又納りの旅宿で聞んと眼を配り心残して立歸る、麒麟老ても驚馬ならぬ身の五調の一昧齋娘又心急ぐ道照す、奴が箱提燈光を失ふ星の影、老眼又きつと詠め西方の元々金氣發の卦又當つて七ツの昴星備を乱して動するに正しく國の良臣又災有と兼て聞、いふかしの天變と我身の上は白砂道、乗物是へよ下部共、答てかき寄れば、直々打乗皆急げ畏つたと六尺共足を早めて欠り行、ねらひ過せし京極が、松かげを飛出ア手追ふせしか殘念至極、憤老ぼれ遁さじと跡をしたふて「追ふて行

○ 第五

菖蒲葦の香深き一構へ、一味齋が屋敷みえ末子三之丞が壽き迎飾る

兜の奥使妙共が縁端より奏者の役の請答せひし並びて座し居たり入來る禮者へ入間野宇内端午の御禮と袂から名札を置いて出行べ續いて十木當右衛門金井運兵衛根津伴藏引もちぎらぬ禮受みほつと草臥くたの取次心勞やノ小富何ば有かも數知ぬ御家中の子弟衆がふ禮の取次よ出たり入り立たり居たり座敷の上のふ百度參り斯勧からはたらいたらどこやらふ男が知たらこのもしかろまふ松の身上かなヤ其このもしい咄しの次手此屋形の姉様あれが女の大兵といふのか知ぬ脊はといや六尺計器量も能て劔術が名人で其くせ力が強いげなあんな體からだみ半日でも成て見たいシヤ又あせみやハマア第一押がきく女夫喧嘩をするよでも男の癖と無理八百いふをいはせす志め付て思ふ存分抱れて寝るねりそやきつい無分別大きな體からだい何所やらも形相應あらわみ大きふてあみ大体な鼻高はなたかでいたんのふする事有まいと譯もなまめく高笑たかわらひ一間開か

せ三之丞出る目病の探り足、まだ十三のおとなしく、^め妙共けしからぬ
高笑大姉様へお留守おるすでも此頃病氣で下さがつてござる。お菊様の居間ゐまへ簡拔かんぱつ
主の影口不埒ひぢらの至り、以來いらいを急度きくど嗜なしあめと、呵しかる詞も角立あじてぬ、愛敬深あいがふかきうま
れ付、取次の侍まつしやかり出、衣川彌三左衛門様いわがわ ゆうぞうざゑもんの子息彌三郎様ゆうぞうに出なりと
披露ひらうして表の方へ引かへす、それ珍客折惡ちんきやくせきよふ母様はなぶへ休やすんでござる。^ア
お菊様へ亥いらせよと、差圖さとよ下女しもめの立て行程こうていながらくし、山鳥の襖さんとう開ひらい
て彌三郎・佳節かせつの衣服いふく一入ひとしほよ、榮有美夫ひづるの衣紋付いもんふ、それとお菊が一間いつまんくこ
ぼれ出たる絹きぬの香のすがり付たさ戀しさの、胸の數々目の内うちよ、しらせ
あふてぞ座くわみ直り、彌三郎懇懃いんぎんよ、先以て當日たんじよの端午こどの佳節かせつ、親父おやぢ一味
齋先生さいせうせんせいよも、防州普請ぼうしゅうふくうの役中わくちゆう恙つがあくに勤なされ、家内の悦び推量すいりやう
いたし、くれぐれも目出たふ存するあらうと挨拶あいさつすれば、三之丞みのう誠まことに師弟しぢの義よを
重おもんじ、佳儀かぎを祝しゆくするに、入來いりあらの段、父一味齋在宿致ざしゆさせいか計悦けいえきびやさ

姉様、うん悦べきやんせいで何とせう、顔を見たれば、嬉しふてく。
いひたい事もたんと有し、そしてから、人目の關のないならべ、抱付た
い氣で有ぞいなと思はずふつとすべる口、コレシと彌三郎が、弟の手前氣
を兼て、留るも同じぬるゝ袖袂をそつと引糸よもつれ寄添妹脊中、懸し
かつたも口の内玄つと引玄め抱合傍よあやなき三之丞。此姉様の物を
もいはず、衣川様の何所へぞとさぐる手先よ脊と脊、ちやつと飛退彌三
郎、お菊が胸へさゝ波の志がを見せじとさあらぬ顔、アマ三之丞とした
事が、わしを恸りささやつたわいの、わたしも恸り致ました、今のは何で
ござましたへ、ア、今のかや、あれのアソナ彌三郎様、それく、五月五
日の男の節句武備を飾りの館長刀、ちよつと祝儀よ組討の、眞似を致し
て見ましたも偏よ貴公へお祝ひと、詞巧よいひ廻せば、あどない氣よ
誠しく、思し寄せしは深切、幸けふの菖蒲酒何はなくともお菊様、彌三

鄭様へ酒一つ、一間でお上なされぬかと。何氣ないのよ氣も落付おちつけ、よ
ふぞや氣が付た、彌三郎様爰へ端近一間へど、醉ねど先へ轉び寐を急ぐ
手招き小黙頭うかづき誘ふこなたよ母親が見る共いざや、白紙の障子引立入跡
よ、やゝ默然と三之丞、差うつむいて座し居たる、傍よ立寄母お幸ヨレ三之
丞アキラふはそなたの大事の節句、此頃父おの方からも、事多い中あが來
て、隨分節句を賑しふ仕てやれとの文體、乙の血の尾と只さへよ、目かい
の見へぬいちらしさ、いつかい苦カクよしてござる上カツ煩やつたらどふ有ふ。
彦山様アヒルを初めとして、奇瑞カクイの有アリとあらゆる佛神ボクジン、祈ヒカルぬ方カタもない程よ、本腹
い今アキラの内氣をわさくと仕やいのと慈悲シテ餘りの母親があいたてな
しと人や見ん、さほど不便かるゝ程此身の冥加恐ろしい、今も今迫彌
三郎殿アキラ端午の佳儀カガミといさましうお出ハタハタ付てわしが身アヒル、勝れし手者ハサウエ
胤ながら、小太刀一本館ヒビキ一筋ヒビ探得ハサウエのみか苦カクをかけて、不孝の罪フカイを重ん

より、いつそ死たふござります、譯もない事いふ程の母が氣迄をめ
 いらした姫共こしもどさんの何所どこに居る、三之丞と奥へ行面白おもしろおかしふ酒でも酌くみ氣
 を慰めてやつてくれ、と出て来る浮助共、人を浮すと色事はこつちの
 得手物若旦那様サアお出と手を引ひパナそれより及およばぬと立たつもとぼく
 病目ゆめより見る目病ゆめるも親心おやこころ、ソレシテあぶないぞく、イヤモモちいさい時ときから馴なれ
 た内氣遣うちきうつひひござりませぬ、ヤ母様めいじよ冥途めいとの闇くろ迷まよふのは此様な物ものでござ
 ざりましよく、ふとましいまたかいの、シレ姫共ひめ先さきのけく、ふ馬まで
 も、乗のぬ主人しゆじんをいさめかね打うつれてこそ入いよける、母めの我子わがこの後影ごえい見る
 に付ても心根こころねを不便ふらんと浮うきむ露ゆの間あいだも、忘わすれ方かたあき恩愛おんあいの、中の間あいだも姫
 ナレシテ待まつかねた、サア是これへと、待間まつあい又程またも夏山なつやま、衣きぬほすてふ白妙しらたべの、顔おほさへ
 茶あみ照添てらしこつきの花の縫ぬい小袖こで、ふ里さともしどなき千鳥足跡ちぢゆ付つ姫共ひめ

あぶなやと立寄子、寄まい／＼ぞ、あぶないとは何があぶない、酒酒よ
酔酔たか何ぞの様さわ、立騒さわいで不行儀な、次へ行や／＼と、志かつべらしう
三つ指ゆびもいどりなまめき愛あいくろしア、娘待兼アた、定て一味齋殿アも一所で
有が大方ア前へ歸國アのお目見アへ夫アで先へ戻りやつたか、イ、左様な様
の物の様な物アござります、アあの人アした事が遂アない酒機嫌アあ
たでは酒をたびやつたぞいのふ、イ、と、櫻のお供仕アて、ナ上つた所が
端午の祝儀、直様か裏アへお禮ア上り、東雲様の前アて、白藤の小局ア
亥アいよ亥アいられ四はい春ア、それから四の富志津摩様の奥方へ參つたれ
べ、四合入のお盃アでしい殺アされて居る所へ、篠田思安様がよつと見へ
どきやおれが配劑アせふかと、お年ア似合ア強いお酌ア、ヤ、それでれ
いよく死まする、死る面白い死ね／＼とめつた酌ア、こゝやたまら
ぬと座敷アをはづし、四疊ア半の圍アの内ア死た様アして居たれば、白井新

吉様の奥方や、芝山四郎右衛門様の奥方、信夫様迄が出て見へて、寄てなかつて盛殺し、とふくとめをさしれました。あの子とおた事が、常の行儀又似も付ぬ、取分大事の祝ひ日又心よかゝる四の字盡し、もふもふいふて下さるな、と、左様あらべますまい。其替りよひおかし様、お願ひがござります、ソナ急よ殿様を持しておくれあれませぬか？是迄幾度いひ出しても、聞入ぬかたいそなたが、殿様を持つといやるからい、定めて心當があらふの、そんなら兼よ噂よ聞、豊前の國毛谷村の百姓六助、身の農民よ埋れても、適な文武の勇者何卒主人音成公へ仕へさせ度夫の願ひ、成ふ事あら其人を、と、やくおかし様、殿様を持して下さりませどや。わたしで、ござりませぬ、そんなら誰よ、ティ妹のか菊よ、サインどふぞ持して下さんせぬか、と、其願ひ聞入られぬ家を續べき三之丞、所詮本腹叶ひぬ眼病、さすれば家の名跡の姉のそな

たよ極。まつた、聲もない内妹よ、男のどふも持されぬ、尤でござります、左様ならば母様よ、逢せましたい人が有レバ其子爰へよ必が抱て出たる五ツ子の、すや／＼寐入を、お園の抱取いだき、母様の遙れぬ方よ生れし此坊、此園が子よしてな吉岡の名跡めいせき、を相續さうぞくさすれば、わたしが家を續つづだも同然、か歎嘆しなされて妹よ、殿とのを持して下さんせ、お願ひナ上ますと、深き思ひを卷舌まきじの詞ことハ酒さけの科となりし、母のつく／＼稚子わざわざを、見るより扱あつかハ開及ひらひ、孫まごといえられどさあらぬ体からだ、姉あねの何なんいやるやら、系圖正けいとくしい名跡めいせきを、餘所よその胤ちぎよ、續つがされぬ、物ものがたいとし様ようの氣質きしつ、そなたも知しての筈はず道みちよ背そむた二つの願ねがひ、叶かなぬ程てい、いひ出だえやん、な、スリヤ是程これよナましても、お聞入きこいござりませぬな、此上かみは是非ぜひとも及およべぬ、白地しらぢな事ことながら、妹わいわいお菊きくと彌三郎よしのぶ様さま人ひと忘れず忍しのび合あつ、中なかよ設おきけた此彌三松よしのぶ、いへ、眞身まじみの初はじの孫まご、お前の口から父上ちちのうへに聞きこ届たどの有様ゆうりょう、心盡こころごとくしのそなたの願ねがひ、叶かな

ぬならぬと親がいも、いふよいれぬ譯有故、ソリヤ母様聞ませぬ、血を分た
親子の中明されぬといどふした譯、様子を聞た其上で、わたしもいり
ねばならぬ譯胸、せまつて心がせく、サア様子の其譯ハ、サア」と問詰ら
れ、暫しいらへもなかりしが、今ハ是非なし何を隠さん、そなたハ拾ひ子
キ、恂りで有、連合一味齋殿、殿様の師範と仰がれ、家中の用ひも淺からぬ
べ、何くらからぬ身の上なれ共、四十過ても子なきを歎き神々授かるな
らひもと、夫婦連での伊勢參宮、賽の道すがらとある木影、赤子の泣聲
可愛そふと拾ひ上、見れば添たる千鳥の香爐、是こそ名高き和國の名
器、久吉公より先達て仙石何某より給ふと聞しが、付添捨し其譯を問人迎も
長の旅、拾ひ歸りて育る内、お菊といひ三之丞迄設けしハ夫婦が老の入
まいと心嬉しく、けふ迄も、包み隠せしそなたの素性、ほんの親にへ義理
も有妹や孫より此跡を相續さしれぬ入譯ハ斯ぞと咄すと、越方を開ひ付て

もあぢきなき、野末の末のと捨し、氏系圖うやけいづ、そんなら日比大事ひだりとかけ、わたしが持
し香爐こうろが、チそれが眞實の親おやの筐かたみ、ハ扱あつもく悲しいお咄おとつし、今いま迄
眞實の父上共母様共、思ひ込んだるわたしが願ひ、叶かなふぬ上の差當さとあり、や
さみやならぬ此場の時宜しきよ、レとく様のよお乗物其儘ごまゐこれへ早はく、はつ
と二人の仲間が、手昇あがきみ玄くわたる乗物のりものとしや遙とほしと立寄たてよて、セか歸かへりか
待まかねしと、開けひらけ、内うちとあへなき死顔しのほ、一目見ひとめるよりよアアヤヤリ何なん者が手て
かけた、娘様子むすめようへ、レとせき立たつか幸さい一間いつまあけつけつ轉まわびつけ出だる兄弟いりきょう、
空からしき骸かみ取縋とがり前後正體ぜうたい泣な沈しづめべ、母おやの詰寄こふ園様子えんようよう定めて知し
て居ゐやらふ、レ佐五平さごへい、そちや山口さんぐのお供ともの内定うちじやうめて敵へき知しつらん、レ何國なんくに
の誰業ながわざ、何な者が殺ころせしぞ早はく聞きせい早くはく上あらふと、友平ゆへいがせき立たつ詞こと聞
み付はく、婦めが思おもひ百千ばくせんの劔つるぎと胸むねをさしるも悲かなしさ詞ことも出だす齒はを噛かみ
無念淚むねんるい、佐五平さごへいが、レ尤よく、山口さんぐの役用えきよう、首尾能調よほどとの歸かへりがけ

の小松原、何者の所爲^{しわざ}もや、^レ乗物へ鐵炮^{てつぱう}を打かけしと小者が走らせを。開^ハとひどしく旅宿より^ハ半道餘り、^レ姉様の供致^{すけぢ}し宙^{そら}を飛でかけ付しが、早^ハか旦那^{あたな}より^ハあへなき^ハ最期^{さいご}、^レ傍^{わき}又付添若黨佐忠太^{さちた}、俱^{とも}又深手^{ふかて}よ落^{おち}しみながら、^レ旦那^{あたな}の仇^{あだ}の京極内匠^{きょうごくないしやう}、^レあるしに彼^{かれ}が二の腕^{うで}、^レ切付置れし跡^{あと}有^リと、^レいひも終らず即座^{そくざ}の最期^{さいご}、無念^{むねん}と思へど其甲斐^{かひ}も、悔んで歸^からぬ其場^{そのば}の時宜^{とき}、奥様口惜^{かわ}ふござります、友平推量^{ゆうへいざいりょう}してくれと悔^{くや}みか園^{いん}もせき上^あく、佐五平^{さごへい}が^ハ通り一足早^{はや}ふかけ付なべ、やみく討^うしひせま^レい物^{もの}と涙^{なみだ}ながら立寄^{たよ}て、改め見れば此^ことく飛道具^{ひぐう}とて仕留^{しる}し上^あと^レどめをさしものとし様^{よう}も叶^{かな}わぬ痛手^{いた}と無念^{むねん}の^ハ最期^{さいご}、直^すよ追付親の敵^{おのし}討^うんと心^{こころ}にはやれ共^{とも}妹^{めい}といひ三之丞^{さんじゆう}いづれ跡目^{あとめ}を定めた上^う、敵討^{おのし}のふ願^{ねが}ひゆ本望^{ほんぼう}とげたいばつかりよ^すぐく^ハ歸^かり此譯^{このわけ}や妹^{めい}が願^{ねが}ひを取^う交^{かわ}て、醉^ゑた顔^{おもて}してはしたなふ酒^{さけ}と紛らすせつなさを推量^{ざいりょう}してたべ母様^{おやぢやう}。

妹、弟、嘸口惜からふのふ、海山こへてはるぐと、お迎ひよ行た此姉がひ
遺言の一句も聞すいかめしそふゝ亡骸をお供すたあじきなさ。ゞく口
惜ふ存じますと無念みこつたる主従が涙血沙の瀧津浪身もうく、計見
へけるが、母の不覺の涙を止め、我夫一味齋殿嘸に無念みござりませ
う、比性未練の京極内匠、何國み隠れ忍ぶ共草を分ても尋ね出し修羅の
妄執はらさせますぞや、母様の仰の通り、俱み天を戴かぬ父上の仇、且
那の敵、此友平も佐五平めも俱にお願ひ乍上敵討の出立といさめべ
兄弟實尤、サアお願の用意とはげしき詞み母親の嬉し涙もいやまして、
や、出かしやつたく、片時も早ふお願ひど、詞計へいさめ共身の志ほれ
添袖袂涙と俱よ亡骸を抱きかゝへて主従が佛間へこそ入よける、や
や時移り表の方、上使なりと聲高し、斯と聞る母の孝跡み引添姉妹を
杖よ力と泣顔を笑釋みなをし出迎ふ、程なく入來る春風藤藏、衣紋の威

儀も鹿忽の仁躰、つゞいて衣川彌三左衛門、善と悪とをないませの使者
 に、上座より着ければ母の下座より詞を鼻下し、お役目どりやながらに苦勞
 を顧みぬ入有れしお二人様、上使の趣氣遣し仰聞られ下されかしと親
 子手を突窺へば思ひがけなく氣遣ひはさこそく、一味齋殿不慮の
 横死彌三左衛門承つて驚き入愁傷すも詞なき仕合せ、それより付殿様より
 下し置かるゝ上使の趣、やく其義の此藤藏がナ聞ふ、一味齋義劍術を言
 立仕入る身ながら、人手より相人も仕留め、やみくと山口よりのめ
 り死、左程未熟の手練をもつて、八重垣流の蘊奥も極た顔、事おかし、
 ほ前をあざむき年をかさね、喰漬した祿盜人、死首をおつ剝妻子從類死
 罪の沙汰も有べきなれ共、餘り不便とお慈悲の餘り盲目の小童二人
 の娘、親子四人の命を下さる、屋敷を取上阿房拂ひ、上意の趣有がたい事
 だと思ひ、片時も早く此家を立退ぐす／＼出かねば下部より云付割竹より

て叩き出さす。塵芥一筋杖一本、くすねて出る事ならぬぞと。いひならべたる惡言よむつといすれど母お幸さあらぬ休み進み出。上意の趣き恐れ入てはひへ共。我夫一味齋、手練てがねひさもわれに用の役先き、家來も數多召連たれべ、敵いか計の謀計有共、よも鑿あさよひ相成まじ。扶持よを與ふる主の内、左程の大事馳歸り、告知すべき筈なる。左右もあければ死骸も参らす。人ひと々討れしなんぞし、跡方もなき。世の浮説よせつだまれ女、強將わの下したよ弱卒じやくそつなし。馬鹿ばかの家來いえらよや馬鹿ばかが成はい。役目終つて一味齋、阿房あはう烏からすのきよろくと、海を眺あがめて磯づたい歸るを見すまし種たねが島、小筒づつを持て只一討、脇腹わきばら背骨せねをかけ、矢狹間やざまのごとくぶち抜ぬけれ脚すねも腰こしも立事たか、よろめく所をぐしやく。突つき芋刺いもさす様よう、差殺さしきされさせきよとい死死ざま。一分一寸違ひは有まい。是でも浮説よせつか偽いつばりか、返答かへあらべいへ聞んときめ付られて親子共、いひ遁のるべき詞なく又伏沈泣ふしづく居たる。春風氏はるかぜに尤おほのいひ方。

此彌三左衛門お手前よ、ちと尋ねたき事がござる、何かく何成共イサ別
 義でござらぬ、一味齋の横死の去事なれ共、そこが彼欺すみ手なしガ名
 よしおふ八重垣流の達人、太刀打みて叶はじと飛道具みて仕留しり、
 適れ智恵な曲者でいござらぬか、いかよも左様骨と皮とい云ながら侮
 りがたき一味齋小筒といへ共二ッ玉みて、打た子細の具さなり、傍邊
 が手傳ひ仕留ふがなヤ何ぞ馬鹿の家來より馬鹿が成どり、殿をも馬鹿
 と嘲る一言問よ落ねど語よ落る、我と我罪白狀する、内匠が荷擔人春風
 藤藏、科ハ遁れぬ腕廻せど襟がみ攔み投付れば様子小影よ窺ふ友平、飛
 かしつて三寸繩鞠のごとくみ玄め上たり、^間友平出かした、猶も詮議の
 かしる曲者、庭の小隅へぶち込置、かしこまつかせ立ふろと引立られて
 亦頬を投首玄てぞ引れ行跡よ親子が小氣味よさ、心の願ひいひ出すよ
 き沙合と思ふよも、母へ稚子抱き出、さつきの様よナセしハ心よからぬ

鷹藏が手前を隠す一旦の偽り實ハ夫が亡骸も其場の様子も承り思バ
思バ不慮な最期武藝未熟の故と有て妻や子供をば追放とござりまし
てハ一入修羅の妄執も思ひやられて親子が悲しみ斯成はしか三之丞
盲目の身あれバ跡續叶わず氏族の内より一味齋貰ひ置たる此稚子付
上り唆した事ながら屋形を此儘暫しの月日ふ暇下し置れませうなら
首尾能敵を討ふさせ立歸つて後彌三松も御恩を送らす奉公をと皆迄
盲せすそりやならぬ又なせでござりますな、一味齋ハ殿の師
範眼前相人よ薄手も負せず討れ死したる其恥ハ其身一つと思ふかや、
未熟の藝をうかべど習ふた主人ハ猶馬鹿者武道の奥も知たりと謗
ハ歎もまぬがれ給へずシモ是誰業皆一味齋の罪ならずや罪有者の妻子
が願ひ彌三左衛門此取次ハ得せまい、コリヤ衣川様異あお詞四海の武將も
運つきて人手よからむりし例有義朝ハ長田も討れ小田春永ハ光秀も亡

されたるやござらぬか、四國九國よしられし夫目よ遮らば鬼神も討さへぎ
 へ安き身あれ共、手利手垂ひきも叶わぬ、弓鉄砲てつぱうの飛道具それを不覺の罪
 科とが、敵討かたきうちの取次せぬどり、弓馬の家の道みちくらさか、但し女ど理りを非ひよ
 曲まげ、取次玄あんよまいのふせう業わざか、サ彌三左衛門様さやみさんざゑもん返答かへ聞きませうと、老の
 いらたて歯はよきせぬ、衣川いがわが傍そば詰寄いたづらべ、お園おんわけ入押隔おさへだて狂氣わなぎの業わざかコレ
 母様おやぢや、あなたに上使殿かみしのお代かたり、お前の様よう云いしやんして、モ叶ふ願
 ひも叶わぬかないないない構こうやんな、無理むりもいいねねば慮外りゆがいもいいずす、ヤや衣
 川様いかわ返答かへどふでござりますと、いらつ母親おやぢ猶引退ゆうひんたい妹いもうろうろくくと何
 ぞいの、氣きの利きぬ子こで有いいと、口くちで呵かつて目めで玄あんらす、心こころを賢さうき妹いもがが
 伴ともひ入いりえけり、跡あとふ園おんが物もの頼よりむ人ひと前まへつくる笑わらひ聲こゑ、ハマ母おやぢとした事が
 お心安あんひ常じょうの事こと、けふけふ上使かみし重おもきお役わざ目め、身みのせつあさあさよ顧かへりみぬ不

調法も女童に赦し下され、此上くど人やと及べず、只よき様は前の執
成^{シテ}阿房拂を止みして敵討のか暇を乞得てくれよといふ事か、一旦追
放との御銃意へ、綸言ならねど再びかへらず、片時も早く屋敷を明親子
諸共立去と、苦り切て取あひず^{サア}其お怒^ハ尤ながら、母が不禮^ハ幾重^ム
も、身不肖なれ共彌三左衛門老母が詞耳^{アリ}はかけぬ、お慈悲^ヒをもつて
追放の謳意を逆へば死罪^ハ成がや、^ミ罪なふして配所の月を詠んと、
歌人も望し例あり、科なき科に追拂はれ、他國^ハさまよい果んより、首差
のべて親子共、お國の土^ハ成のが望、そふなふ此家へ出まじと、腰をすへ
たる大丈夫^ハ動氣色^ハはなかりけり、彌三左衛門大き^ハ怒り^{サア}女と思ひ詞
甘く猶豫^ハ付込不敵者^ハ誰が有引立よと、下知^ハ早くかけ出る組子、面
面^ハ十手電^ハ打ふりく追取廻し^{サア}國境^ハ迄早歩め、行すバ薙^ハすへ引出さ
ムか、^ハくどふじやと聲^ハなり^{テモ}仰山なお衆方、女一人を相手取さばせ

多勢が立騒ぎ、大方内匠が弟子と見た習ひ込んだるお流義の、微塵みぢんもあらぬ用意仕や、おこがましやと猶豫ゆうよもなく、打ふる鐵刀手首を摑み七八間
 犬兒投續いぬわらわづれいて二番手三ばん手、腕うでのしがらみしつかと組くみ、男おとこといへどわしからは、よつほど小兵しょうへい見るからが、手練てのねりの程も青侍せいし稽古けいこさんせと弓手馬手、とたんの間拍子ひょうし、ヨイサト、授付じゅふられてころくろくろびを打て身退く、跡あと多勢が惣そうがより備そなへへを乱し我一わがよ寄よよせを張はのけ打たをして相人撰あらわべぬ働きよ引ば入かへ立かはり、千變万化せんはんわがわといどみしれ目覺まめしかりける次第也、只一人よ大勢が叶はぬ敷ひらせとしどろ足表あしめをさして逃なげ延のびたり、透すきを伺うかがひ彌三左衛門長押おさみかけたる館追取りょよざい、慮外りよがいの女めそこ引など用捨もなく突かけるを、よけても透さずたゞみ突つづ、ひらりとはづせば又突かしる馬手まてよかはし弓手ゆんでよ流し、程よく渉首しじゅかいつかみ穂先ほ雪の細腕ほそわざよかためし手の内大磐石だいはんじゆ、手並てのみは見へたと聲高く、開く一間

の障子の内、中央より大守音成は扈從より衣川彌三郎、近習の侍雲のごとく敬ひかしづき座し給ふ、音成仁和のまなじり、日頃忠勤怠りなく師範なしたる一味齋横死と聞より胸苦しく、定て汝等親子の者敵を討まほしからん、適討して名を日本よ取せんと彌三郎より案内させ、裏路よりしかも、敵は一流手練の内匠、討得ん事の覺束なく手並を見んため彌三左衛門詞を以て心を勵し、手だれの力者が園みを破る其手並で、京極内匠鬼神なり共、打兼まじ、心任せよ發足を差赦す、去よても一味齋知行は與へ置たれ共、奥義を傳へし我師匠、死骸より下よ衣川が下知よはかなき死骸を、目通りよ直し置、音成兩眼うるませ給ひ誠や名香は薰るをもつて火よ焼れ、花は色香の妙成より折取るゝも浮世のさま、惜や無双の一味齋無慚の最期とげしるよな、敵はそれと知たる上、天を翔り地をくぐる共、師恩よ報ふ音成が力と成て汝等よ討得

せん事手裏又有かほどの手者も運盡て京極づれが太刀先又百年の
 罷を斷んとは思ひきりし又殘念やと悲歎又むせふ涙厚き恵又三人
 の只、ハツとひれふして有がた泣又泣沈む思ひがけなや一間の内あつ
 と叫びて飛走る血沙驚き障子押開く内又哀れや三之丞腹一文字又息
 たへド、ノク情ない時も時ひよんな事仕てたもつたと取付すがれば、
 見ぐるしい母様皆様も見てござる泣てばし下さるなど今際の身又も
 居並し人目をはづるいぢらしさ有又もあられず母親がヨレバ聞やつた
 か志らぬが殿様のお慈悲でと様の敵討のお願ひ叶ひそなたも一所
 よ連だとも思ふて居る物何故又何を不足の此生害夫又別れ力ない母
 又此上命をペちゞめよとての覺悟かと恨みかてば、母様勿体ない、
 何し又其氣でござりま志よ、有がたい殿様けなりいの母さま姉様只
 三人の兄弟も二人の女わし一人男又生れた甲斐又あく一生父のお世

話又なり、非業又お果なされたる敵を討又行たふても、目かいへ見へす
口惜い弓矢神又も生地神又も見はなされたる此體からだせめて門出の血祭
りと成て死ぬれば父上又冥途めいよで詞も有ふかど思ひ極めた覺悟又名
殞おちふしい母様、姉様此世からなる盲目の暗の地獄じごくより落るとも首尾能敵
を討たとの冥途めいよへ告る便り又くゆらす香の手向をば、草葉の影から
待ますと、いふも苦しき息遣ふきひ、太守も不便と瞬玄まばたきげく、誰か有春風藤藏
を是へ引、うと答へて友平が憎にくさも憎にくしと志ばかり繩なわ宙くより引立馳出はせる
罪つみの今更揚あきらめるよ及ばず、重うれしきそやつが所爲しはざ敵の片われ冥途の
門出豫讓よじやうが裂し衣ころも又もまさりし父へ家土產づとならん、レふ園首刎弟はね又く
れよ、うといふ間も一討う、水もたまらず春風が首提ひつけて立向たむけひ、まく三之
丞、殿様の恩おん惠めぐみ有がたふ思やいのと、首差寄さしおきれば苦しさ忘れ手て又探さぐり、まく
有がたい添あわせい、僭わのれよふアとし様を、むごたら乞う討うふつたな、憎にくいといひ

ふか恨めしいといひふかとふ仕たら腹いよふと、たぶさ攔んで様板よ、
打付うちくよぢり付うち嬉うれしやわしの殿様の、お影で母さま姉様あねさま手て朝あさ始はじを
仕ましたも、海山深きほ恩のふ禮、死んだ跡でも殿様へ忠義を忘れて下
さんすな、殿様お暇ひま上あがます、母様ほ無事で、姉様あねさままめで、くとつどく
よいんで來られもする様よ、死でたもんな、くと夕霧ゆきりくらき、短夜みじかよの宵よ
の夢ゆめとぞ成なりけり、そも夢かと三人さん人が跡あとや枕まくらよ取とすがりわつと一度
よ聲立こゑだて、涙なみだ死出しじゆの山路やまぢよさつき、雨あめとぞ降おちなまし、彌三左衛門よしみ聲こゑ勵さげま
しよしなき歎なげきよ時移ときあわせり此上猶豫とうごい恐れ有あ、一味齋いつせいと三之丞さんじやう二人ふたりか戸と
ト彌三郎よしみ、よく取置とおきて亡跡むつあとの問吊とどきも怠おこなく、此家このよ留とど主すけぬしの氣き逃のがひなし早
打立あたやれと勵さげませば、實じふもと親子おやこが立上あがり、讐討しゆとうほ免下めんげさる上、跡あとよ心
も残のこらねば、此儘直はづき發足あがといさむ、中なかよも妹しまいが暫しばし別わかれもうない子この
彌三松連よしみ連よしみて立上あがれば、庭にわよおづく、二人ふたりの奴やつ我われよ二人ふたりもほ一所ひとよと尻しり

引からげ勇立、お園制していや／＼、一々行ペ人目有、我ニ迎も敵を
べねらふ間ハ別れく、供ハ叶わぬ去ながら、敵の有家聞出しひそち達
二人が忠義の手際、勝手次第と立並ふ、中で手利の大やうさ、いざしせ給
ヘ母様と先よすりめて立出る、待三人饅別せん、用意の品あれへ持は
つと小性が捧げ出、二人が前よ直し置、小太刀二振、二人の娘へ、母へ遣ひ
す長刀ハ連立中の長船祐定、有がたやといたハけペイテ門出の盃と扇
をさつと押開き、此扇面み書しハ浪ミ戯る三つの猩々、取も直さず三人
が老せぬ宿の門出も、頗て目出たふ歸る浪、ハッと母が請初て廻る扇の、請
わたし肴くれふこきりこの二つの竹ハよしを重ねて打納めたる代
かないづれも立やれ、ハッと三人が立事ハ立上れ共屋形の名残、よしや、遂
よハ出ぬべき、浮世の月の照くもり定め泣く、出て行思ひがけあく後
方不意を見すまし飛來る鐵丸、透さず袖みて打拂ひく、ムカコリや百兩

の金子の包、飛道具、氣遣ひあし路用、せいき重のほ情、爰構
すと行やれ。

○第六

玉のほ殿も獨寐ひいやよ、さまと葛屋の忍び寝、見て明したや須磨の
月、鄙も名所の一ふしひ、心有磯の海端、芭籜園の茶屋が軒道行人が一
群、暫し立寄足休、茶舌話の口よ、何と皆の衆、月日の立、夢の間にや
ないかいの、暑い長いの六月もつい是益前、秋の来るしか朝晩の大分涼
しい、其月日の立次手よ、来る十五日、精靈祭、何所もかしこも冥途
からふ客設け、瓜や茄子やあかのみや味ない盡し、あんな馳走を悦んで
呼れて來る佛の住家、極樂といふ所へよくく不自由な所と見へた、
思ふ儘、浮世なら、益の日一日ぶりや地獄へ行て見たいシリヤ又なせよ、ハテ
餓鬼も佛も一同、娑婆へと來た、留主事、青鬼、赤鬼、牛頭、馬頭共をせ

ふらかし。罪人共をさいなんだ手や足のたくわん漬目の玉の飛だんご。
頬の皮の厚焼などが喰て見たい。まゝと蓼を喰、虫も好い。須磨寺の鐘
よ驚く道者共、日暮亥やどちりぐよ、行跡片付どつかひど、女も宿へ
立歸る、ふくるも終ひ落る露の身の此地や我を待そ共白砂道をたよ
たよと、一味齋が妹娘、お菊が手を引稚子を、杖よ柱よ後楯供み從ふ友平
が背負ふ葛籠もかいぐしく立留つて、ヤヤ奥様、親旦那不慮よか果な
されしより、何卒敵々廻り逢、一太刀お討あされんとの存念、ハテ奴めが
爲みもお主の仇讐やれ助太刀して、遁お討せやさんと爰迄お供へ致し
たれ共、お力落しの上旅のお勞れ、何やらかやらでお顔持もすぐれず、
祝儀はや納もしもの事がござりまして、却ては不孝、ハテモ佛様の見通し、
是迄お出かけなされたで、お討なされたも同然、一先づ國へお歸りな
されどつくりとほ養生、お前様のお骸を、親の籠とお大事みなされま

すも、又一つのほ孝行かと存じますと、愚智文真も遣び人の、主と見習ふ
 真身の詞^{ことば}、深切^{しんせつ}よふ云てたもつた、わしはかよひい女の事、男といへ
 ば稚^{おさむ}い彌三松、一人ならずふたりの足弱^{あしおち}長の道中、愛疎^{あいそ}もつかさず、ほんそ
 なたを父上の息災^{おきさい}な内侍^{うちし}、取立なんだが今では悔^{くや}し、い是非^{はいぜい}一刀討^{うた}い
 で^ハと思ひ込んだる父の仇^{あだ}たとへ此身^ハ病勞^{ゆみつか}れ、敵^かと出合^{うぶつあ}運盡^{うんづき}て、返り討^{かへりう}
 よ逢^む逆^{むか}も^ハ、其返り討云ぬ事、其お心^{おこ}を聞上は雲の裏迄^{うら}供致^{うけし}し、ほ本
 意^{おもて}を遂^{とげ}させまする、其お足^{あし}では道はか行^{ゆか}ず、夜露^{よづゆ}を請ては一倍^{はい}身の毒^{どく}
 私めは跡^{じゆ}の宿^{しゆく}へ立戻^{たき}り、駕籠^{かうろう}借て來てお乗^のりさん、それ迄^{うら}ちとの間^あお二
 人は、此所^でほ体足^{たいそく}、幸^{こう}の此茶店^{みせ}爰^あ爰^あと氣を付れば、やんちや盛^{さが}
 りの彌三松^が、べいよ何所^{どこ}ぞへ行^ゆならおれも行^ゆ、めつそふな事^いいへ
 しやりませ、シベイは痴氣^{せんき}が起つた故、あつしをすへよ行^ゆまする、ほん様^{さま}
 もござりましたら、又醫者殿^{てん}が手を見て、あつしをすやうといひふぞへ、

どりや早行て來てと足がるよ、かしこをさして急ぎ行、いく行よやきか
ぬと跡追て、泣子を母がすかし兼彌三松又忘りやつたの、殿様のふ影
で、何くらからぬ内を振捨、此様も出て來たの母が爲よハ父上、そなたの
爲よハ祖父様の、敵を討み出たの玄やないか、町人百姓の子と違ひ、侍の
子ハ年相應、智恵才覺がなければならず、ちと嗜んだがよいわいやい、母
ハ比日氣色ハ悪し、其様もわやくいやるのがほつとりと聞づらい今よ
も敵も出合たらどふせふと思ふて、定めて泣がなするで有と、屬
ます母が顔詠め、ヴァイ何の敵がこへからふ今でも爰へきふつたら、コレ斯し
てこますと小脇差抜より早く飛上り松の一枝切落す、出かしやつた
くと撫つさすりつ母親が、あいたてなさも先立し父の孫ぞと譽そや
す、折から須磨の家よ精靈祭る高燈籠、見付る彌三松、コレかし様、リヤ何の
火じやし、あれハの先立玄やつた佛様へ、お備ゆ火玄やいの、そん

ら立ちもあの様さま火を燈ともして、内なら安い事なれど心こころ任せぬ族の
 空、無理な事いへぬ物もの玄くわんや、いやく。それでも燈して下されど、ぐんせ
 ない子こよせがまれて、詮せん方かた長き葛籠つるらの紐ひも松まつふりかけ蠟燭ろうそく、火繩ひのわをう
 つす硫黃りゆう迄旅たびの用意ようびの馬挑ば灯とう引上あがれべ詠よめ入いかし様さま立ちも此様さま火
 を燈ともすと、死死しやつた祖父ちじ様さまが是見て嬉うれしがらしやるなアと聞き母はは親おやし
 胸むねふさがりたつた一人ひとりのほんの孫まご、そなたが思おもふて備そなへへた物もの悦えべしや
 んせいで何なんとせう、請うけさ玄くわんせいで何なんとせうぞいの、それそれ付つても父
 上うへの敵てきの有家尋たずんたずと、大事だいじの母はは様さま姉あね様さま共とも別わかれく、
 ハ重おもなれど廻まわり逢あつねべのめく、
 と得討とくとうぬ不孝ふこう不甲斐ふくわいなさ、喰く父ちち上の冥
 途みちから、呵いかつてござらふお腹はらが立たふ、堪忍かんにんして下くださりませ、
 益ますの火ひを燈ともせよとせがんだい、思おもひがけなき父ちち上の釣つるの難なん、身みをさか
 れ、冥途めいとよ迷まよふてござるのを物ものが志おもらしていへしたか、杖柱つえじゆ共とも姫ひめよせの

頼む夫^およへ置別れ、親^おも永離^{えり}三惡^{さんごく}のはかない悲しいあぢきあい、世の憂事を身一つよ寄たへ何の因果ぞと、人目あければかこち立正^{せう}脉涙地^{なまめだ}
よ落て野路^{のぢ}の草葉^{くさば}や枯ぬらん、親の心^おひしらぬ子^がが膝^{ひざ}よもたれて現な
く、寝入ればお菊^{きく}は顔^{おほ}を上^{うへ}可^か愛^{わい}やぼんが内ならべ透間^{すきま}の風^{かぜ}もいとふ身
の、母^おが膝^{ひざ}をペ茵^{じん}とも寐冷^ねさせじと据^{すそ}打着^{つき}せ、我身もそこ^よ友平^{ともひら}が歸る
を松^{まつ}の下風^{かげ}も仮寢^{かりね}の伽^がと成ぬらん、夜も早初夜^{ゆふ}の空くもり、遠寺^{とおてら}の鐘^{かね}
蕭^{しづく}と降雨^{あめ}凌ぐ傘^{かさ}も破羽^は二重^{にじ}の垢付^{あか}し、大小腰^{おほちこし}よ掘み差鑄^{さばく}浪人^{なに}のみす
ぼらしく、歩み來かしり立寄て^よ思^{おも}ひぬ俄雨^{はつかい}降^ふと日和^{ひより}成^なが一時、急
がす。バ濡^{ぬれ}さらま玄^{あか}を旅人の、跡^{あと}より晴^{はる}し野路^{のぢ}の村^{むら}雨^{あめ}、太田^{おおた}道^{みち}濯能^{ぬけのう}讀^よだと
つぶやきながら邊りを見廻^{まわ}し、幸^{こう}の挑灯^{てうとう}一^{ひと}ふくと懷^{いだ}より、煙管^{えんপান}取出^だし
すつばすば^あ旅人^{りょくじん}そふながしかも女路錢^{めらき}よ盡^{つく}て野宿^{のしゆく}玄^{あか}たか、そふ共見
へぬ身の廻り、松^{まつ}と挑灯^{てうとう}かけたの^へ道^{みち}の友待^{ともまわ}、目印^{めい}か、何者^{なんしゃ}成^なぞと立寄て

顔差覗けば目を開き、やうそなたの敵京極内匠、そういうふそちはお菊
 さやないか。よい所で逢たなあ、我よ逢とふてく夢現よも忘れぬ程。
 懸こがれて居たれいやいといふ聲耳よ目覺す彌三松様子見せじと母
 親がうつ燈火即座の氣轉心有とい悟らぬ内匠、何で灯を消た、^{ハテ}聞へた
 暗^{くら}りとして逃ふであ斯見付けたりや逃しひせぬ、^{すがた}なら風俗なら春の柳
 よ梅花の薰り、前よかへらぬうまいく手強いそちが親吉岡討て捨てた
 も立退たも是皆そもそもじよ怒たから命よもかへ身よもかへ思ふ男を其
 様よ嫌ふ物でハないわいやい空^{そら}へくもるし人ハあし、斯いふ所で出合
 のが結^{むす}ぶの神の引合せ、應^{おは}といふて抱れて寝いいやといへば只一討返
 り討じやがそれでもいやか返答せいどふじやくくくく口計目み
 に佛もなかりけり、お菊の今ぞ優曇花の仇を討んす氣くぱりも、さああ
 ぬ体^み、^ま内匠様といた事が、うわたらしやとふからむ前よな、心の内よ

神かけて、何じや心の内よ神かけて、ア惚て居るひいな、ア惚ていると
ハきつい嘘うそ、ヲモマア疑うながひ深い、たとへ業平見る様なよい男でもこつちから。
思ふ計ハせんがない、ボシニ國々居た時から付つ廻まわ、しつか前の心底嬉うれしい
との思ひながら、アといひれぬ人目の鬪、今でハ旅の遠慮とおりもなし、ハぞふ。
成り共成氣ぬきでも顔見て居てハ恥はづかしさ、それ故火をバ消たのハな、斯せ
ん計と拔打ぬき、切込刀を柄で請留ねまつ其手玄や行ぬ、そふ手剛さすがい程猶執心應
といひねば、其體首切ておいても抱て寐る、痛いたい目せぬ間ま、得心してサ
きりく抱だかれて寝上らふと、はつしと蹴けられ齒咬はがみをなし、チエ、念の入た
極惡きわひ人ほんむだ言こといはずと勝負仕しゆぶや、サクさくくどふぢやと誥こうかくれバコリヤごくよ
も立ぬよまい言ほざくあやい、我が爲め又親の歎のぞみ、かれを其様よ切た
がる、かりや又我が内股うちもいの長刀疵ながれが望玄やハい、つれなふいはずと、コリヤな
びきおれと、猫撫聲ねこひでの頬憎ほほにくば、油斷ゆだん見すまし鐵石てつせきも割われよどふ菊きくが尖さきき刀、

丁ど請留、ヨウくほ手線^{うしん}上達^{じゆだつ}し、所を我等がまつ斯と付込刀^{つけこむ}請流^{うけなが}し拂^{はら}へ
 パ付入虛^{きく}實^{じつ}火花^{かは}を散^{ちる}して戰^{たが}ふたり、道^{みち}かよひきお菊^{おぎ}が刀、打落^{うちおち}され
 てヨハ無念^{むねん}と漂^{ただよ}ふ肩先一刀、切れながらよ、よろぼひ寄^{よそひ}内匠^{うちば}が柄元^{つかもと}しつか
 と取^と、ノロ^のおしや腹^{はら}の立^た、かすり疵^{きず}さへ負^おせもせず、此儘死^まの父上^{おみ}、冥途^{めいと}
 で何と云譯^いせふ言譯^いがあいわいのヨ、姉^{あね}さま一所^{ひとしょ}有^あならば、此無念^{むねん}
 有^あまいもの、それも今更悔^{さらぐれ}で甲斐^{かい}なし、骸^{からだ}いちゞ^{いぢづ}み切^{きら}るし共^{とも}やハカ
 此場^{このば}を遁^のそふかと氣^きハ磐石^{いは}の女氣^{めのき}も深手^{ふて}よ^いる血^ちの涙^涙、悲しかろ
 ノ、ヨレよふ聞^きや、よくく、深い縁 ^缘なりやこそ、親子共^{とも}ふれが世話、冥途^{めいと}
 へやるより何切^きがよからふか、胴切^きがよからふか、梨子割^{さりわり}みせうか薄切^{うすき}
 も面白い待^{まつ}よ初^{はじ}太刀^{たて}、けさ切^き、二の太刀^{たて}又極樂^{ごくらく}參^{さん}り、佛^{ぶつ}みなれと拜^{あが}み討^う
 直^{ただ}またがりど^のめの刀、ゑぐり苦^{くる}しき四苦^{しき}八苦^{はく}、虛空^{こく}を擗^うみ無念^{むねん}の最
 期^{とき}哀^{かな}れといふも餘^{あま}り有^あ、ノミ先一方^{かた}ハ片付^{はんぷつ}た、心^{こころ}がしりにこいつが姉^{あね}

れを方々尋ねて居るゝ、思ふ様なら姉めをぶち放し、我を助けて置たい
わい、儘ならぬ浮世玄やい死んでも顔のかへいらしさ、ちと笑やい
のゝ、モツいぬぞよさぞや恨があらべ幽靈ゆうれい又成て出て、われと一所又行
ぬかい、モ儘よ何の死人又文言玄やどつぶやき血刀押拭おしぬぐひ鞘さや又ふさむ
る不敵者、塵打拂ほこぶひあたりを見廻し、テモ扱あつかもふれ又ちよぼくさぬかす内、
ちやくと葛籠くずらを片付かたづけおつた慈悲じひ深い此内匠様うちばへ天道より與あたふる糧添かたて
しと立寄て、脊負せきふふ我慢がまんの欲惡心、此者共を手の下した又討うひいか様鬼神おにごみか、
人間よてはよも有あじ、ハ、思ひがけなき葛籠くずらより、ぐつと突出つきだす小太刀
の切先きりさき、曲者まげものと拔合ぬきあせ、二打三打打合うちあしが、ひらりとかへしいつさん又
跡あとをくらましうせてけり、モ何く迄もと友平が、かけ出す足元あしもと躊躇ちぢめく死骸しがい
アヨリ、ふ菊様きくさまが切れてござる。ふ菊様きくさま、今一足早くばな斯かやみく

と討しあせじ、死したり口惜や、僻曲者逃さふかとかけ行んよも跡氣
 遺ひ此ぼん様ア何所ハシマござる彌三松様ミツマツくクと心ハシマ空スカイ闇路アヤムチをペ照す
 燈籠幸ヒラタケンと手早く紐ヒモを引ほどき彌三松様ミツマツくクと尋る目先落たる守りの
 袋物カネモノ何玄コトハシや何ハシマでも敵の手がしりと袖アシ又捲ハサフ込見廻すこなたあやしや
 葛籠カキロの内よりも、きらめく刃先ヨコシマ不思議ハシマと立寄紐解ハシマ引明る内ハシマ又彌三松
 友平見るよりアぼん様アボンかよふままで居て下さつたのふくシテ誰此
 中へふ前ハシマをバスして入て置ました譯ハシマいれしやれハシマどふじやくシテ
 譯ハシマ何ハシマもしらぬけれど、かシ様ハシマが入て置しやれた跡ハシマやらかシ様ハシマ
 をきついめハシマ合しおつた、おれが這入て居る葛籠カキロを負ハシマていのふシテしむ
 る故ハシマ出る事はあらず中から此わき差で突た計ハシマじや、かシ様ハシマの何所ハシマご
 ざる。おりやかシ様ハシマ逢ハシマたいわいやい、かシ様ハシマくクと母ハシマは此世ハシマなきぞ
 とも、しらず泣ハシマくしたふ子ハシマを見る友平ハシマの我胸ハシマを、百千鈞ハシマの鉄槌ハシマ又打碎ハシマ

かるゝ心のせつなさ、道理じやく。尤じやく何よも泣事いな
い、かゝ様のほんを連て跡から來いて、つうと先へ行しやつた、そ
んならわしも早行たい、行いでどふしましよ、何よもしらず可愛そ
ふよ佛様で、有わいな其佛より此佛、南無阿彌陀くく、いたひし菊
が亡骸を見せじ泣せじ稚子よ隠す葛籠、殯涙かくせど聲くもり、^{サア}ぼ
ん様行ましよと、手を引れ行子の下み、母のせなかみ友平が、生死を隔つ
涙川浪の、哀れや磯づたいがゝ様いのふく、是非もなくく「たゞりゆ

く

○第七

すがるふす栗柄の小野の百千草、花の秋とや夕顔も、色をまじへてさま
さまよ、街の多き在所道直ならぬ身の隠れ笠袋分銅玉、鍵、書し板、^{かぎ}書^{がき}合^は寄
たかる、往來の人も掘み頬張はどふじやと胴取が、こまの眞木を捨廻し、^{しづき}あは

親の一割子の四割、欲の慰み氣の薬ゑいかく。ソレ廻つて有ぞ
 出たハチット玉じやぞ五文有バ味いハくく、やつぱり今度も玉のね
 まりをいてこまそ、玉のねまりく、イヤコレ茂九郎其玉のねまりハ人油と
 いふて切疵よふきくげなの、コレ話しせすと皆しかくはらんせく、
 ナ合點じや玉よく袋様出て下さりませく、ゴリヤ笠來てくれいよ、
 築がきてほしい、おりや分銅よせう、サア皆張ハよごんすか、ア時よ鍵ハ明て
 有の、エイ、そんなら親から勝負玄やど、胴側はづんで眼を三角六角のこま
 ころりとけ出たのハ何じや、ア鍵でごんすと、引かけて皆なでよ鍵た
 くし込負腹立て張人共、どふやらくらの有そふな、けたいなこま玄や
 と一はな立しやべる男を引とらヘ、ヤ四三の胴八といふて、手奇麗な胴
 頭を、くらであらふとぬかしたがよい、是がよいかと頬びつしやり、張
 れて附鼻こうりと落ヒヤ、男の鼻柱を落したな、返せく、鼻返せ、ひやな

といひ鼻か、鼻じや、サイ馬鹿め、鼻なら爰み有いれど、蹴ちらかされて砂まみ
れの鼻懷へ、ねじ込んでくた／＼つぶやき歸りける。何ばべらぼなやつら
でも、まんざらたゞもたくられず、相應よ骨が折る。ドレ一ふくとする燧火
口へ移るちり／＼日脚、鼻緒すれしでちんがちがちんば引摺下駄かた
しさげた。傘辻君の所体失ふ歩みぶり、君達ち早ふ出かけた。雨も降ぬ
よきつい用心じやの、サイナアどうやらくもつて有た故、持て来て邪魔よ成
いつそこまゝ笠はろかいな、夜ぱりこきめらが何ぬかすぞい、日がな一
日阿房共を相人よほつとりと草趴る併おれがこま廻して手を遣ふの
も、わいらが客よ腰遣ふのも、玄んどは替らぬけたいな商賣、ハモ、どんと
いや氣よ成たわい、アイこちらも勤い飽たはいな、ヨ聞此間も經師屋の提
携見る様な物でわしが錢箱をすつての事突くだかうと仕をつたれい
な、ヤそりやまたしもじやわしやせんと、芋の様な物で突りよとした。

それは長い物で有たの、ア鳥さしで有たか志らぬ、ハいつでも小鹿や
 お仙めはうきくしけつかるが、黃胆の菊野めの頬ばつかりがうきう
 きと、黃色で棚の下よそふ成てけつかる所へどんと瓢箪の化物じや、
 そんな事かして、客を押ゑふとしてもぬらくらだまして抜をるは、ア
 ます玄やないなます玄やないの、ハ、わいらがいふ事聞て居ると腹が
 へる、へり、へろよりましかいな、アほんよわいらも腹が淋し成たら早
 ハ仕廻ふてこつちへ來い、何んなど立るかな、お前の所は何所玄やへ、
 こちか、こちや七月のない所玄やひやい、何所玄やいな、益なし玄や
 と打笑ひ荷を振かたげ別れ行、若黨といへ共年の古大小、道よ武家のお
 となとてきつと角有國訛り、コヤく夜發共今夕も又われ達よ揚料とやら
 を下さるからは宿所へ早く引取よど、財布とくく明た口めい／＼

仕廻コリヤアどうしたお志イサ別の子細シカはない、此所の鎮守チンジウ牛頭天王ウドウの靈驗れいがん
あらた成よよつて、手前がほ主人七日の通夜ツナガを遊ばさるゝ御祈禱オキヒヂョウの
其間施ハサコしのお金だへい、ソリヤこそ様子シマツヅが有間の松じや、そんあらこぢら
ハ因幡イチハの松よ、おばゝ四十九で白歯ホラハで島田シマタでしなのへ嫁入ヨルくこんな
誂ツカらぬ、ヨヤサン事はなし、仇口アダゝみ歸りける、騷ハヂがしい女共ドヤ此様子シマツヅほ主
人へ、ゆ上んと老人の心ハ先へとつかへと元來ハタキし「道へと引返す、薄ハタケを分
る秋風ハタハタと吹送りたる乗物リモハ、急ぐとせねどふのづから、栗櫻野スルメノみこそ着
よけり、只今途中ながら申上たる通り、夜發ハツフ共ハタハタの殘らず拂ひ置ました
と、引戸ハタハタ明れば立出る容儀器量ハタハタも吉岡ヨシオカが娘と誰か夕げわい作りやつし
て辻君ハタキミと見せばや見せん其風情ハタハタ今宵も是よ通夜ツナガすれべ、明方よ迎ハタハタひの
乗物、そち達ハタハタの旅宿リョクシユへ歸れ、早ふくと追かへし、邊り見廻し獨言ハタハタ、旅宿近
邊の人目ハタハタを憚ハタハタり、毎夜爰迄乘物ハタハタよて忍び出、往來ハタハタの人をためし見るも今

宵で五夜さ夫ぞと思ふ者も出合ぬ、神佛のお恵みのないのかと、思へば悲しい身の上、一味齋が娘共いひるゝ者が此様あ、夜發立君の姿そやつし、苦勞心苦をする事も、皆京極めが所爲故、憎しと思ふ念力も尋ね逢いで置ふかと男勝りの其魂たましひ一腰隱し置露の草の忘げみよ、立盡す絹物ながら玄みづきて、一重よ薄き青侍通りかくるを走り寄遊まわんでおくれど袖口そでぐちよ手を差込さしこどぬめぬ肺鼻てのはなよ扇あぶきのいやみして、ア月前まづせんの惣州そぞう面白おもしろいなあ、併囊しかじかうち中よ四文錢よんもんせんが三銅さんとう、是を遣したせんの、三文の釣つりよかくろより、我住宿すくへ歸かへらやれ、コレそもそもじへそこよいつ迄いまでも稻荷いなりの惣嫁そぞうかわじや有まいかと、まつ毛ぬらして、行過る、大道一ぱい大股おほまたよ、すれぬ太股ふとおきすれた顔取出すく相撲あらが歩み寄まわ菊野きくのよ、小せんよ、又今夜もおらぬいは、名らいな、＼＼＼姉よ、一番もんしてくれぬかい、いかなお敵ごっこでもなア、ヨリヤ左り差さたらなアと寄かけしが我より抜羣ばくぐん大女房おほめふさ見るをしよげるあまへ聲こゑ伯母おおや

泡地取見よどんや、だんないわいの、どいつでも留ふつたが最期、此いた
ち川が聞んのじや、コレが力が見せたいと、嘘うそへ見へすく輝かがで、伊達いだ
こきちらしいたち川、尻しりこそばふも逃歸る、又の往來を、松虫まつむしも、すだく鈴
虫かづかの音、八條流の乘振のりふえ立派たてまいを見する西國武士せいこくぶしき進すすませ手綱行駒てつなゆきこの道
をさへぎりさへりやく遊あそんでおくれと掛鞍かげらえ手をかくればコリヤく用先ようせんを
妨さまただる不敵ふてきの女め、留とどる者ものえ事をかき、馬を留とどるといよつ程な助兵衛すけひょうゑやつ。
そこ放はなせ下れく下りからふ、家來共暫く待まつ留とどの心こころを持もて扣ひへ
しり、様子有女あがねと見ゆる明あかしを持もと提燈てうらんの、火影ひえいえとつくと互たがの人物見
上見落あがれし打うち黙頭まぐつ、そち達たちの行先ゆきの出口でぐちえ扣ひへ待合せよ、早行はやくくと、家
來を拂はなひ實じねさま絶たがて久しき對面たいめんといひ、殊更夜じさらや隱ひんの事なれ共中とも見違
へへ致いたさぬ、こゝ元げんハ藝州吉岡氏よしおの息女むすめでござらふがの、左様さうようの者ものではござりませぬ、やく隠ひんし召めしると、馬の三途さんづへ膝折ひざかくめ、拙者しやくしゃ

事ハ立浪家の執權轟傳五右衛門とナ者、一味齋殿の高名を慕ひ、お國
 ヘ推參致せしは早十七ヶ年以前、其時そともとハ幼少の折なればよ
 も見覺は致されまい。親父又は數度ハ對顔致し、劍術奥義の端々をも
 承り得たる事なれば、外ならず門人同然の傳五右衛門、是迄も書通を以
 て音信絶ず、然る所一味齋殿不慮の横死と聞しより、死なしたり殘念
 や、直様馳付諸共又敵の詮議と存玄たれど、仕官の身なれば詮方なく明
 暮無念又思ひしが、不思議又も今、其息女又廻り逢ひし事、吉岡殿を再び
 見や心地して落涙致す、去ながら心得ぬ其有様ハ、聞へたニヤ敵をねら
 はん其爲又姿をやつせし辻君あるか、サテたくましきふ志女ながらも天
 晴家柄、いか様親父の胤なるぞや、ボチ出かされたり頼もしと感じ入たる
 面色又、人の心の花見へし園ぞと名乗手をつけバ、傳五右衛門ハ懷中よ
 り焼印の札取出し、敵の有所分明ならず。六十餘州の端々迄も扒し尋

ぬる所存ならんか、今九州より新關有てうかつゝ通行成がたし夫こそ
關所の往來札惠むゝ夜發へ今宵の花代、^モ添いお志、本望遂て此お禮れ、
目出たふ承へらん、お去モペさらばと默禮し、誠の心筑紫人馬を、早めて
急き行、便りなき身へ世の人の情の詞力草、伏拜みてぞ泣涙、掛る折から
いつきせき來かしる奴もまつ黒な、糺のだいなしわからぬ闇、はうど躡
き行當り、是ハしたりめつたゞ心のせきまする者だからでつかちない
鹿相致したまつびらく、次手又お尋やすふり、此所の鎮守とやら又、女
中一人通夜なされてござるのを、存し有まいかな、そふいやるに
友平でないかいの、そふおつしやるの、お園様でござりますか、是ハ
したり、レく嬉しやく、何か仰置れましたるは旅宿へ漸着仕たる所、
是は座あさると聞やいな、モ走らない道を暗雲又尋ましてござり
ます、大義く、長い道中といひ女子供の初旅なれば、さぞかしそな

たのいかひ苦勞。よふ介抱してたもつたのふ、そふしてア妹や彌三松の
旅宿よ休んで居やるかや、成程ほん様に旅宿で佐五平よ急度預け置
ましたが隨分に機嫌の能ござります、それで安堵仕ま志た、いやもふ
案じられたハ妹が事、虛性な上、持病の癪もし道で發りハせなんだか、
達者で有たか無事あかと、かきたくる程尋ねられ、答へん詞荒涙膝よ淵
なす計なり、差うつむいて涙の体の合點が行ぬ氣遣いしい、どふや
ら胸がさへがれて心元ない様子を早ふ聞してくれ、なぜ返事せぬヨリヤ友
平、何と玄やどふじやどせりかけられ、無念な、口惜ふござりますひい
のふ、ナニ口惜い無念など、ア次上るも面目ない事だが、お妹様お菊様に
人手よからつてあへない最期、アと仰天氣の半亂餘りの事よ涙も出
ず、むしやぶり付て引きしやなぐり、何のことぢやどやい、誠とかい
やい、お道理だくわいの、何者のか所爲敵の何やつ早ふいへ、こ

黒やどふせうぞいやい／＼、お道理だ／＼道理でござります
いのふ。コリヤ所何での事じや、サレバ須磨の邊迄お供へ致しましたが、旅勞れ
えやひ持病發り、うろたへ廻つて私めに、駕籠借へいと後の宿へ引返し、
又立戻る途中みて、あやしき曲者下郎を目かけ切かけしを、拔合せ二打
三打、合す間もなく遂行しを、追かくる足元よ、痛いしやお菊様、明所もあ
しよ數个所の深手、呼たけつても返らぬお命、まだ天道のおひかへか若
子様よ、お怪我もなけれど悲しい中よも心を勵まし、此曲者めに必定
敵、追付て捕へんと思へど遙時も過方角忘れねば證方もあく／＼は骸
取納め沿筐よもと切取し、此黒髪をお妹ひと思し召れて下さりませ、沿
歎きもほ腹立もほ尤だほ尤でござりますひいの、＼＼、いしこらしくほ
供を仕ながら、此様な事よ逢せましたい、手を出してせぬ計、やつぱりお
らが殺しましたも、同じ事主殺しだわいの＼＼、まだ＼＼よなされたと

てお恨^{うらみ}はない。サア突^つきやりませ、切^き刻^{とき}んで下されよと、首差付^{さし}れば泣^{なぐ}を拂^はひ^{拂^はひ}身の言譯^{ごりや}をする及^ひべぬ、少し成共手がしり又成べき事をあせいにぬ、うろたへたか友平といへれてそれよと取出す、守^{まも}り袋^{ふくろ}を手み取て、此中よりいか様な物^{もの}が有ぞ、サア脇^{わき}の緒^をがござります、シテ書付^{かきつけ}は永祿^{えいりゆ}九年五月十日の誕生^{たんじやう}と計^{けい}りますが、手掛り又成ますまいかな、稚^{おさむ}名^なさへも記してあい書付^{かきつけ}あんまりばつと計^{けい}ますが、手がしり又成ませぬか、さはつと計^{けい}ますが、手がしり又の黒髪^{くろかみ}を撫^{なで}つさすりつ肌^{はだ}又添^{まつ}七度^{しちど}結^{むす}んで姉^{ねい}と成六度^{ろくど}契^{ちぎ}りて妹^{めい}といひかへしたる甲斐^{かい}もなき、親の敵を現^{うつ}其夢辨^{わきみべん}へぬ稚子^{おさむ}又さぞや心の引^ひれて迷^{まよ}ふて居^ゐやるで有^ふのふ、迷^{まよ}ふてなりと、今一目姿^{あらわ}形^{かたち}を見せてたも、逢^むたいわいのと聲^{こゑ}を上げくどき、焦^かれて歎^{なげ}きしが漸^よく涙^{なみだ}抑^{おさ}とくめ^だ、そふ玄^{くつ}や、此切髪^{きり}をそへとせば兄弟寄^よ添^{そよ}居^ゐる心、先の世迄^{まことに}はらから^{はらから}の契^{ちぎ}

忘るな長かもじ、其小枕の事迄も未來へ、黃楊の櫛のはみ、解ほどかれぬ
もつれをも、志のぎおふせて勝山と縁儀祝ひし黒髪の色も、つやく鳥
羽玉の、闇こそ幸友平へ、腹存分よ切あべき、一息ほゞ月影の出汐へ
のが身の知死期、苦痛隱せど夫ぞどり、悟りしふ園も氣を張詰（アラカル）天晴健
氣の切腹へ、慥々園が見届た、此世えどざる母様へたとへば用捨有も
せよ、未來えむへするどよ様へ、命捨すへ言譯立まいた、よふ腹切た出
かしたなあといふ物の不便やと、悔み惜めペ友平へ、一期の終り大聲
上（アマ）有がたや忝なや、ふがいない奴めでも家來と思し召べこそ、お歎な
されて下さるし、勿躊躇い罰當り、ヤ譯え成事なら、下郎めぞときのど
ん腹を、百二百切たとて何惜からふ、よしは宥免有もせよ、此様な不吉
者が、大切な敵討え、何とお供が致されませう、淺ましい業さらしと、我
と我身を搔むしり五肺をもめば疵口より、流るゝ血汐紅（アカシ）草葉染（アカシ）なす

血の涙、落たる守の臍の緒を引摺んで眼を見開き、思へゝ腹立や、主
 人の敵、我身の仇、何國も隠れ忍ぶとも、一念通さで置べきかと、怒りの齒
 ふ玄々噛しめ喰さき池水へはたと打込引取息俄もはげしく逆浪打吹
 上吹卷水煙忽お園が懷中も音を啼千鳥香爐の不思議ハいふかしや、池
 水はげしく立登れば、啼音を發する千鳥の香爐もしや吉事か、但しハ凶
 事か、何よもせよ、怪しき業を見聞よな、チハイ行ど云のみせはしない頻
 りよ憎を呼返すハ誰じやぞいやい、ヤ何所から玄や、慥爰も聞へるが
 どうろく戻る銅八は、池の邊りよ聞耳立、何と明智光秀が亡魂じや、
 ハテも其わろが又何でふれを呼返した、ハヤハヤすりや今迄眞實の親と
 思ひおつた小島の郡代京極新左衛門、我を拾ひし養父よて、誠の父は
 明智殿で有たよな、ハ思ひ合せし事こそ有、音成が館みて四法天但馬我
 を見咎め、主君の面ざしよ能似たり、光秀殿の忘れ筐よて有るべしとゆつ

たる詞ひしりくと。今こそ思ひ當つた事、さへしらずしてむざくと。
あつたらしき郎等を失しこそ殘念く併心得がたき。此年月、過行去
て今日只今、呼かけられし子細はいかよ、扱い、山崎の合戦も打負、此所
より命を落す際迄も、帶せられたる蛙丸の名劍久吉が手より渡らん事を悔
みいきどをり是なる池中より隠せしとや、則以首をも此池より洗ひ流せ
し其血汐、こりかたまりし魂魄残り、守護せられたる名劍の、其名を感じ
集つたる、蛙の聲を乍初より、素性を考らせ劍をも譲り與へん所存とな
、有がたや添や、其上より我行末の事迄も、思し召れて久吉より遺恨の刃は
合す共、四海より望をかくるなど、後車のいましめ子を思ふ、父の大恩、
勿躊躇なやと、三拜九拜悦び涙いで亡父の以賜拜領せんと浮草を、かき分
探り當りし名劍、押戴いて拔放せば、劍の氣を得る蛙面の相、猶も頬ぞよ
蛙の聲、又も啼出す香爐の奇特、思はず兩人飛開き互々すかし、見て見ぬ

より、剣を鞘さみ曲者くわの納なり返かつて行先ゆきと向むかへばよくる右左うざ付つけまとばれし、葛つたかづら長ながき、契ちぎりを神かけて、忘れぬ人うしなむひとを今更いまさら、いなしせぬと引ひ留るる、往來むかしを妨さまたげるわりやまあ何なに所ところの者ものが、私わたくしが生うぶれは永祿九年五月十日の誕生たんじょう、ヤハナ夫おとこが又何なにで爰あそみ居ゐどや、ハチね玄くつねや惣嫁そう嫁、ヤ惣嫁そう嫁玄くつねや、サソふでなくバ傍そばへ寄よて抱いだ付つけて見みや玄くつねやんせ、自慢ほほん玄くつねやなけれど伽羅からの香かれ、幾夜いくよ留るても留飽あまかぬ、きだんきだん成氣せいきのないかいなどもたれかしれば、有あがたい初對面はじめながれからはづんだせん鑿さくしん鑿さくしん、斟しん酌しょくなしなし付合ふあふからは、善よい急いそげ玄くつねや、今爰あそで泣なぐして見みたい此懷このごころ、玄くつねこなしやの、肌打明はだるはお前の心中じゆうじゆ、見みたくば見みせう望のぞみが有あか、ア望のぞんで見みたい此剣このけん、アあぶない事ことよしよせい、切きわいの、シリヤ誰だを、ハチ指ゆびを、わしから心中じゆうじゆ見みせるのじやど、いふより早く剣けんの鎧際つばさき、物打うつ玄くつねつかと取頭とりあた渡わたせ渡わたさヒ一二のせめ、帶取艺おび引ひひしぐる計けいり、捨合すりあ、引合ひあ引取ひとりはづみ、拳放こぶしはなれて夕ゆふ顔ほほの棚たなへはからず刎はね、上うへ

れべ、取ふろさんとかけ寄をやらじとさしゆるお園がひはら、土足の當
身よたぢくくくたぢろく隙み、かけ登れば、つゝいて跡よりかいぐ
しく、身の鼠と這上り、互よ搜し尋る太刀、取よりいらつて切かくる強氣
の曲者劣ぬお園打合ふ刀の冰柱のひとく微塵よ碎け飛散みぞ、跡よ玄
さり身を構へ、鍛し刀も名劍の徳よおされて折たる物か、不思議をあ
やしみ音を啼し、其香爐こそ久吉が秘藏の器物と聞たる故、打碎いて習
時の腹いせ、又是なる夕顔の實のりし數の瓢こそ、取も直さず千なり瓢
簞真柴が家の馬印先此様よと小踊りし、只一なぎよ切拂ひ、直よ踏込打
かくるを、ぐぐるい神力くより錬てうくはつしと請留て、今打かけた
る虎亂の太刀切先下りみ打ふろすれ、もしや尋ねる敵かといふ間稻妻
劍の電光ひらりと飛で遠近の霧よ紛るゝ曲者を遁さじものと一足よ
飛で、折しもさへ渡る月の光りを照みて跡を玄たふて退て行

○第八

百八

見へわたる高根くくよ消殘る雪のふやきの音さへも吹あらしたる松
の風いとゝ淋しく杉坂の村山里よ亡人の名をのみ残す石の數邊りよ
立し竹柱芽が軒端もそこくよ尺よもたらぬ草筵内よ音する鐘のこ
ゑ毛谷村の六助が母よおくれし其日より明慧爰よ在すがごとく慶よ
入て悲しみを盡す心ぞ殊勝なり日脚も晝よ程近き山持の樵共戻りか
もつて小家の前六助殿どふじやの仕業の次手よ見廻ますと口ういへ
べ念佛を止チ皆精が出るの煙草でも肴で休ましやれそんなら皆一ぶ
くせうかいよかるくと荷をおろせばサア爰へく幸入ばながわ
いたサ初穂を母者人へお茶湯上てと墓の前備へ置て手を仕へ母者人
ほらうじませ皆深切よ見廻て下さつた、生てなら悦べしやらふよ何
をいふても片便り、母者人が好物故今朝備へたいり物是など入て茶

を參れと、何がなあいを差出す、あられ喰くコレ、檜藏櫻六ハマキヤシカツルもどふ思やる、死あれた婆様ばばの仕合せ者者玄や、一人も一人からと詰構けつこうあ息子むすこを持れた故居きゆられる時から生佛、今石佛いしぶつもなられても、見や玄やれやつぱりあの様よう、四十九日のけふ迄も、三度さんどくこど掠くへてすへ備そなへへられるといふり、果報かほなわろじやないかいの、松兵衛まつひょうえのいやる通りなれど、六助殿ろくすけの孝行こうぎょうがふろひてひどく迷惑めいせきするてや、ソリヤ又またあせみ、さればいの、又また玄げんてもこちの婆様ばばが、僻へきハ不孝者ふこうしゃ玄や、六助ろくすけを見みい六助ろくすけをといひるゝ故ゆゑ、來きて見みればあの通り、何でも昨日きのよの孝行こうぎょうをやらかして見てこまそと、山を休とで打うちかより十日前の孝行こうぎょうを、一時ひととき、掠くへくらい物ものの喰飽くいあき、悦うれびハ仕つかやらいで、そのらめ、仕業しえハせすと役わくも立たつぬ錢せんを遣おひふると小言こごと八百やほ、イヤモッ孝行こうぎょうも自由ゆうじよさず事ことじやないていふの、ハそんあ事ことハいのぬ物もの玄や、どめ様ようよいの志しやろ共とも、逆さからぬが直ただ孝行こうぎょう親おやしの有ううち玄や皆みな隨まよ分ぶん大事だいじよ

かけさんせく。レ、何所も孝行が流行かして、六助丁とこなたの様な
大きあ侍が、母親を負て歩行をよると村での噂まこと聞やこなたの内を尋ねたげな、
大方こりや孝行くらべよ來たのじや有ふ、コレ必共負まいぞや、イ負まい
次手ひで珍めずらしい事が有、此間から端はしより、毛谷村六助と試合しめあして勝たな
ら、知行五百石で抱ふと、殿様おほきさま高札たかふだが立たと國中がは是沙汰さわざ、ソヤ慥そやそ又殿様
が、こなたを家來けらゐさせうとふつしやるを、何ぼでも合点あんてんさあやれぬ故、腹
立ての事じや有、なせ又奉公ほうこうさあやれぬと、問たずべ六助打笑ハタハタかれ玄くわいや
ても出世しゆせいするをいやでいなけれど、元鉄術かんじゆつを覺おぼへたも高良明神たからみょうじんの靈驗れいがん
我わ勝者しゆしゃ又逢むパ奉公ほうこうせよと、神の禁破いんぱられぬ故、どなたへも断りいふて
いるのじやと、聞く皆みな納得なつとし、いか様尤いちよそな事じや、ガそりやそふと
いつ迄爰こゝ居るの玄くわいやぞいの、イヤガから唐からでい三年も居る事そふなが明日あした
の五十日の念佛ねんぶつもやさよやらぬ、今夜いんで其持こころへ、皆みな揃そろふて參さんつ

て下され、シヤ造作玄や、長話しで日ひたける、それ聞てがつくりとひだるなつたたべ立玄やない聞立、もふいますと惚く、が、柴荷てんで、打かたげ籠を、さして歸りける、六助の獨言皆懇な衆玄やな、シタガ母者人、嚙やかましごん玄よ、ドリヤ抹香でも繼ま玄よと立や煙も一筋よ、姿よ似ぬ香爐の薰り、身の埋火の埋もれて尾羽打枯し浪人目背み老たる母と見へ、六十を越や坂道を漸たどり墓近く、ヤ母人、だくほくの山道ふわれてござつても嚙ひ苦勞ちとはでお休みと、おろして敷す菅笠の上、いたり足腰を撫つさすりつ介抱、六助つくぐ感じ入母ひそふなが、お年寄を連まして、寄特なお侍、アれからどれへござりますぞ、コレくお尋ね、預るも他生の縁拙者ハ元上方の浪人者、覽の如く母一人老年の耳へ聞へず、何卒宜しき主取致し、老母を育む種、もと此西國へ下れ共微運の某、有付辻も定らず斯の仕合、見ますればこなたよも

は長髪の財殊々新た成墳墓とす、卒爾ながらは親族よりわしも獨の母
又別れ忌明迄墓の前でせめて香花取ます計夫の近比に愁傷察し入シテ
こなたの所在所へな此麓の毛谷村六助とす者、ナニ其元が六助殿と吐
胸を差黙頭顔打守り不審の六助名を開て濟ぬ顔色何ぞ様子ばしごさ
るかなと尋られて面を上開く目みかゝるも面目なけれどもねば叶ひ
ぬ時宜ちと折入て其元より頼ヤ度義がござるが何とお聞届下されう
か、ハテ何事か玄らぬ共様子よつて頼まれませうア其譯へな成程思召
もいかゞ成共只今もやどく一人の此母、ぶがんの上より百日と限り有
のびやう脳病せめて一日半日も安樂よくらさせ度勤仕を望めど心計詮方盡し
折々幸當國へ来て見れば所立たる國主の高札、毛谷村六助と打勝
なべ五百石の知行充行はんとの義見るよ心へ飛立共聞及びたる六助
殿我辻も一流は立れ共中より及べぬ未熟の某ト有て此儘打過なべ、いつ

を春迎母人の笑ひ顔見る時節もなし、兎やせん角やと思案の終り、所詮
義を捨恥を捨勝負と負て下さる様無体の頼せん物と思ひ詰しも母の
爲、どへいひながら武道とはづれし此願ひ、弓矢神の冥加よりも盡果ん腰
拔武士人でなしとおさげしみも存玄ながら、母故なればちつ共いどへ
ぬ推量有て右の段より聞入下さらば、恩は死でも忘れまじ、限り有老
母が命、見立し後の國主の前、今の子細をナ上腹切て恥辱其時雪ぎ
ナベシ、ひたすらお願ひくと、土よ頭をすり寄て涙と俱みける、六
助の物をもいはず、默然として居たりしが、やゝ有て横手を打遁感心
致した、恥を捨ての孝心それでこそ誠の武士、いかゞも聞届けました
負ませふ、何とおつしやる、イヤサア手練もござらふが、おそらく六助を
打ん者、マ近國より覺ない、我迎も母よかくれ明暮戀しふ存ずる計親
持し身の同然志推量致した、六助こなたにふたれませふ、スリヤ眞實聞

分られ勝負も負て下されんと、有がたいくは恩の此身又餘る悦
 び。シレバ母人様俱もお禮をくどいへど、聞へぬ聲の悲しさ、詞も盡ぬは
 情重て緩く返禮。ヤク是も則親の恩、隨分孝心怠りあくは出世有べ我
 等も大慶隙取内み人や聞片時も早く試合の願ひ再び逢へ表向所へき
 らわぬは浪人、重き深きは仁心、仰々從ひ直様は暇必待ております
 と約束かたき胸と胸解てくだけしきつすい男、供も介抱母親を負する
 負も孝行信義、互の目禮浪人へ別れて歸る元の道、六助跡を見送つて、
 親といふ物の有がたい物じやあ、見ず知らずの侍なれど、誠の心を感
 じた故負る試合を請合たれべ悦びいさんで歸られた、是を思へば親程
 大事の物のない何をするも母への追善、どふで今夜いなずば成まい、
 墓へ水など新玄う替ておこふと小家の内、取出す桶は淺けれど、孝行深
 き谷水の清き流れへ汲み行、春の日も傾く運のはかなさや、何とてかし

る憂難義吉岡一味齋が若黨佐吾平、お菊が、筐稚子を抱けど老の足弱く。
杉坂越えさしかかる、^間麓より走り付たる二人連かますの袖も角
有人相佐五平は立留り、最前から呼かける身共がことか、身共とも
く親仁とも馴じしい事なれど、ちつとこなんも無心が有て麓から付
て來たのじや、^{ハチ}無心とは何の無心、^{ハチ}とぼけまい、人絶した山の中無心
といや知た事じや懷み持て居る路銀が借て貰ひたいと跡と先とを引
抜み直はやらぬ荒島の横みへ太き志かけなり、見て取老幼々こく
笑ひ扱ひうぬら山賊亥やな、^{ハチ}目利の悪い三五日の貯^{たま}ひ有ど銀といふ
て持ひせぬよし有逃も我達も借てくれる銀はない、そのにて早通せ
と引退て行過るを物をもいはず拔打^{ぬき}み、肩先四五寸切下れば、^シとのつけ
けよ反ながら、^間だまし討といふつくい盜賊高の知たる下郎と侮どり
不覺を取し口惜や、^{ハチ}下郎といふ處外者め、吉岡が若黨佐五平門脇儀平

見忘れたか、京極殿と一味の科追放忘られて此ざまあれど切取する
武士の常おのが連てかるいふ菊めがへり出した絹川が小悴そいつ
共ふぶち放すが内匠殿の心体覺悟してくたばりおらふと聞て佐五平
惣りし同門脇儀平となモ老眼故見違へて殘念く敵の荷擔人主人の
仇是式のかすり疵やみく一人死ふかと口よひへど稚子の身の上
いかゞと心ひ空見廻す小家の是幸ちつとの這入てござれと押入て眼
を配ればすかさず二人が切付るを手負ながらも道の佐五平拔放して
切結び二人を相人はたらけ共初太刀の痛いたるよろめく老人切やら突やら
はつるやらなぶり殺しの折も折水汲くみ入て六助が戻りかゝりし此場の
跡様子ゑらねど飛かしり二人がゑりがみ引摶み力き任せ投なげ付けばぎ
やつと計々絶入り六助手負おひを引ひきふこし老人氣を憊なま持たえられ
搦切ふつた最さいちつと早くペ斯ハシますまいコレ老人く旅のふ人と

呼よ生いきられ物ものの得といはず佐五平さごひらが小家こやより指さし手てを合あせ頼たのむくも口くちの内うち深手ふかでの弱よりがつくりとたへ入息いりきぞはかなけれよレく老人おじい人もふ息いきの絶なきたかいとしやのふ何なん亥いや知しぬが小家こやの方ほうを指さして拜まつんだり合あ黙だが行ゆぬと見みやる小家こやの稚子わらわが走はしり出でて死骸しがいの傍そばベいよくと押お動うごかし足あしすり仕つかたるいぢらしさいぢらしさ是これ亥いやあベいよくといふからに定さだめて主おの子こといふ様ような事ことレぼんこへい事ことへないこなたに何なん所ところでども様ようの名な何なんいふぞと尋たずねればかぶりふつて泣なき計けいアまだ辨わきまへの有年うねんでもなし思おもへべく不便ふべなと死死だ人氣遣ひときひさつ亥いやるな此子このこへおれが預あつて親おの手てへ届たどけますサくぼんち是これからかれが連つづいていぬ是これがたり着き物もの迄まで血ちだらけじやといひつしぬがす四身よみの小袖こそで腰こし綻ほきんで稚子わらわを懷いだへ抱入いだきたくましい男おの子こじや泣なきねんくもや寐ねたら嘆なげへ連つづて行ゆとすかす間ま以前まへの惡者しおうね性根せいこん付つけしか起おき上あがりまくら

ぬ何所から出てうせて、何で仕業の邪魔ひろぐ、聞へた、おいらをのめらせ其間銀をうぬがくすねたなそふりさせぬと後抱ゑめ付るを見向もせず調かねいものを誰かいの、起たら山からこいい伯父がシレ隠りよハと身のひけり、前へどつさり、起しも立す、素頭スカウみぢんよ岩の角これよもこりぬ門脇儀平、むちやぶり付を、頭轉倒、胴骨ボロつかと泣出す懷ハグ、泣あくく、ねんくころんくや寐たらかゝへ連て行、踏付られて七轉八倒死骸ガハの谷へ餘念あく我家をさして「立歸る

○第九

勝負の見へた彈正殿だんじやうお手柄てがらく立合召ると早勝かちと見へました、何と曾平治殿違ふた物でござらぬか、いか様軍八殿云る通り適れに手練でござる、六助我よ勝者あらば奉公せんなどし、人もなげ成廣言は最早是でいれまいがなヤモ段々誤アヤミり入ましてござります何が山持ヤマタケの

透間ひへ、在所の者共を相人ひ我流無法の叩き合ひ六助の剣術がよい
の兵法を抜て居るひのと、誰いふとなき取沙汰、べつと蹲立たのが今で
の迷惑、誠の藝、と出合ふてひ中より叶ふ物でひござりませぬ、こひやのこ
ひやの、うりや知た事だ、儕が雜言吐を殿も憎しと思し召ばこそ、六助よ勝れ
し者あらば五百石よて召抱へんと有高札を、所より立置れたてや、すゝ然
る所、鞍馬山の僧正も閉口する劍術者微塵流の親玉が顯れ出し故、殿よ
も甚ほ悦び、則ほ前よおいて両人が立合ひ覽遊ばされたく思し召ど、家
老蘿殿が、今一いきふ呑込だから儕があべらやよて立合せ、打勝よおい
てい召抱へよど、兩人へ見分の役仰付られた、よつぼどむづかしい試合
で有ふと思ひの外、手間も隙も入事か彼城下町の煤取、古疊を叩く
より心安く見へたはい、扱々先生恐れ入た、先衣服を召替られよ、
早くくと廣益よ、吉良流の打形包髮斗目の衣服麻上下、紋付よ着せ

かゆれば、忽見かはす其人柄詞付横柄おもてひら。イキナいきな。そな者をな。仮令打負をなたれば、迫力を落すな、是からが修行の所だから、隨分出精致したがよい、後あとはよく成ふく、コレ先生いらざる御教訓けうくん。お構かまなされな、イ儕わが領分りょうぶんの奴なれば、お慈悲じひを以て深きお咎とがめに有まい、なれど以後いごを急度きゅうど暗だいからふ、コレ家來共乗物是へ、イヤ先生お召なされ、是へ憚のり、やハリ此儘歩行致さふ、イヤチモ只今いまの殿の師範しはん我わが爲よも先生なれば、ひらひら、然らば、免のりうつと乘移のりうつるを、直ま昇かき出すしゆ六尺ろくし、七尺しちし去て師範しはんを得、悦び勇まことみ出て行門送りして、六助ろくすけはつゝくり立て獨言ひとりごと、誰だとも孝行かうぎは仕つかたい物もの見むしらずの、人なれど親おやぢを大事だいじ思おもひて、侍のいひよくい事を打割うちわて頼たのましやつた、其實心じつしんな所ところがぞふも黙止だせがたな、契約けいやくの通り打うちまけて進しんせた今日の試合しひや、必禮ひれい及びべぬぞや、是へもやつぱり親の威光おんがう故玄かげやと思ふて存生の内うち、隨分すべと孝行かうぎを盡つくさつしやりませ、おれが様よう死別れと

いふ物へ何したとてとんとまめしげへないぞいの、必大切よさつしや
れど、いひつゝ見やる畠道、真黒よ成て山賊共、すたゝゝいきせき走り付、
（六助殿内へ這つたく、へじやげたひのく、こちら迄も鼻がへ
しやげたひいの、ハやかましい何の事、玄や何の事といこなたの事、玄や
六助よ勝た者へ抱ふと、殿様から方々へ立て置しやつた高札を、奴共が
皆引ぬいていんだひいの、玄やよつてへじやげたはいのく、ソリヤ何ぞ
あつちの勝手づくで持ていんだ物で有ぞい、イヤくそ夫計じやない六助め
がほううげたとひきつい違ひ、ぶたれふつたが其いぢらしさ、大方骨が碎
たで有、今時分の泣く天窓のかけを尋ねておるで有ふのと、口々ぬか
していよおつたが、こあさんほんまよ負たのかい、喧嘩じや、殿様の意
じやから、勝負をせふといふて來たれど、爰で立合ふての晴立ぬ、殿様
のいひ付ならばに前きおりがよい、小倉からお召なされたら、何時でも

行て勝負せふと退戻したが、それを腹立て悪口いふたので有ぞいやい
そふかいなあ、それ又沒額の其疵きずは、是か、是のあ、夫もあの着物
干し出で、入口の石よ蹴躡竹垣けつまづきたけがきで摺破すりやぶつてのけたのじやど、壁もまつか
い血ちみそみし額押ひたさしきへてくろめる詞、しふく、あがら栗右衛門イチヨウ残り
の衆ら謎なぞが有、六助先生が今の詞とかけて、何と解の、ヤツキ極めて有掛目
よりたんと有干鰯ほじかと解其心こころ、うまた聲じやと思はるゝとよがり切
てぞ歸りける、あいらがあの様よういふの、一手も習ふ師匠シフウじやと思ふ
からの深切しんせき馴染なじみのもの共とも愛疎あいそつかされても、人の爲ため成事ならいと
ひのせぬ併得しがく心した事ながら、負まわたと思やがつくりと力あいや、是これ扱
腹迄はらごろが急いそみ力ぢからなふ成た程ほどの、ラットよしく、昨日庄屋きのやから貰もらふたぼた餅もち
鼠ねずみが引ひすべやつぱり其儘有あで有あふ、孤殿こどんも喰くさふと、表おもて出てそこ
らを見廻まわし、コレ孤殿戻もどらしやれ、それがけへやなど落おちまいぞ、是これ又何所

又遊んで居る事ぞ、孤殿く。やく戻つた所で彼ぼた餅があくべ手持ふ
さた先有かないか見てこ。ふと子供もさへも偽りを、いれぬ生得生抜し。
梅と椿の大木を、直に住家の門柱立そふ花も八重ぶきの霞の屋根も簾
の壁草のとぼそよ不む老女、外面も干たる四身の小袖、心得すと差覗
き、見入る家の一壁も、鐵棒鼻捻山刀半弓なんとかけ置し、山立ふても
有んかと心も納め志とやかよ、心願有て國の神社を廻る年寄の一
人旅脚を痛め迷惑致す、暫しの舍りは免なれど、案内聞より六助は、納戸
を出て迎へ入、見れば老人の旅勞れ嘸難義、宿のせず共体足程の事
へ、緩りつと勝手次第是れく添い、左様ならばと打くつろぎ圍爐裏
と緩り罐子の下さしくべる木もほたく、と心置なき饗應よ、やのふ
亭主とふやら獨住の様も見請ましたが左様かの、但し兩親でもござ
るかの、やく母一人ござつたれど、近き頃相果られ、今ではほんの寡ぐら

。それへ不自由みござらふ、何と物はいふて見あじやがわしを親み
さつしやれぬか、斯う見た所が、丁どよさそふな親子ではあいかいのと。
すつかりした事いふた顔、どふやら小氣味悪じやれな^間、座興も旅の
うさはらし、^{テモ}氣の輕いお年寄ぢやのふ、^ヤコレ座興じやない、眞實親み成
ませふ、そりや又なせな、^ヤ心ざまのたくましそふなこなたと見込で
來た事じや物、まんざら無手でい來ぬはいの、^レ爰み四五十両程はしつ
かり土産も持て居るしまだ其上み味い金設けの相談も有^ハい^シ、早
ふ親子み成て何もかも覆^{かぶ}かくしなし、打明て談合する氣はないかい
のと、金から取入一詮議^{せんぎ}と、せけ共せかぬ小黙頭^{うつ}、品^{ひき}も寄たら談合もせ
う、親みもせう、かとつくりとおれが心の極る迄^き退屈ながらあの一間
で、^マゆつくりと待たがよい、夫ならとんど腰^{こし}すへて、やんがて孝行^{からく}請ま
せうと、互み探る肌刀^{はだ}、身内としらで暫く^{うなが}疑ひあひの破障子引立^{ひきだて}てこ

そ入よける跡みは不審とつ置つ思案吹散春風み、梅が香、志たひ鶯の囁
る聲よ法花經も、既よ暮ぬと告ぬらん、刻限も違へず鶯がもふ鳥屋よ
來たいか様鳥でさへ法花經と囁るよ、身のせはしさみ取紛れ念佛もろ
くくよ得ゆさぬ、勿体ないく、や母者人如在玄や何んせぬぞや、必
呵つて下さるなど、位牌よ向ひ合掌し、在すがごとき孝行を感する天の
加護やがて、深き恵みも有ねべし、一心不乱他念なく打鳴したる里んの
音み、さそはれ歸る稚子の、目もどしほくなき母と、玄らでこがるゝ子
心よ、聞覺へてや拾ひ取、小石つみては、嘆様と、したゞ涙の雨やさめ、草葉
よ落ておのづから、手向の水の哀なる、さいの河原を目前よ、見やる六助
こらへ兼其儘かけをり抱き上げ、尤玄やく尤玄やひやい、どふぞ逢
してやりたさよ、何所じやと問どわかつれしれす、勿論預けさしやつた
人は、只一言も得いはぬ、最期、何國の誰が駄かはしらねど、いたいけみ

まほらしう、伯父様く、とまひす物憎まふとて是が憎まれうか可愛や
く、コレ伯父様から様へなせござらぬから様ほしい、かよ様なふと泣叫
ぶ、コレ其様又親をこひこがれて、煩ひやなどしてくれなよ、ひよつと死だ
ら今様よ、さいの河原で石の數一重積でハ父を志たひ、二重積では母
親を尋こがれて六道の、地藏菩薩よ取すがり、父よ母よと泣といやいふ
れも二人の親よ離れ、女房もなけれハ子供同然ほんよ親よ逢れる程な
らば、さいの河原ハまだな事、八万地獄の底へでも、尋ねて行たい逢たい
物、付辨へない心から、逢たがるのハ無理じやない、道理じやく可愛
やと抱きめく、聲立て男泣よぞ歎きしが、漸涙ふり拂ひ、悪い作殿、お
れ迄をうしなかして泣した程よのナアくさつぱりと機嫌を直して、コレ昨
日買ってやつた疣太鼓、それを叩いて遊べ志やれ、おれがもりしてやりま
せう、イヤく太鼓いいやじや、おどやねむたい、かよ様と寐たいわいのふ、寐

さしてほしいと稚子のわやくもぐれんせ泣寐入^サ、コリヤもふ寐入たそふ
な、ハチ子供といふ者い、とんと罪のない佛様で、有いいの、ドレ伯父が寐さ
してやらふかと、俱^{とも}ふしどの草筵^{くよむら}、折節竹の音^ねもさへて、吹暮^{くら}しなる虚
無僧の宿求んと籬^{さがき}より、髪^{かみ}干^かて有此四身^しハ、慥^{まことに}と覺有小袖^{こづ}と取ん
とするをうしろから、こりや盜人^{ぬすびと}めと二三人^{にふり}攔^はみかしるを寄付^{よせつけ}す、振廻^{ふりまわ}
したる尺八^{しゃくは}の、だけた手利^{てき}、ふうく共^み肩^{けん}間^ま肩^{けん}先腕^{さきわて}骨脊^{ほね}骨^{ほね}ぶちのめさ
れてちりト^ト、皆我先と逃歸^{とうき}る、六助内より屹度^{いつど}目を付^つ見れば賣僧^{まいそう}の
贋虛無僧、よつ程味^{おほきみ}をやりふつたと、なじる詞^{こと}を聞咎^{きみ}め^{ナニ}贋虛無僧の賣^{まい}
僧^{そう}とい、ハチ捉^{つか}え違ふた身の廻りといひ第一宗門の姿^{すがた}で喧嘩^{けんか}口論^{こうろん}あらぬ
筈、又常人が埋不尽^{じん}をいひかけても、隨分如法^{じゆぽう}と濟せよとい、本山からの
戒^{いわめ}でない、其上尺八の本手^{ふたて}は嘘^{うそ}す、今時流行雜^{ざら}な手^てを嘘^{うそ}歩行^{あるき}からひ、贋者^{ばせ}
といふたが誤りか、山賊^{やが}仕て居れど、夫程の事は知^して居る、何^{どう}でござ

す梵論字と詞み、一癖去者と見て取こなたも笠脱捨、其返答仕て聞ん
 と、ずつと入る替筒み、仕込し短刀拔打を、ひらりとかへし玄つかと取、
 ちよつと見るから女との悟つた故み咎て見たが、敵と云るし覺へな
 いぞ、覺ないどり比怯あやつ、杉坂の邊りみて五十有餘の侍を手よか
 け、路銀は勿論妹が忘れ篋の稚子迄奪ひ取た山賊め赦しはせじと振波
 どきするどき切先無刀の六助抜つくべりつあしらふ手垂遁さじ物と
 付廻す屏風の内より伯母様かとかけ出る稚子見て洟り、不審ながらも
 小脇又引抱心赦さず身構へたり。コレ伯父様伯母様が来て玄や、太鼓叩いて
 見せていのふ、合点じやく、後よく、今玄や、早ふくとぐはん
 せない。まひせば廻る子可愛がり、持遊び箱を引寄て、今鳴すぞ、コレ聞玄
 やれや、廿三日は母者人の四十九日、杉坂の墓所を戻りがけ、泥坊めが二
 三人、五十計な侍を切やら突やらあぶり殺し、見るよ見兼て片端からの

めらせ。介抱すれど物も得いはず、其子を指差して拜んだばつかりがつ
くり往生。目前敵の盜人めら、踏殺して谷へ蹴込、連て戻つて其子と問ど
差別はなし、そこで思ひ付たあの着物、門口と干て置たれ其子の所縁を
知ふ爲心が早ふ届いたか現在の伯母に又渡せばこつちも安堵、よふま
あ尋ねてごんしたのと、悦々胸よ偽りなき眞實見ゆれど猶も根を押し
かと其詞又違ひないかキ何が剛ふて偽りいふくどい尋ねみや及ば
ぬ事、シテこなさんの名ハ何といふ、六助と云まする、ヤ何とサンケイ毛谷村の
六助といふ山賊でござり、アこりや八重垣流の達人と音も聞へた六助
様か、ミド鞠れて取落す、子ハ狼狽へて逃込共、志らず構はず六助を、うつ
かり眺め、見とれ居る。今様云ても疑ひ晴ず、やつぱり憎を敵とする
か、わつけもあり何の家來の一人や二人どふなど仕たがよいいいな
と前より寄添後より立、マア適よい殿は、マ何よりか落付たイヤくまだ落付れ

ぬ事が有いいの、女房めらこがござりますかへ、子細有て女房めらこに持ませぬ、ありやせまいがな、あいかへく、嬉やく、それでほんまに落付た、ゴレinaeお前の女房めらこのわたゑじやぞへ、女房めらこじやくとかきたくる程今迄も、逢たふ思ふた重荷おもねがあり、三衣袋さんひとうも茶袋ぢとうも仕て見たがりの水仕わざ、袈裟けさも襴はきとかけ徳利酒とくりしゅもあげふし夕飯ゆふさんの、搊せうと盃こしらへの下薪たきぎの玄めり焼えもりやきかぬる火ふき竹ひづきたけと尺八しゃくぱを取違とちがへて、おかしがり獨ひとり機嫌きげん六助ろくすけ、承知内儀じゆうちぎのふり賣うりを持餘もちあましたかむつと顔おもてとんと譯わけが知ぬ、けふ程ときけふな日ひはない、見ず知ずのわろ達わろだつが、親おやぢみならふの暁あか、玄やのど、押入女房おひれめらこの手引てび玄あくた、あの子もめつたよ油斷ゆだんはあらぬ、全体ぜんたいこなたは、誰だれがやと、尋ねよはつと心付こころば、俄にわかよ行儀改あんぎかいめて、いふべき事ことも跡あとや先常さきつねとし様さまのふつしやるよ、豊前とよぜんの國毛谷村の六助ろくすけといふ者こそ、妙術勝まされし器量きりょうの若者わがし、行末ゆきのそちと妻合めあせ、吉岡の家よしおかを相續さうぞくさせんと、音信通おとづれ

し置たるぞと仰を守る此年月二十の上を越ながら眉を其儘いかな事
鐵漿も含まぬ恥かしさ推量なされて下さんせ^開そこもとの吉岡一味
齋殿の娘の園でござります。コレ方たりと手を取て無理より上座へ押直
し先何か差置か尋ねナたいに親父一味齋殿は賢勝で今又お勤なさ
るかは老駄の事なれば、自然のお勞れみて、若^レ病氣など發り^レせぬか
と寐ても覺ても心あらぬは是れ一と問れて園の涙ぐみ申もあへまい
事ながらおいとしやとく様に隣國周防の山口といふ所でな、何が何
とどふなされた、口惜ややみくと歎し討れてはかないに最期^{ヤマシテ}
其相人^{ラバヒテ}の町人士民^{ソクジン}でよも有まい假名^{ハメ}何と何國の誰、同じ家中^ス名を
得たる劔術師範^{ヨリ}の京極内匠^{シテ}此豊前へ來られし歟の在所^{アリ}當國と
知てか但し知らず^アカサ所^ア方^アと身をやつし、いふといひれぬ憂艱
難、尋ね搜せざ敵の行衛^{カニ}けふが日迄も知ませぬはいな、^カはつと計ふと

うと座し拳を握り悔み泣、園は取分け悲さをやるせ涙のくどき事、ほん
よ浮世といひながら身よ憂事のかく計重る物か父上の、歟を門出よ可
愛や弟は盲目の儘ならぬ身を悔死跡よ見捨て古郷を出るもぢりぐ
はなれぐ、有家を搜す其内よ、悲しや妹も剣の難父上のみかそもやそ
も二人三人があちきない刃の霜と消残る母とわたしが憂苦勞つらい、
悲しい恥しいなりも形もいとひなく雨露雪の深山路や野末よある一
つ家よ、若や隠れて居やうかと、人なき道よ、日を暮しさまよい歩行親と
子が、便りあい身の上もなき便りの人よ廻り逢わたしが心の奥底を明
すは二世の我夫、必見捨て下さんすな可愛と思ふて賜はれとあまへ歎
きて伏玄づむ悲歎の涙六助もかゝる憂よは猶更よ思ひ忘れぬ一昔、彦
山の麓にて目馴ぬ老翁よまみへしが高良の神の使なりと兵法印可の
一巻を下されし。其老翁こそ吉岡殿と察せし事ハ彼巻の、奥よありく

は姓名書添へられしにこなたの事夫婦と成て吉岡の、家名相續致せよ
と六助ごときのつたなき藝傳へ聞れて有がたや、神の使と偽つて、印可
を與へ其上より汝又勝べき者あらば、それより隨ひ身を納め、末長久より榮へ
よど教訓有りしは後より迄我慢を押さゆる心情、たゞへん方もなき大恩、
肉より玄み骨より通つて忘られず、母だより見送る上からへ尋ね登つて恩を
謝し師のほ顔をよしよしと拜せんものと思ひしも、皆むだ事と成たる
かゝり、殘念や悔しやな、せめての筐師の片われあらあつかしやとか園を
拜し、飛走る涙はらくらく、腸をたつ思ひよて玄たい歎くぞ不便なり
時より障子のうち玄ひぶき、師匠を玄たふ誠こそ、遙より届き冥途より閻
浮より歸る一味齋對面せんと聞ゆれば、思ひがけなくお園が拘り、そふ
おつ玄やるの母様かと、嬉しさとつかひ押開く、内によつて以前の老女、
柔和の面皺の波瀬着なし稚子の手を引連て立出るを見るよりはつと

飛玄さり、師の後室との夢いさしか存せぬ事とて最前へ、ふこつのあし
らい無禮の段偏ひどく免下されかしと誤り入てぞ平伏す。のふよつき
よ逢た其時ハ、聾殿とも姑共、互よ玄らねば他人も同然今こそ志んみ泣
寄し、親子が爲み鉄の立通したる娘か操不便と思ひ睦じふ夫婦又成
て下さらば、本望とぐるよ疑ひもなき我夫の此魂聾引出よと差出せば
ミ、この有がたき師の筐辭退ゆさず頂戴せんと押戴し献之の、盃三
九度からず、古た生娘けふよりハ手折せ初る花嫁は母も悦ぶ其所へ、爰
玄やくと袖仲間遠慮。骸戸板よのせ、どやくと昇込で。六助殿聞
玄やませ、廿三日の事で有たがよ、此斧右衛門のおばくが見へぬとて、仲
間中が手分をしての、テ、テ何が所よ方よを尋ね歩行、よふくと杉坂の
土橋の下で見付た所がよ、此様なふかいこ縄を引ばらせ、むごく殺して
有ましたよ、歎が取てやりたけれど、うら共で、何として、ミ、そこで頬

むの六助殿といふとかけおり死骸の傍立寄てとつくと見、すりや此死骸はそちが母か、是が、眉^{まゆ}と皺^{しわ}思案の体^{もと}と相^{あわ}仲間^よ、斧右衛門玄めりふさずと頼みやれど引おこされて泣^{なき}やくり、^{アイ}皆のかいやる通りじやよ、敵を取て下させ、死なしやるはしか其^{ひる}晝^よ間^{あん}鹽梅^{しおばい}よふ出来た自慢^{じまん}の鬪^{だん}子^こ、棚^{たな}からころり、其身もころり、手でこねた迫てこねる物が、何ぼう梢^{ひの}が親^{おや}玄^やとして斯^か玄^ややきぱつた枝骨^{枝骨}、ふろさ^ふ桶^{おけ}へ這入ま^いい、這入ともない死出の山^山覺^{おぼつか}東^{とう}なかのふ、婆^ば婆^ば樣^{よう}、^くと呼^よ子^こ鳥^{とり}宿^{どな}よ響^{ひび}き泣^{なき}涙落^{おち}込^{こむ}谷^{くに}水^{みず}容^{うやう}のいと増^{ます}りて見へぬらん、始終^{じじう}とつくと聞すまし、氣遣^{きうつ}ひするな、今の間^まと敵^{てき}おれが取てやる其死骸大事^{だいじ}として、内へいんで香花取^か早^はふ連^{れん}て行^ゆ、早^はふくと六助が、詞^{こと}を精^{せう}々斧右衛門ア、其様^{そのよう}いふて下^{くだ}さるのが、婆様の爲め^めはむ寺様の^て引導^{いんどう}ナ^ア皆の衆^{しゆ}、チ^チヤ^ヤあ人が、いは^はどや、ちつ共^{きづか}氣遣^{きうつ}ひ泣^{なき}顔^{がほ}を、笑^{わら}顔^{がほ}と直^{ただ}し歸^かりける、跡^{あと}

六助無念の顔色、扱ひ、柵が母をたらし込、憤が親と偽つて、孝行ごかしよ
六助を、深い所へやりむつたあ、^ハ思へばく、腹立や、比怯未練の微塵彈
正、憤此儘置べきかと、胸もはりさく怒りのはがみ、庭の青石三尺計思はず
踏込、金剛力、イヤコレ聾殿侍しやれや、こなたの腹を立さつしやる、相人の
苗氏の微塵とや、いかよも、己が流義を其儘よ、氏となしたる微塵彈正、
其流義の名が微塵とな、シテ其者の年輩、三十二三至極の骨柄面体白く
目の内さゑ左の眉、一の黒痣、慥ありく、左の肘二の腕かけて刀疵
扱こそな、同じ家中といひながら、お園といひ此母も見知らぬ敵の人
相書、妹も尋ね其砌書せ置たる此姿繪、まだ其上も妹が死骸の傍も有し
とて、小栗栖村みて友平が後の証據と渡したる此脇の緒の書付、永祿
九年の生れと有月日をくれべ卅四年人相といひ年の比割符の合たは
尋る敵、親の敵菊が仇恨を晴す、今此時嬉しや娘片時も早々母様用意

と勇立いさみたてアコレ一人共アマ侍だ、惜カミみそれと知シタれペ六助が爲ムも師匠の
仇アダコレ氣遣せまい敵アヘ討すガ真鍊當アモニ其先ム木太刀で試合の意趣返し、
ぶつてクぶちのめし、ア請ての敵討ハお袋トドロ女房メイヂいざ一所シテと取出す、破
れ上下手傳ハナタツふて、母ハ腰板ヒダラあてがふ紐ヒモ、お園エニワが取て迄ハシつかりと結ハシルび合た
る妹脊いもせの縁ハシコレ伯父様ハヤシヤばんムも敵討ハしてやチ出かした賢カシヒいク強ツヨいなナマ、
どりや行ハシふかと云ハシより早ハシひらりと庭ハシへ、一足飛ハシコレ智殿ハシル輕カルき相人ハシと侮ハシ
つて、必不覺ハシを取ハシまいぞ、そふ共ハシく欺ハシすム手なし油ハシ斷ハシルなされなこちの
人ハシ、何ハシさく氣遣ハシひ無用ハシ、一旦ハシこそハシ得心ハシよて、負ハシてやつたる蠅ハシ虫ハシ、
謀ハシり取ハシたる五百石抱ハシへられたも我情返ハシつて足ハシを繫ハシぎしは、もつけの幸
塞翁ハシが味ハシふ出合ハシふた妻ハシ姑恨ハシの俱ハシ六助も天地ハシよ慙ハシる義ハシの一宇鬼神ハシと
て京極内匠ハシ我見る目ハシよ一つまみ、玄ハシかしハシ知行戴ハシくうちハシ殿ハシの家ハシ
人ハシ討ハシ得ハシがたし、試合ハシを願ハシひ勝ハシた上直ハシム仇討ハシに免ハシの訴訟ハシ、元首押ハシへ討ハシさす

と實も尖き魂を見極め置し吉岡が眼力達はぬ男者なり、か圖ハ猶も勇立、咲乱たる紅梅の花の一枝折持て、ノヤク我夫、梶原源太景季ハ平家の陣又切入りて譽れを揚し簾の梅、是ハ敵の京極又勝色見する兄花の可愛男へ毒きど、いひつゝいだき付たゞも親も遠慮の手をもち、母も同亥く椿の一枝本望とげた其上で直又八千代の玉椿かはらぬ色の花聲殿、ヤと打連立出る三人が、中又彌三松、ほんそう小倉の領内へ勇すゝんで「出て行

○第十

豊國や小倉又威名立浪の館より、頗て異國又出陣の支度せハしき一家中弓又矢をはげ鐵炮を磨き立たる書院先、大坪軍八堀口曾平太ふ目出た酒の高話し、ナント曾平太殿兼よ廣言吐し毛谷村の六助野郎憎さも憎しと存玄たが、昨日の立合何か子供をなぶる様又打すへた彈正殿恐れ、入

た義玄やござらぬか成程／＼あの様な手者を抱へなされたは第一殿のお仕合、又そこを存じて執持致した貴殿と某適な忠義でござると話しの腰を折からみ、姿もけふぞ大國の君よ師範の勿体顔立出る微塵彈正、ほろ酔機嫌の千鳥足ヨレハ先生存の外の大酒でござるな。イヤモ前より聞いて悦びの御酒宴、何が若侍が取廻し、そこへも頂戴爰へもと去りとはこまり入ましたが、雨中の徒然思はぬ大酒アサヒ、藝アサヒが身を責まするが成程仰の通り、殿様よも殊ないほ悦び、我を迎も大慶至極、此度の異國征罰、日本無双の其元あれど適高名手柄ガラを顯アラへし、久吉公のほ感狀カニビヤウよふ預りなさるゝ、今の事扱／＼ふ浦山しき義でござると、いもねる詞アラ又打點頭成程／＼六十餘州アラ群がる大名、我一ほしがる此彈正、ふ抱へ有た立浪殿の運の強いとテ者各方も異國の戰場サンジヤウ譽ハサシを取すは望次第、拙者がきつと受合ヒタチたと、自慢手譽の鼻高ハサク、時よ立關騷アリ立取次の侍あはた

だしく毛谷村六助彈正様と試合の願ひ取次を頼參りし所叶はぬ由を
 ゆせ共無体込入屹相故先お知せと訴ふれべ、六助めが先生と押て
 試合を望どな、一旦甲乙別れし上無法の願ひ叶はぬ、門外へ退出せ
 異義及ばず打すへよ早く、承ると引返す程なく人音騒がしく、是
 はと見やる庭先へ、こけ込奴口より下れくとせいすれど、耳もかけ
 ず搔手して、お願ひの者でござります、お取次頼ますと、白洲へ通れば
 両人聲かけ、ヤ狼藉也無法者下れく下りおらふ、ヤ私ハ訴訟の者下れ
 ど有ハこなさん方と片手摑の獨投打付ほり付寄付ねば、恐れて皆立
 込す。ヤ狼藉者下りおらふと切刃廻せばぐつとせき立、ヤコレ彈正殿、逢
 たかつたひのく、何よりもくくいふや及ばぬ、今一度誠の立合、
 ャ用意召れとせりかくるを、大坪軍八、ヨリヤ慮外者めが、師範たる彈
 正殿、昨日の勝負、こりもせず恥を忘らぬ山猿め此願ひはお取上ない、

早く立くと、師匠最負の倍押又彈正は玄たり顔、六助わりや何しよ來たやい重て口を利ぬ様玄やつ頬又木太刀の極印、見る度毎身の毛がよだつて个様の願ひは致さぬ筈、何か今大身と成た身共ゆへ、膏藥代又も成ふかと、根が賤しい根生から心得違ひのもがり思案か、夫ならばそふといへ、少し計の合力へ致してくれる程又門前又扣へふれま、むさくろしいさまをして立合くと身の程知ぬうず虫め、身が目通り又叶ぬ早く立^{スリヤ}立合の成ませぬか、立合の願ひ叶はずば、こなたが太切みさつ玄やつた、母様を爰へ出さつしやれ、よもやは是へ出されまいがな、^{ヤイ}くらぬへこりや氣が違つたな、^{ヤイ}狂氣仕てゐるな、^{ヨリヤ}諸國を武者修行^{ヤウ}又偏歷^{ヘンレキ}する此彈正、母を連てよい物か、身へ獨身母へないわい、すりや母もなく立合も成ませぬな、ぐどい最前から身又覺へもあき事共、様様いひかけひろぐ、五百石の^ヒ知行頂戴致し、^ヒ師範たる此彈正又向つ

て過言を吐ひ殿へ慮外致すも同然悪くびこつくがいなや首が飛ぶも
知ぬぞよ早く此場を立歸れ立合の願ひ叶ひませぬな叶ひぬ事じ
や早く立と計ふ六助が時の權威と詮方も無念こたゆる怒りの涙白
砂をうがつ計あり従のあなたえびきの聲諸共入来る轟傳五右
門道名家の執權といはねどあるき其人柄傳五右門殿今日の大領
久吉公は入の由は饗應のは差圖など万事は苦勞千萬でござるコレ微
塵氏仰の如く今日ハ仮初ならぬ貴人のは入來當家の面目此上なしと
互の挨拶事終れば六助白洲又手をつかへ傳五右衛門様へナ上ます
何卒彈正殿と再度の立合仰付られ下さらばコトヤ六助儕合点の悪いな
せ歸らぬ魔利支天の化現といふ共いあといはれぬ彈正殿それ故ニ乙
そほ前も見分を遣されお抱へ有た微塵氏達て願へば其方が身の爲み
も宜しかるまいお怒りの出ぬ内早く歸るが上分別と利害の詞押返し

が、尤ではござりまするが、是よりは深い様子の有義様子も絲瓜もいらぬ、所詮叶ひぬ無益の願ひ、意地ばらば手に見せぬシレ家來共きやつをほ門へ引出せ、畏つたと下部共始より立かしるを右と左へ投退蹴(のけ)退居ながら働く手利の早業、兩人の猶せき立(たて)、僭(こね)こりや手向ひか、手向の段亥やござらぬ、國主を重んじ忍へていれば、付上りの亥た蛇侍、ばたくせすと扣へてござれ、ヤ彈正、僭よくも六助を謀たな、老たる母を育むためと孝行でかしの偽り表裏親持し身にそふこそと義よつて勝を譲り、負てやつた昨日の勝負、母といひし民家の老女後難を思ひ切殺したで有ふがな、かゝる姦賊師範(あさ)、お家の耻辱(ちぢよ)、是へ出て勝負せい、斯いひ出す上から、取持顔のへろく、武士、幾人有ても苦よい致さぬ、木太刀の相伴ほ勝手次第と、白洲(しらす)へどつさり引まくる、袴(はかま)の裾(すそ)も破れ、小口(くち)彈正(だんじやう)ゑせ笑ひ、傳五右衛門殿お聞なされ、イヤ様とのよまい

言、あやつれ狂氣致しておりまする、いか様是へ仰の通り、取のぼしてを
ると見へます、併只今少を承れば、何とやら其元が彼をふ頼なされたと
取所もない事なれ共、爰々一つの氣の毒がござる、微塵彈正六助を恐
れ、再度の試合辭退せしと下さり沙汰有て、いよく殿の恥辱立歸
つてやさぬ様息の根留て遣はされ、何様はや其息の根の留様の斯と
打出す小柄の手裏剣透さぬ六助、何するの玄や、いらざる轉合取置て
尋常よ勝負さつ玄やれ、彈正殿鉛刀の一割とやら、少し味をやり
ましたか貴殿より何として叶ひぬ事へ知てござれど、ほんの心床しなれ
ば立合とやら慮外、指南あされて遣はされ、誰か有木太刀の用意
といやといられぬ詞の打太刀、請流されぬ手詰の勝負、彈正へこまり顔、
物でござるは覽のごく殊の外大酒いたし甚酩酊仕る、其上お眼鏡
を以て相濟だる拙者が手の内再び立合致しなべ、ほ前の眼力くらし杯

と批判有ての甚心外、何どおのくどう致さう成程先生のおつまやる
通りヨシよしなされたがよくござらふ、止ませうか、く、ア去との迷惑
千万と、主人思ひの空鞘の安大小の鑓かり元からこそ笑止なるゲ其
義の苦しさござらぬ、幾度よりも彼めが得心いたす程打すべて遣りさ
るゝが、其元の名の譽れ、則殿もほ満足、ほ酒のいか程參つても、六助
致したいに苦勞ながら只一手、ひらみ先生レと、そやし立られふせう
ト、わざとよろめき庭へ下り立、ヨリ六助相人も成の安けれど、酒興の某、
今日よも限らぬ事、ヨリイサ合点か、合点がいたらそこ立と、いひつゝよつて
だまし打、鯉口四五寸、ヤメつたよ油斷の仕らぬと、取たる腕首突放し、一
眼二心互の身構ヘ、ヤクとかけ聲尖く打込志なへ、入違へて丁と講拂ふ
て引バ又付込、上段下段、右劔左劔、音のどん／＼轟が、眼を配る互の太刀

筋、かた睡を呑だる軍八曾平太秘術を盡せど彈正が請太刀狂ひ崩る。五体六助いらつて疊かけ脊骨腰骨りうくく、南無三寶と兩人が六助目がけ欠寄を、さゑつたりとこきうの當身、右と左へ倒れ伏轟聲かけ、ホ、チ勝負ハ見ヘタ毛谷村六助、日頃の手練適シテ立合計の願ひで有まい、吉岡一味齋が後家娘かくまふ義心、助太刀して彈正を討さんとの心の底へ傳五右衛門承知致して罷有マフニ存知の上ハナス及バ子細有て一味齋が、縁よつながる此六助、敵討の願ひと聞より彈正思案を極め、いかよも、一味齋の老ぼれ親仁、高慢顔がむやくしさ、飛道具みてぶち殺した、敵とねらふやつばらの何人でも返り討既々妹娘のふ菊めも身が心よ隨はぬ故、須磨の浦で寂滅させた、六助うぬも縁者と有べ過れぬ所覺悟カクガひろげと切付る心得六助腰刀、拔合してばつしと請扱開い妹お菊を殺せしもうぬが業とな、重々極悪人生捕カサリとして母女房よ敵討の勝負

さす、觀念せよと切結ぶ、刃の光りの稍妻の影がさそふや降ゑきる雨の、
足取入亂れ打合ふ、刀音諸共よ、何とか仕けん六助が刀のほつきと折散ちう
たり、レと投なげやる轟が、覺の業物取る早く、拔放して丁と請うそ心得ぬ師匠
を譲りの一腰、折しは不思議と怪しみながら、又打合す白刃と白刃、二打
三打合す間も、同じく打折微塵が手の内、けしとむ所を拜打、さしつたり
と傍成飛石、苦もあく取て請たる強勢きよせい、奇妙めう、曹孟德さうめいとくが青虹の寶劍
よひどしく、白刃を打折し彈正が所持の刀、夕陽を尅して雨を呼燒刃よひかげのの
顯はす虹の形數千の蛙鳴叫かわさきさけぶは、實誠小田の重寶、蛙丸の劍の威德
いか成名作名劍も此劍このつるぎと合す時は、忽折るこつと聞傳へしが、不思議を眼
前見し事よと、詞は膽きもよこたゆる彈正、討取刃とうとりのの付入六助、鏃元くわいんしつかど、
ム、すりやお尋ねの蛙丸、是を所持する微塵彈正びじんとうぜい、問迄もなく謀反むほんの殘黨ざんとう
黨、春永亡び給ひし後、明智あけちが手へ渡りし名劍、隠し持たる微塵彈正、儕とも

顯はす喜怒骨は明智が血脉請繼證跡、何と違ひは有まいがと、星をさいたる明智の眼力、神力加はる六助が程よくもぎ取蛙丸、傳五右衛門も差出せば、六助出かした、最早遁れぬ微塵彈正尋常も覺悟せいと、遠の轟よく見出した、推察の通り父が無念を散ぜん爲、立浪家へ入込しは、久吉よ近寄て怨をふくせん我大望斯顯はれし上からい彈正が死物狂ひ、館の奴原撫切と眼配つてつゝ立たり、兼て用意や仕たりけん、組子の大勢得物引さげ追取卷、轟聲かけゝ者共、太切成國家の科人、廣庭へ退出し取逃さぬ様擲取、ハッと一度も組子共遁さぬやらぬとひ亥めいたり、ヤーチよこざいあ蚊蜻蛉めら、此世の暇をくれんずと、切立く手を碎き奥庭さして追ふて行跡も六助兩手を突、蛙丸の名劍はからずも手も入上の此寸功も敵討也免なし下されよと、餘義なき願ひも傳五右衛門尤成訴訟なれ共彈正の大切成科人、土民の手へ渡がたし、元來主人春時殿懇

望の汝成共、高良明神の告より勝りし者又仕へん望幸かな、今日大領
お成なれば上覽を願ひ、諸大名の内より置て名有勇者を片家より立、角
力の勝負の神慮より任せ主取せよ、蛙丸を奪返せし功を以て、敵討の請合
たりいかゞくと轟が始終を計る取さばき、六助ぞくく小踊りし面
白し／＼望所の主君定め、畏り奉ると即座の領掌此身の願ひ、本望遂は
今之間と悦び勇折こそ有久吉公の出入とのしめく聲、アレ六助仙桃花咲
時來れり直様用意と願す内心得小姓が白臺だい又積卷絹の勝色を、乞やん
と玄めたる取まはし、一ふり振出す古木の松、兩腕両足踏ならず、追か相
撲伊達男能見の宿彌の昔もをさく劣らぬ鬪相撲、漸氣の付堀口大
坪うろく眼より前後を忘れ切てかゝるを傳五右門、かはす間拔間蛭蝶
の二人ほ四つ又朱の浪打て捨たる手の内より通か見事併此兩人をか
手討みなされては、イヤツちつ共苦しうない彈正より荷擔人せし人非人、蛙丸

の切味、敵討の血祭りよし、早くほ前へ土俵入と、清むる刀化粧紙、四本柱
のほ家老よつれて、ほ前へ「出よける、數年」の積悪身を責て立浪の廣庭よ
多勢を相手よ微塵彈正、一流立るさしもの働き捕人もあぐんで見へた
る所へ、春時の下知を請欠付る轟傳五右衛門（同）、彈正逆反の殘黨、其罪遁
れず、轟が搦取腕を廻せと十てい振上詰寄たり。ボソ誰彼の相手は嫌ひぬ、
冥途の道連イサ來いと又も二人が挑合四方を圍組子の人數暫く時をう
つす内、一もなくさんよ砂煙馳來る使番（同）、扱も六助ほ前よおいて相撲の勝
負、第一番よ田中の舊臣井富三郎、取付る間もなくそつ首落し、二ぱんの
兩國笛部野九郎、只一刻よ刎飛され赤面せき立三ばん手、盛尾の郎等別
所貞宗、力を盡せど奇代の六助、一聲叫べば土俵の外、投付られて入替る、
片岡宮田郡（同）の一統家中よ勝れし勇士共、息をも繼つがせず立合ど、或は矢筈
肩すかしわをりむさう無双の神力、廿六ばんつけ投皆六助が勝相撲

とや捨てぞ、引かへす。いさぎよしく、相撲終らば敵討しおめんは赦免ひつじやうめんの必定繩ひつじやうき。
目の恥辱を請んより、武士の冥加めいがと覺悟せよ、彈正何としいへせも果す
ア敵討アも、絲瓜へちまもいらぬ、刃向ふやつ原ぶち放し久吉の猿冠者さるくわじやめ、素頭取
て父の孝養邪魔せすと立去とひるまぬ我慢蘿がまんがしと差圖さしこよ組子の面
面、卷て捕んとつく棒差股ぼうさすまた、請流し切拂ひ爰がせんどし働きけるアつゞいて
ての勝相撲毛谷村六助けふたに、卅七番の割付の主急いで立合たてあと行司
が詞溜ことなまり、佐藤の家臣萬園右門六尺ゆたかの大男力も嘸さそと白綾しらあやの下
帶おびゑつかと前まへよ一禮、ゆらりくと土俵の内、勝ほこつたる六助が劣おど
らぬ大兵顔見合せ、じつと互ひよ居合腰あいごし程よく行司が引園ひきはんとたける園
右門、押出さんとヨリヤ神變かみかわふしきの六助が、どつこい動うたかぬ兩足りんそくの金輪際きんりんざい
より生抜はなぬくとく、肘ひじがらみを振ほどき、ゑいとかけ聲諸共に、地ひいき打
たる園右衛門、砂さまぶれて負相撲、各とつとさしめきて暫く鳴なりも止やまざ

りける、溜りの内々聲高く、飛入くくと自身名乗て出たるゝ、小兵あ
がらも福島の、ほ内々名を得し桂市兵衛、拾ふてくれんと力瘤五尺また
らぬ方あんぺい健氣けんざい、も又不敵也、六助よつと打笑ひ、搆ゆたかよ待か
くる、相圖の團扇引やいな、遅しと四つ手よ引組だる雪降ゆきお、積る松が根よ
からみ付たる桂が手だれ、惣身の力を腕よ入、大の男をしめ付く、持出
さんと釣上つりある、シヤものくしと六助が勵ます一聲雷いかづちの落るがごとく押
付け、さしもの市兵衛たもち得ず、尻居しりゐよどつさり六助へ又もわけた
る團扇の譽れ、割付も卅八番目、侍もふけたる三浦又藏實さねも加藤正清の
股肱こうごうと目立て見よけり、ほ棟敷とうしきを始とし諸侯の面おもて、息いきを詰、これや結び
の關相撲かんじょうぶと、鳴なりを乞こづめて見物有、さつと引取團扇の風、力くらべ根ねくら
べ秘術ひじゆつを盡していどみ合、神明擁護ようごの金剛力、さしもの又藏あとくわ、持餘あまし危く
見ゆれば、主人正清、棟敷とうしきを聲高く、ヤア六助、最早勝負も是一番、敵討の願

ひ叶ふ太切成此相撲、心を付よと數への詞。又と六助正清の智仁の一言
磐石^{はんじやく}ふ、押るも如くたぢくく、心も折る片膝^{ひざ}ハ三世の縁の禮義始、上
下一度ふ譽る聲、感心の聲一時ふ浪の打來る如く也、正清俱ふ感じ入、數
番の働き六助が勇猛、今もしてハ我良臣、貴田孫兵衛と改名し、忠勤怠る
事なけれど、稱美の詞ふ有がた涙、潛りふ扣^{ひか}へし母ふ幸、お園諸共かけ付
て、お手柄^{くわい}此上の敵討^に免のお願ひ、恨^{うらみ}を晴す^{はらす}ハ今の間と、詞少く取
形^{かたち}も行義正しき武家^{そだち}育、六助も前^{まへ}向^{むか}ひ、是こそ一味齋^{かず}が後家娘^{むすめ}、微塵
彈正^{たんじやう}と敵討^にの勝負仰付^{あつつけられ}下さる様と恐れ入て言上す、^{まづ}其義^のハ氣遣
ふ事なけれど、尋ね求る蛙丸手^{うなづき}ふ入しも汝^なが働き、轟傳五右衛門^{ごしや}ふ付^{はせ}
討^うの用意せさせ置たれば、かしこへふもむき本望^{ほのぞ}とげよ、則君^{そなへ}のふ帶刀
汝^なへ下し置るも間、有がたく頂戴^{てうだい}せよと、吹舉^{すいよ}の^は太刀取次^{とぎ}にて孫兵衛
へ給りける、時の面目身の冥加^{みやげ}生^ま世^よの^は厚恩首尾能^{よき}本望^{ほのぞ}とげ終り、

唐高麗迄に供して馬前と報じ奉らんと三拜九拜拜領の刀の名作名大將、いそふれやつと正清の詞の加勢百万騎勇すんで「かけりゆく

○第十一

既と角觚の勝負もおさまる番數響る聲、磯打浪と動搖し、山河と轟傳五右衛門、仁義の吹舉と敵討は免ありしと聞傳へ、馳あつまつたる見物ども、さしも廣野と充満し錐を立べき壘もなし、斯て毛谷村六助の相撲の場所より、改名し貴田孫兵衛と勇有て猛き骨柄美を盡す、大小流石万卒を覆ふ器量の弓取風、ゆうくと出來れば、毛谷村の柴薙が出世仕た振見よくと、前後を取巻人群集孫兵衛屹度見廻し、騒し、旁今日の大切の敵討、斯群つてハ勝負の妨、片寄開けと制され共、向ふにもう勢一人の聲どかねばまつかせど、並玄げりたる大木の松を両手と一ゆすりぐつと引ぬき横倒し、行馬と仕たる怪力と舌を震ひし諸見物一度と

志んと志づまれり、一期の晴と義と勇む吉岡が妻娘彌三松が手をとり、
どりと行馬の内へ入來り、^{コレ}孫兵衛殿、^{イマ}智殿、上様のふ影より
數日の仇をけふの今、晴すと思へば嬉ふて胸つぼらしい、此嬉しさを見
やうより一味齋殿ながらへてござるなら、何此上有ふぞといふよお圍
も打志ほれわたし迎もこがれたる殿^{シム}に逢敵アリも、廻り逢たる嬉し
さもお菊が無事で居やるなら、^{アリ}可愛や是が筐かと、孫が手を取抱志
め顔見合せて親と子が不覺の涙スルみかきくれてさめく、泣こそ哀れな
る、孫兵衛の聲^{ナメ}力^{ナメ}まし^ヤ二人共見苦しき諄言^{ハシ}、早く敵の首ひつさげ、未來
よおはす先生の位牌^{イハ}と手向る氣ハジなきかと、制する詞ハシ兩人が實ハセもと
涙押拂ひ、人目を慙る紅の絹^{ハタ}ひしごいて花襷^{ハタ}用意ハシり、成所へ、久吉
公より檢使として、加藤虎之助正清、先を拂つて入來れべ、今ぞ籠中の取
圍カニまれ、猶も我慢の彈正が歩むものつさのさばかり頬跡ハラ引添傳五右衛

門行馬の内へ入折から息を切て衣川彌三郎、加藤が前より兩手を突、拙者
 義の郡音成が家來衣川彌三郎とす者、一味齋が妻子の者今日當所より仇
 討をいたす條、主人音成承り厚情を謝せん爲、一つ又見届の爲名代
 として、只今參上仕ると、ナ述れバ母娘殿の上意の今更又も涙の嬉し
 泣、正清の威儀を正し、^{ヨレバ} は叮嚀の使者、人も多き彌三郎殿差越れ
 しの兼てより、餘所ならぬ敵と聞、音成公の心配感に入てひと情の道
 も疎からぬ實^{サハ} 真柴家の良臣なり、正清重ねて轟^{カミツ} よ打向ひ、双方支度調
 なハハ早く勝負と嚴重なる差圖^{シダ} よはつと傳五右衛門立上つて聲高く、
 早く双方立合べし、互よ疲るゝ其時の太鼓をもつて走らさん間、未練の
 勵きなき様^{ヨリ} と、下知よつゝ立微塵彈正^{ミクニ} 成上りの嬪^{ミツバチ} を後楯、此彈正を討
 んどい不敵至極の女原不便なれ共返り討覺悟ひろげと惡言を聞てよ
 つと母お幸^{ヨハラ} 武士よ似合ぬ無益の多言、初太刀母がと立向へば、彈正も

悪びれず、水をたゞへし器の傍ぢりと歩み寄。春より早く打破茶碗、長刀かい込いかゝ京極、汝が非道の手よからしり、むなしく果たる一味齋が妻ふ幸サア尋常々勝負ハハと身がまへたり、ア詞婆婆ふさげの雲雀婆雲雀親父が跡追て地獄へ行と腰刀、拔手も見せず切付るを透さず請留刎返すを。直ハナ付入虚ハシマフ實ハラフ秘術を盡して戦へ共するどき刃よふ幸が請身危く見ゆれば相圖の太鼓、どつこい下部が押わくれべ跡へかはつて新手のふ園小太刀をふつて立向ふ後ハタハタ孫兵衛聲をかけ、せいてひ事を仕損ハシムする心をしづめて戦へと力を付る夫の前、諸萬人より晴ハセの場と胸を定めて聲勵まし、日外都ハリツゼヤモコト小栗櫛ハラスみて、それと名乘ハマラで逃失たる臆病武士の京極内匠、親の敵妹が敵、一時よはらす恨の刃、首差延て請取といふより早く打刃丁ハサウケと請留嘲笑ハサギ、引さかれめが味をやる勿体乍ら京極がふ手ふろさるゝ太刀の下、なくなりふらふと一打ハタハタ、微塵流義の手

を盡す落花狼藉八重垣の、流義流水濶みなき、手練の切先てふくく
時を移して「打合たりがすり手負へども強氣の内匠、まつしくらゝ切ま
くれべ思ひず跡へたぢろくお園、あはやと見る内孫兵衛が刃の電光けでんこうけ
さ切よ、すつぱと肩先彈正がうんとのめるを、おこしも立す、夫の敵父の
仇、かゝ様の敵覺へたかど、孫も俱もすだくく、よ切て悦ぶ母娘、といめを
さしもの馬印、大旗おほたな、小旗日ひ映、じ風かぜ、あびきてへんぱんたり、正清いは
んで手柄てぬぎ、ア行列は大將の、お出船と相見ゆる、衣川殿は國元へ二人
の女を同道あれ、轟氏の跡の義をよろ乞くはからい召るべし、孫兵衛
ハ本陣へと急ぐ加藤虎之助、威勢は千里万里とも類ひまれなる大勇
猛すぐみ三韓征伐の、出陣急ぐいさみあし、天の征する悪人は、亡びて小
氣味吉岡が、運々勝たる敵討誓ちかひの助太刀太刀風ふう、おさまり、なびく天
が下、恵みよそだつ竹の葉の榮さかへさかふる君が代しろの万まん歳としぞぞいわぬ

ける

天明六年午閏十月十八日

彦山權現誓仇討終

明治廿四年九月十二日印刷
明治廿四年九月十四日出版

我加藤内
發行者兼
發飜行刻

日本橋區通四丁目四番地

印刷者
瀧川三代太郎

日本橋區新和泉町一番地

發兌金櫻堂

日本橋區通四丁目四番地